沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第54集

首　里　城　跡

― 御内原北地区発掘調査報告書（I）―

平成22（2010）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡

―御内原北地区発掘調査報告書（I）―　平成二十二（二〇一〇）年三月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第54集

首　里　城　跡

― 御内原北地区発掘調査報告書（I）―

平成22（2010）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、国営沖縄記念公園整備に伴い、沖縄記念公園事務所より委託を受け、沖縄県教育庁文化課が平成11（1999）年度に調査をした区域と、沖縄県立埋蔵文化財センターによる平成19（2007）年度の発掘調査成果を、平成20（2008）年度から平成21（2009）年度にかけ、沖縄県立埋蔵文化財センターがまとめたものです。

調査地点は正殿の裏手、御内原と称される区域で、国王やその親族の私的空間とされていた場所にあたり、調査区とした御内原北地区には、かつて女官居室等の建物が存在していたとされています。

発掘調査により、女官居室の遺構は近代以降の開発や沖縄戦により改変されたため残されていなかったものの、一部の区域では淑順門へ至る石階段や、15世紀の基壇を有する礎石建物跡、その基盤を構成する造成遺構等が検出され、首里城の変遷を辿る上で欠かせない情報が得られています。また、これと同時に中国産陶磁器や武具等のほか、多様な自然遺物も得られており、往事の生活を偲ばせています。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成22（2010）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　玉　栄　直

巻頭図版１　首里城跡（航空写真）

巻頭図版２　平成19年度調査区遠景（東側上空より・画像右が北）

巻頭図版３　平成19年度調査区遠景（南側上空より・画像上が北）

巻頭図版４　造成遺構（5層）出土遺物

巻頭図版5　基壇状遺構・礎石建物跡（3層表面）出土遺物

巻頭図版６　石積み６出土遺物

巻頭図版７　シーリ遺構出土遺物

例　言

1．本報告書は、国営沖縄記念公園首里城地区の整備に伴い、平成11（1999）年度及び平成19（2007）年度に実施した御内原北地区の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2．発掘調査は沖縄県教育委員会文化課が平成11（1999）年度、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成19（2007）年度に実施し、資料整理作業は沖縄県立埋蔵文化財センターが平成20（2008）年度から平成21（2009）年度に実施した。両事業とも内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所より委託を受けての実施である。

3．資料整理作業にあたり、調査体制の項で記した多くの方々に資料の同定・整理指導をいただいた。記して謝意を表したい。

4．本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1／25,000地形図を使用した。

5．本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて日本測地系に基づくものである。

6．本報告書の編集は、調査体制の項で記した多くの方々の多大な協力のもと仲座久宜が行い、各章の執筆は次のとおり行った。また、この中で外部執筆及び共著の原稿については、文頭に氏名及び所属を記した

仲座久宜　第１章～第４章、第５章第14節・第22節・第27節1・5・6、第７章
新垣　力　第５章第１節～第７節・第９節
岸本竹美　第５章第８節～第11節・第18節
大堀皓平　第２章、第５章第12節・第13節・第16節～第21節
知念隆博　第５章第15節
大城　歩　第５章第14節
上原　静　第５章第23節・第24節
黒住耐二　第５章第25節・第27節２
菅原広史　第５章第26節・第27節1・3
片桐千亜紀・土肥直美　第５章第27節４
パリノ・サーヴェイ　第６章

7．本書に掲載した調査時の写真撮影は、平成11（1999）年度分が上地博、平成19（2007）年度分を仲座久宜が行い、出土遺物の写真撮影は矢舟章浩、伊禮若菜、伊佐えりなが行い、銭貨の軟X線撮影は知念隆博が行った。

8．発掘調査で得られた出土品、図面、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　次

序

巻頭図版

例 言

第１章　調査に至る経緯
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1

第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査の概要
　第１節　調査区の設定 …… 12
　第２節　調査経過 …… 16

第４章　層序・遺構・主な遺物
　第１節　層序と主な遺物 …… 21
　第２節　遺構と主な遺物 …… 34

第５章　遺 物
　第１節　中国産青磁 …… 100
　第２節　中国産白磁 …… 124
　第３節　中国産染付 …… 136
　第４節　中国産褐釉陶器・無釉陶器 …… 160
　第５節　タイ産褐釉陶器 …… 174
　第６節　その他の輸入陶磁器 …… 184
　第７節　本土産陶磁器 …… 204
　第８節　沖縄産施釉陶器 …… 224
　第９節　沖縄産無釉陶器 …… 240
　第 10 節　陶質土器 …… 264
　第 11 節　瓦質土器 …… 274
　第 12 節　土器・カムィヤキ …… 284
　第 13 節　土製品・坩堝 …… 292
　第 14 節　金属製品 …… 296
　第 15 節　銭貨 …… 314
　第 16 節　煙管 …… 324
　第 17 節　円盤状製品 …… 330
　第 18 節　玉類・玉製品・ガラス製品 …… 334
　第 19 節　貝・パイプウニ製品 …… 338
　第 20 節　骨製品 …… 342
　第 21 節　石製品・石造製品 …… 346
　第 22 節　木製品 …… 354
　第 23 節　屋瓦 …… 355
　第 24 節　塼 …… 422
　第 25 節　貝類遺体 …… 440
　第 26 節　脊椎動物遺体 …… 452
　第 27 節　シーリ遺構内の自然遺物 …… 470

第６章　自然化学分析 …… 499

第７章　総 括 …… 512

報告書抄録

図目次

第１図　沖縄本島の位置図 …… 6
第２図　首里城跡の位置及び周辺の遺跡 …… 7
第３図　調査区域図 …… 8
第４図　調査区域拡大 …… 8
第５図　旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図 …… 10
第６図　「旧首里城図」（阪谷図） …… 11
第７図　「旧琉球大学校舎配置図」 …… 11
第８図　グリッド設定図 …… 13
第９図　土層図 …… 22
第10図　層序・遺構模式図 …… 24
第11図　表土・撹乱層出土遺物１ …… 26
第12図　表土・撹乱層出土遺物２ …… 27
第13図　第２層出土遺物 …… 28
第14図　第６層・第７層出土遺物 …… 31
第15図　黄褐色土出土遺物 …… 33
第16図　遺構配置図 …… 35
第17図　石積み１平面図① …… 37
第18図　石積み１平面図② …… 38
第19図　石積み２① …… 41
第20図　石積み２② …… 42
第21図　石積み１・２間栗石内出土遺物 …… 46
第22図　石積み４出土遺物 …… 47
第23図　石積み３ …… 48
第24図　石積み４ …… 49
第25図　石積み３・５出土遺物 …… 50
第26図　石積み５ …… 51
第27図　石積み６ …… 52
第28図　石積み６出土遺物 …… 55
第29図　石積み７ …… 56
第30図　造成遺構（石積み２南側栗石）出土遺物 …… 58
第31図　造成遺構（５層）出土遺物１ …… 59
第32図　造成遺構（５層）出土遺物２ …… 60
第33図　造成遺構１ …… 61
第34図　造成遺構２ …… 62
第35図　基壇状遺構・側溝 …… 71
第36図　礎石建物跡１平面図 …… 77
第37図　礎石建物跡２ …… 78
第38図　基壇状遺構・礎石建物跡（3層表面）出土遺物 …… 80
第39図　方形落ち込み出土遺物 …… 81
第40図　淑順門南側遺構 …… 83
第41図　シーリ遺構 …… 88
第42図　シーリ遺構出土遺物 …… 91
第43図　台形状石組み平面図１（西側） …… 93
第44図　台形状遺構平面図２ …… 94
第45図　台形状遺構平面図３ …… 95
第46図　埋甕遺構出土遺物 …… 98
第47図　埋甕遺構 …… 99
第48図　中国産青磁１ …… 110
第49図　中国産青磁２ …… 112
第50図　中国産青磁３ …… 114
第51図　中国産青磁４ …… 116
第52図　中国産青磁５ …… 118
第53図　中国産青磁６ …… 120
第54図　中国産青磁７ …… 122
第55図　中国産白磁１ …… 130
第56図　中国産白磁２ …… 132
第57図　中国産白磁３ …… 134
第58図　中国産染付１ …… 146
第59図　中国産染付２ …… 148
第60図　中国産染付３ …… 150
第61図　中国産染付４ …… 152
第62図　中国産染付５ …… 154
第63図　中国産染付６ …… 156
第64図　中国産染付７ …… 158
第65図　中国産褐釉陶器１ …… 164
第66図　中国産褐釉陶器２ …… 166
第67図　中国産褐釉陶器３ …… 168
第68図　中国産褐釉陶器４ …… 170
第69図　中国産褐釉陶器５・無釉陶器 …… 172
第70図　タイ産褐釉陶器１ …… 178
第71図　タイ産褐釉陶器２ …… 180
第72図　タイ産褐釉陶器３ …… 182
第73図　その他の輸入陶磁器１ …… 190
第74図　その他の輸入陶磁器２ …… 92
第75図　その他の輸入陶磁器３ …… 194
第76図　その他の輸入陶磁器４ …… 196

第77図　その他の輸入陶磁器５ …… 198
第78図　その他の輸入陶磁器６ …… 200
第79図　その他の輸入陶磁器７ …… 202
第80図　本土産陶磁器１ …… 212
第81図　本土産陶磁器２ …… 214
第82図　本土産陶磁器３ …… 216
第83図　本土産陶磁器４ …… 218
第84図　本土産陶磁器５ …… 220
第85図　本土産陶磁器６ …… 222
第86図　沖縄産施釉陶器１ …… 230
第87図　沖縄産施釉陶器２ …… 232
第88図　沖縄産施釉陶器３ …… 234
第89図　沖縄産施釉陶器４ …… 236
第90図　沖縄産施釉陶器５ …… 238
第91図　沖縄産無釉陶器１ …… 248
第92図　沖縄産無釉陶器２ …… 250
第93図　沖縄産無釉陶器３ …… 252
第94図　沖縄産無釉陶器４ …… 254
第95図　沖縄産無釉陶器５ …… 256
第96図　沖縄産無釉陶器６ …… 258
第97図　沖縄産無釉陶器７ …… 260
第98図　沖縄産無釉陶器８ …… 262
第99図　陶質土器１ …… 268
第100図　陶質土器２ …… 270
第101図　陶質土器３ …… 272
第102図　瓦質土器１ …… 276
第103図　瓦質土器２ …… 278
第104図　瓦質土器３ …… 280
第105図　瓦質土器４ …… 282
第106図　土器１ …… 288
第107図　土器２・カムィヤキ …… 290
第108図　土製品・坩堝 …… 294
第109図　釘の部位名称 …… 296
第110図　錠前・鍵の部位名称 …… 297
第111図　兜の立物復元図 …… 298
第112図　金属製品１ …… 306
第113図　金属製品２ …… 308
第114図　金属製品３ …… 310
第115図　金属製品４ …… 312
第116図　銭貨１ …… 318
第117図　銭貨２ …… 320
第118図　銭貨３ …… 322
第119図　煙管の部位名称 …… 324
第120図　煙管 …… 328
第121図　円盤状製品 …… 332
第122図　玉髄製小杯 …… 334
第123図　玉類・ガラス製品 …… 336
第124図　貝・パイプウニ製品 …… 340
第125図　骨製品 …… 344
第126図　石製品１ …… 348
第127図　石製品２ …… 350
第128図　石造製品 …… 352
第129図　雁振瓦の分類 …… 356
第130図　ヘラ描き印の位置 …… 359
第131図　明朝系丸瓦（印あり分類表） …… 360
第132図　屋瓦１　高麗系軒平瓦・平瓦、
大和系軒丸瓦・軒平瓦 …… 372
第133図　屋瓦２　大和系丸瓦（１） …… 374
第134図　屋瓦３　大和系丸瓦（２） …… 376
第135図　屋瓦４　大和系丸瓦（３）・平瓦（１） …… 378
第136図　屋瓦５　大和系平瓦（２） …… 380
第137図　屋瓦６　大和系平瓦（３）・雁振瓦（１） …… 382
第138図　屋瓦７　大和系雁振瓦（２）・役瓦 …… 384
第139図　屋瓦８　明朝系軒丸瓦（１） …… 386
第140図　屋瓦９　明朝系軒丸瓦（２） …… 388
第141図　屋瓦10　明朝系軒丸瓦（３）・軒平瓦（１） …… 390
第142図　屋瓦11　明朝系軒平瓦（２） …… 392
第143図　屋瓦12　明朝系軒平瓦（３） …… 394
第144図　屋瓦13　明朝系丸瓦（１） …… 396
第145図　屋瓦14　明朝系丸瓦（２） …… 398
第146図　屋瓦15　明朝系丸瓦（３） …… 400
第147図　屋瓦16　明朝系丸瓦（４） …… 402
第148図　屋瓦17　明朝系丸瓦（５） …… 404
第149図　屋瓦18　明朝系丸瓦（６） …… 406
第150図　屋瓦19　明朝系丸瓦（７） …… 408
第151図　屋瓦20　明朝系平瓦（１） …… 410
第152図　屋瓦21　明朝系平瓦（２） …… 412
第153図　屋瓦22　明朝系平瓦（３） …… 414
第154図　屋瓦23　明朝系役瓦（１） …… 416
第155図　屋瓦24　明朝系役瓦（２） …… 418
第156図　屋瓦25　明朝系役瓦（３） …… 420
第157図　塼の刻印位置（側面模式図） …… 424

第158図　塼１ …… 428
第159図　塼２ …… 430
第160図　塼３ …… 432
第161図　塼４ …… 434
第162図　塼５ …… 436
第163図　塼６ …… 438
第164図　貝類遺体の種組成 …… 443
第165図　貝類遺体の生息場所類型組成 …… 443
第166図　土壌サンプル中の陸産貝類種組成 … 475
第167図　脊椎動物遺体組成 …… 491
第168図　魚類組成 …… 491
第169図　ハタ科歯骨計測値分布 …… 492
第170図　クロダイ属前上顎骨計測値分布 …… 492
第171図　クロダイ属歯骨計測値分布 …… 492
第172図　フエフキダイ科前上顎骨計測値分布 … 492
第173図　フエフキダイ科歯骨計測値分布 …… 492
第174図　ベラ科前上顎骨計測値分布 …… 493
第175図　ベラ科歯骨計測値分布 …… 493
第176図　アオブダイ属前上顎骨計測値分布 …… 493
第177図　アオブダイ属歯骨計測値分布 …… 493
第178図　魚類椎骨計測値分布 …… 493
第179図　歯種別数量 …… 494
第180図　糞石の部位及び名称 …… 497
第181図　糞石のＸ線回折図 …… 506
第182図　遺構平面図と横内家資料平面図の重ね図 … 513
第183図　礎石建物跡の想定図 …… 516

表 目 次

第 1 表　新旧グリッド対照表 …… 12
第 2 表　層序・遺構・遺物の概要一覧 …… 25
第 3 表　中国産青磁観察一覧１ …… 102
第 4 表　中国産青磁観察一覧２ …… 103
第 5 表　中国産青磁観察一覧３ …… 104
第 6 表　中国産青磁観察一覧４ …… 105
第 7 表　中国産青磁観察一覧５ …… 106
第 8 表　中国産青磁観察一覧６ …… 107
第 9 表　中国産青磁観察一覧７ …… 108
第10表　中国産青磁観察一覧８ …… 109
第11表　中国産白磁観察一覧１ …… 125
第12表　中国産白磁観察一覧２ …… 126
第13表　中国産白磁観察一覧３ …… 127
第14表　中国産白磁観察一覧４ …… 128
第15表　中国産白磁観察一覧５ …… 129
第16表　中国産染付観察一覧１ …… 137
第17表　中国産染付観察一覧２ …… 138
第18表　中国産染付観察一覧３ …… 139
第19表　中国産染付観察一覧４ …… 140
第20表　中国産染付観察一覧５ …… 141
第21表　中国産染付観察一覧６ …… 142
第22表　中国産染付観察一覧７ …… 143
第23表　中国産染付観察一覧８ …… 144
第24表　中国産染付観察一覧９ …… 145
第25表　中国産褐釉陶器観察一覧１ …… 160
第26表　中国産褐釉陶器観察一覧２ …… 161
第27表　中国産褐釉陶器観察一覧３ …… 162
第28表　中国産褐釉４・無釉陶器観察一覧 … 163
第29表　タイ産褐釉陶器観察一覧１ …… 174
第30表　タイ産褐釉陶器観察一覧２ …… 175
第31表　タイ産褐釉陶器観察一覧３ …… 176
第32表　タイ産褐釉陶器観察一覧４ …… 177
第33表　その他の輸入陶磁器観察一覧１ …… 185
第34表　その他の輸入陶磁器観察一覧２ …… 186
第35表　その他の輸入陶磁器観察一覧３ …… 187
第36表　その他の輸入陶磁器観察一覧４ …… 188
第37表　その他の輸入陶磁器観察一覧５ …… 189
第38表　本土産陶磁器観察一覧１ …… 205
第39表　本土産陶磁器観察一覧２ …… 206
第40表　本土産陶磁器観察一覧３ …… 207
第41表　本土産陶磁器観察一覧４ …… 208
第42表　本土産陶磁器観察一覧５ …… 209
第43表　本土産陶磁器観察一覧６ …… 210
第44表　本土産陶磁器観察一覧７ …… 211
第45表　沖縄産施釉陶器観察一覧１ …… 226
第46表　沖縄産施釉陶器観察一覧２ …… 227
第47表　沖縄産施釉陶器観察一覧３ …… 228
第48表　沖縄産施釉陶器観察一覧４ …… 229

第49表　沖縄産無釉陶器観察一覧１ …… 242
第50表　沖縄産無釉陶器観察一覧２ …… 243
第51表　沖縄産無釉陶器観察一覧３ …… 244
第52表　沖縄産無釉陶器観察一覧４ …… 245
第53表　沖縄産無釉陶器観察一覧５ …… 246
第54表　沖縄産無釉陶器観察一覧６ …… 247
第55表　陶質土器観察一覧１ …… 265
第56表　陶質土器観察一覧２ …… 266
第57表　陶質土器観察一覧３ …… 267
第58表　瓦質土器観察一覧 …… 275
第59表　土器・カムィヤキ観察一覧１ …… 285
第60表　土器・カムィヤキ観察一覧２ …… 286
第61表　土器・カムィヤキ観察一覧３ …… 287
第62表　土製品・坩堝観察一覧 …… 293
第63表　金属製品観察一覧１ …… 299
第64表　金属製品観察一覧２ …… 300
第65表　金属製品観察一覧３ …… 301
第66表　金属製品観察一覧４ …… 302
第67表　金属製品観察一覧５ …… 303
第68表　金属製品観察一覧６ …… 304
第69表　金属製品観察一覧７ …… 305
第70表　銭貨観察一覧１ …… 315
第71表　銭貨観察一覧２ …… 316
第72表　銭貨観察一覧３ …… 317
第73表　煙管観察一覧 …… 327
第74表　円盤状製品観察一覧 …… 331
第75表　玉類・玉製品・ガラス製品観察一覧 … 335
第76表　貝・パイプウニ製品観察一覧 …… 339
第77表　骨製品観察一覧 …… 343
第78表　石製品・石造製品観察一覧 …… 347
第79表　大和系平瓦側面部の種類と説明 …… 356
第80表　丸瓦のヘラ描の種類と説明 …… 359
第81表　丸瓦の色調とヘラ描 …… 359
第82表　屋瓦観察一覧１ …… 363
第83表　屋瓦観察一覧２ …… 364
第84表　屋瓦観察一覧３ …… 365
第85表　屋瓦観察一覧４ …… 366
第86表　屋瓦観察一覧５ …… 367
第87表　屋瓦観察一覧６ …… 368
第88表　屋瓦観察一覧７ …… 369
第89表　屋瓦観察一覧８ …… 370
第90表　屋瓦観察一覧９ …… 371
第91表　塼の刻印・ヘラ描の種類と説明 …… 424
第92表　塼の色調と刻印・ヘラ描 …… 424
第93表　塼観察一覧１ …… 426
第94表　塼観察一覧２ …… 427
第95表　ピックアップ法で得られた貝類遺体
　　リストと最少個体数 …… 441
第96表　脊椎動物遺体一覧 …… 452
第97表　出土獣骨一覧表（H11）１ …… 455
第98表　出土獣骨一覧表（H11）２ …… 456
第99表　獣骨ピックアップ資料一覧（H19）… 457
第100表　イノシシ・ブタ計測値一覧１ …… 458
第101表　イノシシ・ブタ計測値一覧２ …… 459
第102表　イヌ計測値一覧 …… 459
第103表　ウマ計測値一覧 …… 459
第104表　ヤギ計測値一覧 …… 460
第105表　ウシ計測値一覧 …… 460
第106表　シーリ遺構内土壌サンプル一覧 …… 471
第107表　土壌サンプル総量・層序別分析量 … 471
第108表　シーリ遺構内土壌サンプルの詳細 … 472
第109表　土壌サンプルの貝類遺体等の詳細 … 473
第110表　ピックアップ法で得られた貝類 …… 475
第111表　土壌サンプルのヤスデ類・種実数 … 475
第112表　シーリ遺構ピックアップ資料集計表（魚骨）… 484
第113表　水洗選別資料からの遺物の集計 …… 485
第114表　最少個体数および同定標本数 …… 486
第115表　シーリ遺構水洗選別資料集計表（5㎜）…… 487
第116表　シーリ遺構水洗選別資料集計表（9.5㎜）…… 488
第117表　シーリ遺構水洗選別資料集計表（9.5-4㎜）… 488
第118表　シーリ遺構水洗選別資料集計表（2.5㎜）…… 488
第119表　シーリ遺構水洗選別資料集計表（4-2㎜）…… 488
第120表　歯の観察一覧 …… 494
第121表　分析試料一覧 …… 499
第122表　放射性炭素年代測定結果 …… 502
第123表　暦年較正結果 …… 502
第124表　微細遺物分析結果 …… 503
第125表　種実同定結果 …… 504
第126表　栽培種の種実計測値 …… 504
第127表　花粉分析・寄生虫卵分析結果 …… 505

図版目次

図版１　平成11年度調査区平面 …… 14
図版２　平成19年度調査区平面 …… 15
図版３　調査経過１（H11） …… 16
図版４　調査経過２（H19） …… 19
図版５　調査経過３（H19） …… 20
図版６　層序 …… 23
図版７　層序に伴う遺物出土状況１ …… 29
図版８　層序に伴う遺物出土状況２ …… 32
図版９　石積み１ …… 39
図版10　石積み２～６平面 …… 43
図版11　石積み２北面立面 …… 44
図版12　石積み２ …… 45
図版13　石積み２～５ …… 53
図版14　石積み６ …… 54
図版15　石積み７ …… 56
図版16　造成遺構・土留め１ …… 63
図版17　造成遺構・土留め２ …… 64
図版18　造成遺構堆積状況・遺物出土状況 …… 65
図版19　第４層上面ピット検出状況（北から） …… 67
図版20　造成遺構・ピット …… 68
図版21　石積み1･2間栗石内遺物出土状況 …… 69
図版22　基壇状遺構・側溝状遺構（H19）１ …… 72
図版23　基壇状遺構・側溝状遺構（H19）２ …… 73
図版24　基壇状遺構・礎石建物跡（H11）３ …… 74
図版25　礎石建物跡（H19）１ …… 76
図版26　礎石建物跡（H19）２ …… 79
図版27　基壇状遺構･礎石建物跡遺物出土状況 …… 81
図版28　淑順門南側遺構１ …… 85
図版29　淑順門南側遺構２ …… 86
図版30　シーリ遺構１ …… 89
図版31　シーリ遺構２ …… 90
図版32　台形状石組み１ …… 96
図版33　台形状石組み２ …… 97
図版34　埋甕遺構 …… 99
図版35　中国産青磁１ …… 111
図版36　中国産青磁２ …… 113
図版37　中国産青磁３ …… 115
図版38　中国産青磁４ …… 117
図版39　中国産青磁５ …… 119
図版40　中国産青磁６ …… 121
図版41　中国産青磁７ …… 123
図版42　中国産白磁１ …… 131
図版43　中国産白磁２ …… 133
図版44　中国産白磁３ …… 135
図版45　中国産染付１ …… 147
図版46　中国産染付２ …… 149
図版47　中国産染付３ …… 151
図版48　中国産染付４ …… 153
図版49　中国産染付５ …… 155
図版50　中国産染付６ …… 157
図版51　中国産染付７ …… 159
図版52　中国産褐釉陶器１ …… 165
図版53　中国産褐釉陶器２ …… 167
図版54　中国産褐釉陶器３ …… 169
図版55　中国産褐釉陶器４ …… 171
図版56　中国産褐釉陶器５・無釉陶器 …… 173
図版57　タイ産褐釉陶器１ …… 179
図版58　タイ産褐釉陶器２ …… 181
図版59　タイ産褐釉陶器３ …… 183
図版60　その他の輸入陶磁器１ …… 191
図版61　その他の輸入陶磁器２ …… 193
図版62　その他の輸入陶磁器３ …… 195
図版63　その他の輸入陶磁器４ …… 197
図版64　その他の輸入陶磁器５ …… 199
図版65　その他の輸入陶磁器６ …… 201
図版66　その他の輸入陶磁器７ …… 203
図版67　本土産陶磁器１ …… 213
図版68　本土産陶磁器２ …… 215
図版69　本土産陶磁器３ …… 217
図版70　本土産陶磁器４ …… 219
図版71　本土産陶磁器５ …… 221
図版72　本土産陶磁器６ …… 223
図版73　沖縄産施釉陶器１ …… 231
図版74　沖縄産施釉陶器２ …… 233
図版75　沖縄産施釉陶器３ …… 235
図版76　沖縄産施釉陶器４ …… 237
図版77　沖縄産施釉陶器５ …… 239
図版78　沖縄産無釉陶器１ …… 249
図版79　沖縄産無釉陶器２ …… 251
図版80　沖縄産無釉陶器３ …… 253
図版81　沖縄産無釉陶器４ …… 255
図版82　沖縄産無釉陶器５ …… 257

図版 83　沖縄産無釉陶器６ …… 259
図版 84　沖縄産無釉陶器７ …… 261
図版 85　沖縄産無釉陶器８ …… 263
図版 86　陶質土器１ …… 269
図版 87　陶質土器２ …… 271
図版 88　陶質土器３ …… 273
図版 89　瓦質土器１ …… 277
図版 90　瓦質土器２ …… 279
図版 91　瓦質土器３ …… 281
図版 92　瓦質土器４ …… 283
図版 93　土器１ …… 289
図版 94　土器２・カムィヤキ …… 291
図版 95　土製品・坩堝 …… 295
図版 96　金属製品１ …… 307
図版 97　金属製品２ …… 309
図版 98　金属製品３ …… 311
図版 99　金属製品４ …… 313
図版100　銭貨１ …… 319
図版101　銭貨２ …… 321
図版102　銭貨３ …… 323
図版103　煙管 …… 329
図版104　円盤状製品 …… 333
図版105　玉髄製小杯 …… 334
図版106　玉類・ガラス製品 …… 337
図版107　貝・パイプウニ製品 …… 341
図版108　骨製品 …… 345
図版109　石製品１ …… 349
図版110　石製品２ …… 351
図版111　石造製品 …… 353
図版112　木製品 …… 354
図版113　屋瓦１　高麗系軒平瓦・平瓦、
大和系軒丸瓦・軒平瓦 … 373
図版114　屋瓦２　大和系丸瓦（１） …… 375
図版115　屋瓦３　大和系丸瓦（２） …… 377
図版116　屋瓦４　大和系丸瓦（3）・平瓦(1) … 379
図版117　屋瓦５　大和系平瓦（２） …… 381
図版118　屋瓦６　大和系平瓦(3)・雁振瓦(1) … 383
図版119　屋瓦７　明朝系雁振瓦（２）・役瓦 …… 385
図版120　屋瓦８　明朝系軒丸瓦（１） …… 387
図版121　屋瓦９　明朝系軒丸瓦（２） …… 389
図版122　屋瓦10　明朝系軒丸瓦(3)・軒平瓦(1) … 391
図版123　屋瓦11　明朝系軒平瓦（２） …… 393
図版124　屋瓦12　明朝系軒平瓦（３） …… 395
図版125　屋瓦13　明朝系丸瓦（１） …… 397
図版126　屋瓦14　明朝系丸瓦（２） …… 399
図版127　屋瓦15　明朝系丸瓦（３） …… 401
図版128　屋瓦16　明朝系丸瓦（４） …… 403
図版129　屋瓦17　明朝系丸瓦（５） …… 405
図版130　屋瓦18　明朝系丸瓦（６） …… 407
図版131　屋瓦19　明朝系丸瓦（７） …… 409
図版132　屋瓦20　明朝系平瓦（１） …… 411
図版133　屋瓦21　明朝系平瓦（２） …… 413
図版134　屋瓦22　明朝系平瓦（３） …… 415
図版135　屋瓦23　明朝系役瓦（１） …… 417
図版136　屋瓦24　明朝系役瓦（２） …… 419
図版137　屋瓦25　明朝系役瓦（３） …… 421
図版138　塼１ …… 429
図版139　塼２ …… 431
図版140　塼３ …… 433
図版141　塼４ …… 435
図版142　塼５ …… 437
図版143　塼６ …… 439
図版144　貝類遺体１　巻貝 …… 445
図版145　貝類遺体２　巻貝 …… 446
図版146　貝類遺体３　巻貝 …… 447
図版147　貝類遺体４　巻貝 …… 448
図版148　貝類遺体５　巻貝・二枚貝 …… 449
図版149　貝類遺体６　二枚貝 …… 450
図版150　貝類遺体７　二枚貝 …… 451
図版151　脊椎動物遺体１　魚（１） …… 461
図版152　脊椎動物遺体２　魚（２） …… 462
図版153　脊椎動物遺体３　魚（３） …… 463
図版154　脊椎動物遺体４　魚（４） …… 464
図版155　脊椎動物遺体５　ウミガメ・ニワトリ … 465
図版156　脊椎動物遺体６　トガリネズミ科・
ネズミ科・イヌ・ネコ …… 466
図版157　脊椎動物遺体７　イノシシ／ブタ …… 467
図版158　脊椎動物遺体８　ウシ …… 468
図版159　脊椎動物遺体９　ウマ・シカ・ヤギ・
ジュゴン・イルカ・クジラ類 …… 469
図版160　フローテーションの状況 …… 470
図版161　ヤスデ類 …… 475
図版162　遊離歯 …… 495
図版163　糞石 …… 498
図版164　糞石・糞石薄片・花粉化石・
寄生虫卵・種実遺体 …… 510
図版165　種実遺体 …… 511

集計表目次（別添CD−ROM）

御内原北地区遺物出土状況（第５章）

人工遺物出土状況（第５章）

第 1 節　中国産青磁出土状況一覧
第 2 節　中国産白磁出土状況一覧
第 3 節　中国産染付出土状況一覧
第 4 節　中国産褐釉・無釉陶器出土状況一覧
第 5 節　タイ産褐釉陶器出土状況一覧
第 6 節　その他の輸入陶磁器出土状況一覧
第 7 節　本土産陶磁器出土状況一覧
第 8 節　沖縄産施釉陶器出土状況一覧
第 9 節　初期沖縄産無釉陶器出土状況一覧
第 9 節　沖縄産無釉陶器出土状況一覧
第10節　陶質土器出土状況一覧
第11節　瓦質土器出土状況一覧
第12節　土器・カムィヤキ出土状況一覧
第13節　土製品・坩堝出土状況一覧
第14節　金属製品出土状況一覧
第14節　鉄釘出土状況一覧
第15節　銭貨出土状況一覧
第16節　煙管出土状況一覧
第17節　円盤状製品出土状況一覧
第18節　玉類・玉製品・ガラス製品出土状況一覧
第19節　貝・パイプウニ製品出土状況一覧
第20節　骨製品出土状況一覧
第21節　石製品・石造製品出土状況一覧
第22節　木製品出土状況一覧
第23節　高麗系瓦出土状況一覧
第23節　大和系軒瓦・雁振瓦出土状況一覧
第23節　大和系丸瓦・平瓦出土状況一覧
第23節　明朝系軒丸瓦出土状況一覧
第23節　明朝系軒平瓦出土状況一覧
第23節　明朝系丸瓦出土状況一覧
第23節　明朝系平瓦出土状況一覧
第23節　明朝系役瓦出土状況一覧
第24節　塼出土状況一覧
(その他)　漆喰製品・漆喰出土状況一覧

自然遺物出土状況（第５章）

第25節　H11　貝類遺体出土状況一覧（二枚貝類等）
第25節　H11　貝類遺体出土状況一覧（腹足類）
第25節　H19　貝類遺体出土状況一覧（二枚貝類等）
第25節　H19　貝類遺体出土状況一覧（腹足類）
第26節　H11　魚骨出土状況一覧
第27節　種子計量表
第27節　糞石計量表

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

首里城内郭地区の整備は、昭和61（1986）年度に国営沖縄記念公園首里城地区として整備されることが閣議決定されたことにより始まる。それ以降、年次的に発掘による遺構確認調査が実施され、その調査成果及び、昭和59（1984）年度に沖縄県により策定された、首里城公園基本計画の理念に基づき復元整備が行われ、現在に至っている。今回報告の対象となる調査は、これまでの経緯をふまえ、国営沖縄記念公園事務所の委託により、平成11（1999）年度は沖縄県教育委員会文化課により行われ、平成19（2007）年度は沖縄県立埋蔵文化財センターにより実施された。

第２節　調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成11（1999）年度及び平成19（2007）年度に実施し、調査報告書作成に係る資料整理業務は、平成20（2008）年度から平成21（2009）年度にかけて実施した。その体制は次のとおりである（職名は当時のもの）。

平成11（1999）年度（発掘調査）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会
　　教 育 長　翁長良盛

事 業 総 括　沖縄県教育庁文化課
　　課　　長　當眞嗣一
　　課長補佐　名嘉政修、千木良芳範
　　副 参 事　知念 勇

事 業 事 務　沖縄県教育庁文化課 管理係
　　管理係主幹兼係長 大浜 節、主査 砂川邦子、當間清美、島袋正都、主任 横山さゆり

事 業 実 施　沖縄県教育庁文化課 史跡整備係
　　事業担当　史跡整備係 係長　盛本 勲
　　調査担当　史跡整備係専門員　上地 博
　　調査補助　発掘調査嘱託員　屋我 洋

発掘調査作業　発掘調査作業員

安次富マサ子、安次嶺政寿、新垣裕子、大田吉光、大城ふさ子、大城良子、
嘉味田千枝子、岸本竹美、喜舎場盛安、幸地ヨシ子、玉城史子、照屋栄子、
仲松雪乃、中村フサ子、真栄城千枝子、宮城澄子、諸見里幸子

平成19（2007）年度（発掘調査）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会

教 育 長　仲村守和

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化課

課　　長　千木良芳範

記念物班　班長　島袋 洋、専門員　瀬戸哲也

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター

所　　長　名嘉政修

総 務 班　班長　瑞慶覧康博

庶 務 班　主査　玉寄秀人、山田美恵子、主任　村吉由美子

調 査 班　班長　岸本義彦、主任　仲座久宜

発掘調査作業　文化財調査嘱託員　天久瑞香、伊集ゆきの、岸本竹美、小橋川剛、玉城照美、
比嘉優子、山田浩久、矢舟章浩

発掘調査作業員　安次富マサ子、石川栄有、浦添美知子、大嶺愛子、川上益子、
栗山盛義、崎濱スエ子、比嘉賀商、比嘉　覚、比嘉洋子、
樋口光子、又吉康和、松門　孝、宮城悦子、安村重保

調査協力者　文化財調査嘱託員　伊藝由希、伊波直樹、大城　歩、天願瑞笑、徳嶺理恵、
仲村　毅、本村麻里衣

発掘調査指導　当 眞 嗣 一（元沖縄県立博物館長）

金 武 正 紀（今帰仁村教育委員会）

上 原　静（沖縄国際大学）

安 原 啓 二（元文化庁調査官）

資料整理指導　上 原　静（沖縄国際大学）

宇田川武久（国立歴史民俗博物館）

平成20（2008）年度（資料整理）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会
　　教 育 長　仲村守和

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化課
　　課　　長　千木良芳範
　　記念物班　班長　島袋 洋、指導主事　久高 建

事業総括･実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　名嘉政修
　　総 務 班　班長　嘉手苅 勤、主査　山田美恵子、主任　村吉由美子
　　調 査 班　班長　岸本義彦、主任　仲座久宜

資料整理作業　文化財調査嘱託員　岸本竹美、大堀皓平
　　資料整理嘱託員　赤嶺雅子、新垣利津代、池原直美、伊藝由希、伊禮若奈、
　　上原園子、上原美穂子、上原留美、大村由美子、荻堂さやか、
　　翁長涼子、我那覇悠子、喜屋武朋子、金城敬子、金城友香、
　　久保田有美、平良貴子、照屋利子、中山まり、比嘉孝子、
　　久田慎子、外間　瞳、又吉純子、森屋明子
　　資料整理作業員　玉城実子、玉那覇美由紀、永玉榮美香、宮里宗彦、弓削典子

整理協力者　文化財調査嘱託員　菅原広史
　　資料整理嘱託員　金城克子、野村知子、比嘉なおみ
　　資料整理作業員　上原博美、宮国さおり

資料整理指導　上原　靜（沖縄国際大学）
　　内野　正（東京都埋蔵文化財センター）
　　大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
　　黒住耐二（千葉県立中央博物館）
　　西本豊弘（国立歴史民俗博物館）
　　福田敏一（東京都埋蔵文化財センター）
　　堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）

平成21（2009）年度（資料整理）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会
　　教 育 長　金武正八郎

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化課
　　課　　長　大城　慧
　　記念物班　班長　島袋 洋、指導主事　久高 建

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　玉栄　直
　　総 務 班　班長　嘉手苅 徹、主任　村吉由美子
　　調 査 班　班長　金城亀信、主任　仲座久宜

資料整理作業　文化財調査嘱託員　岩本さつき、大城歩、大堀皓平、内間慎吾、岸本竹美
　　資料整理嘱託員　赤嶺雅子、上原留美、喜屋武朋子、金城克子、金城敬子、
　　國吉咲子、瑞慶覧尚美、照屋利子、野村知子、比嘉なおみ

整理協力者　調 査 班 主 任　新垣 力、片桐千亜紀、知念隆博
　　文化財調査嘱託員　岩本さつき、内間真吾
　　資料整理嘱託員　新垣利津代、伊藝由希、伊禮若菜、上原園子、上原美穂子、
　　大村由美子、荻堂さやか、金城政史、金城友香、久保田有美、
　　崎原美智子、城間千鶴子、友利映子、仲宗根三枝子、外間　瞳、
　　平良貴子、玉城実子、比嘉登美子、久田慎子、矢舟章弘、吉村綾子
　　資料整理作業員　上地由紀子、具志良子、津多 恵、宮里有季子、又吉志麻子

資料整理指導・助言

上原　靜（沖縄国際大学）
内野　正（東京都埋蔵文化財センター）
大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
萩野康則（千葉県立中央博物館）
久保智康（京都国立博物館）
菅原広史（浦添市教育委員会）
関　明恵（鹿児島県立埋蔵文化財センター）
檀上　寛（京都女子大学）
續　伸一郎（堺市博物館）
樋泉岳二（早稲田大学）
西本豊広（国立歴史民俗博物館）
福田敏一（東京都埋蔵文化財センター）
堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）
向井　亙（タイ・シラパコーン大学大学院）
森　達也（愛知県陶磁資料館）
矢島律子（町田市立博物館）
渡辺芳郎（鹿児島大学）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

首里城跡は、北緯26°13′、東経127°43′付近、那覇市首里当蔵３丁目１番に位置している（第１・２図）。標高は最高で136ｍを測り、那覇市内では弁ヶ嶽に次いで高所に位置するグスク時代（中世）～近代にかけての城跡である。

この首里城の基盤を構成するのは、地質時代区分により第四紀更新世（180－160万年前～1万年前）に区分される琉球石灰岩で、その下位には、鮮新世（500万年前～160万年前）から中新世（2,300万年前～500万年前）に区分される島尻層群が堆積している。表層の透水性が高い琉球石灰岩層に浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ（泥岩・砂岩）で堰き止められ、両者の境界から泉として湧き出すこととなる。この湧水を利用した井泉、樋川は首里の各地に点在し、今日も豊富な湧水量を誇っている。

次に景観をみてみると、首里城の物見台である東西のアザナ、京の内南側からは、北に座喜味城、浦添城、東に久高島、大里城、糸数城、南に多々名グスク、具志頭グスク、西に渡名喜島、粟国島等の四方が遠方まで見渡すことができる。また、この首里城から周辺を見渡せるということは、逆に市街地や海域等の周辺各所から、首里城を仰ぎ見ることができることでもある。このことは遠近を見通せることによる軍事的優位のみならず、貿易船等の船舶入港の確認なども期待でき、国家首都として格好の立地と言える。そしてその存在は、琉球王国の象徴的なモニュメントとしての役割を十分に果たしていたものと思われる。

また、首里城はその北側に虎頭山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ嶽及びナゲーラ川、南に安里川を擁して立地している。蔡温はこの立地に関し、「恭しく玉陵を観るに、国都の高処に発祖し、最も好し」（『球陽』）と述べ、風水思想の観点からも蔵風得水の地として優れた条件を備えているとしている。なお、虎頭山は白虎、弁ヶ嶽は玄武に相当し、特に河川の源流である弁ヶ嶽は「城基発祖の地」とされる。

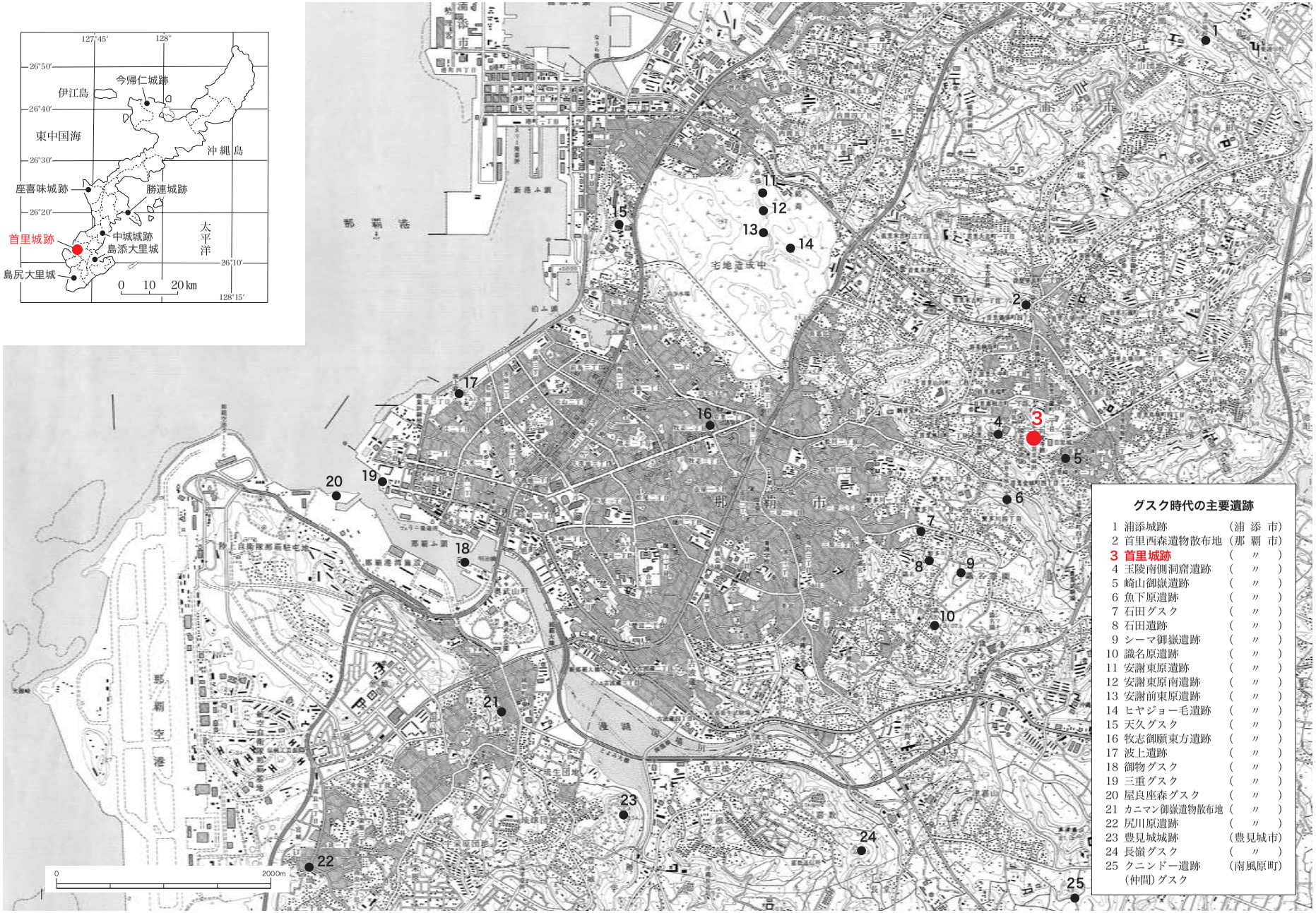
このように首里城の立地環境は、軍事・政治・経済的な実利性と風水思想上の条件をあわせ持つ最良の地であったと言える。

第２節　歴史的環境

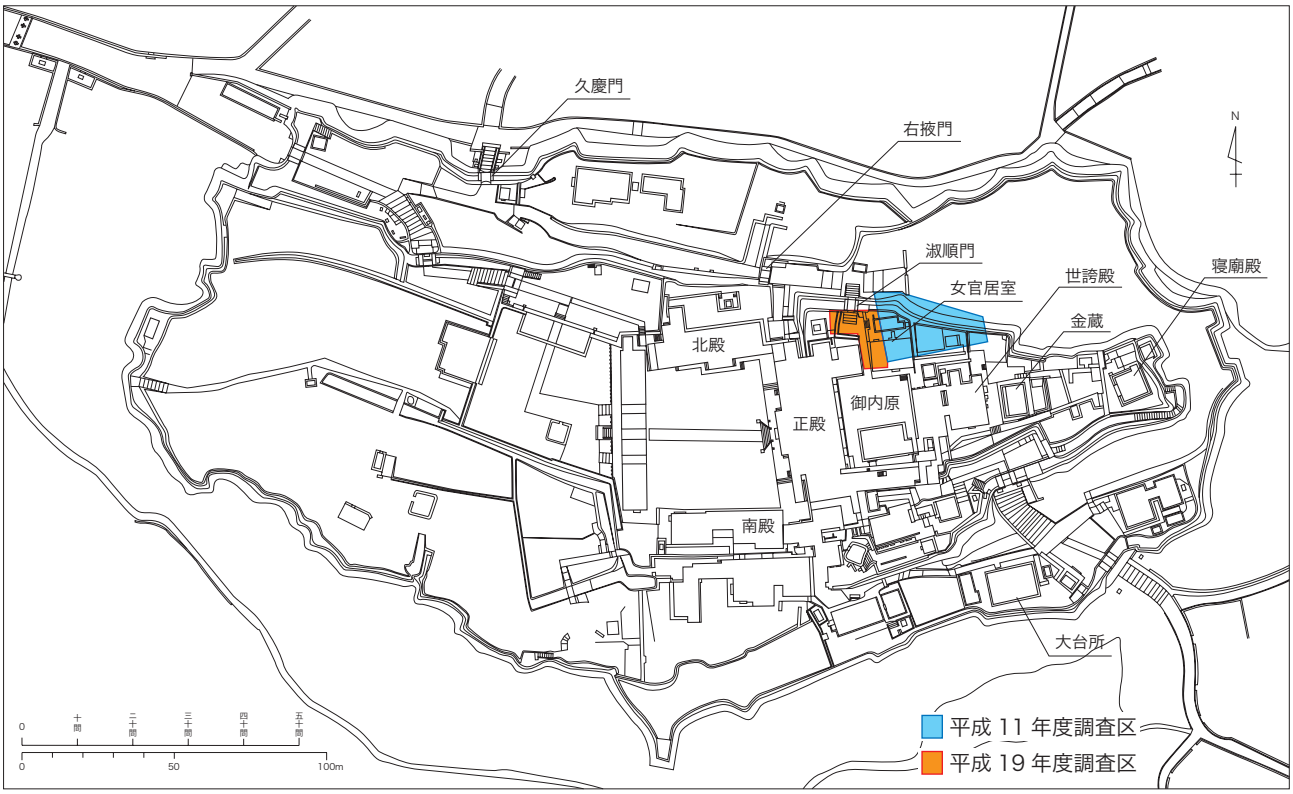
首里城

首里城の創建について、現時点で明確な記録は確認されていないが、文献上最初に表れるのは、1427年建立の安国山樹華木碑記においてである。碑文の概要は、首里城周辺に池（龍潭）を掘り、山を築いて華木を植えたことが記され、今日でいう都市計画・環境整備がすでに行われていたことを示している。この碑文の年代から推して、首里城は尚巴志王代（1422～1439）にはすでに王城としての構えを確立していたと考えられている。その後、1879（明治12）年の首里城明け渡しまで何世紀にもわたり、歴代の王により幾度もの拡張工事が行われるとともに、数回に及ぶ焼失・重修を経て、現在の首里城のフォルムが完成したとされている（第３図）。

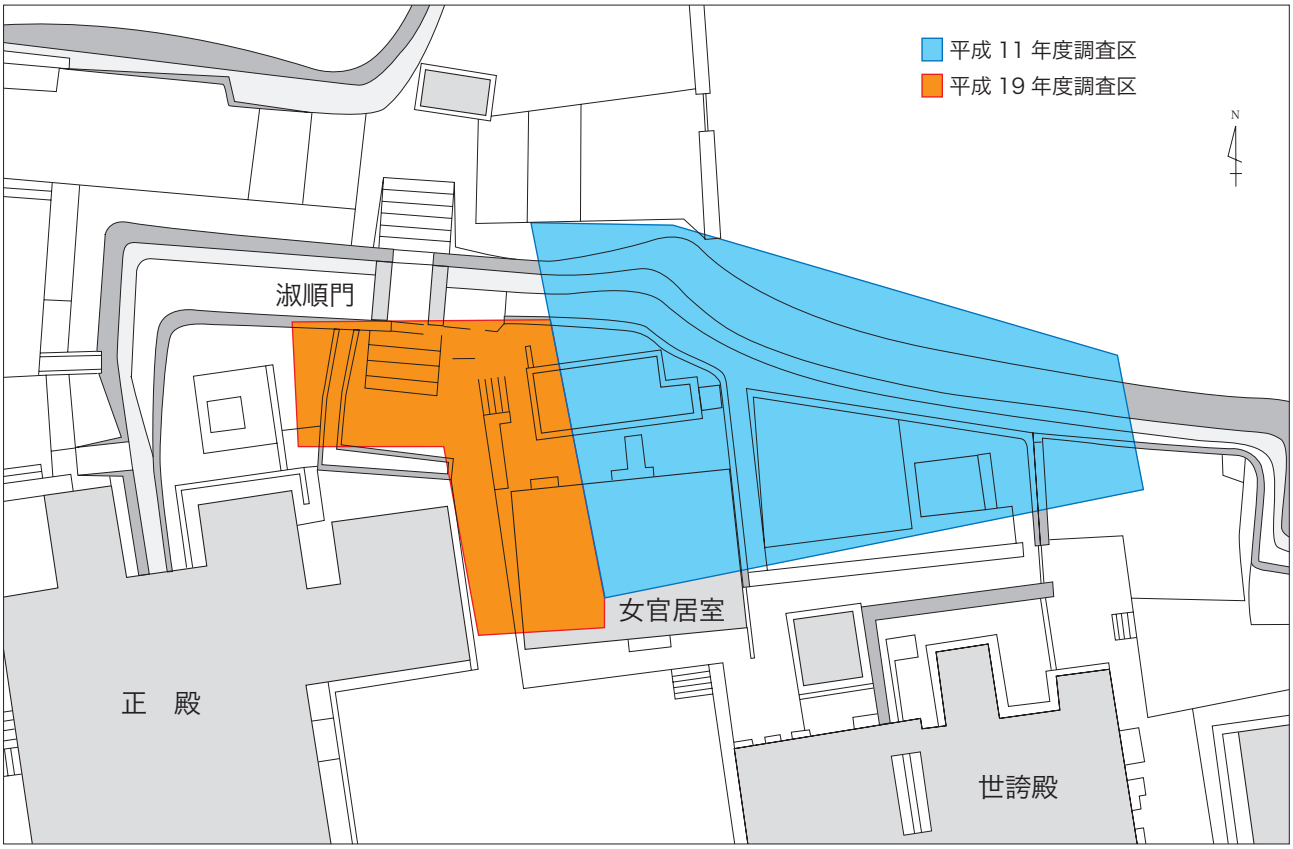
第１図　沖縄本島の位置図



第２図　首里城跡の位置及び周辺の遺跡



第３図　調査区域図（横内家資料平面図との重ね図）



第４図　調査区域拡大（横内家資料平面図との重ね図）

このように首里城は、15世紀前半とされる築城から、約500年間のながきにわたり、琉球王国の王城として栄華を誇ってきた。この王国の崩壊後、正殿をはじめとするこれらの建造物群は、1879（明治12）年から1896（明治29）年まで、熊本鎮台沖縄分遣隊の兵舎として使用されたほか（第5図）、その後は首里市立女子工芸学校、県立工業徒弟学校、首里尋常高等小学校などの校舎としても転用され（第6図）、各所がその都度改変された。その間に建物は老朽化により解体される危機を乗り越え、中心的建造物数件については、この沖縄独自の歴史や意匠から、1925（大正14）年に特別保護建造物に指定される。また、その3年後の1927（昭和2）年には解体修理が行われ、1929（昭和4）年には正殿や付随する主要な城門についても国宝となった。

しかし、これらの建造物群も、太平洋戦争に伴い日本軍第32軍司令部の陣地壕が首里城の地下深くに構築されたことで、1945（昭和20）年4月に米軍の集中砲火を浴び、その一帯は焦土と化すことになる。

終戦後は、米国琉球軍政本部教育部の計画により、1950（昭和25）年に琉球大学が創設され（第7図）、校舎等施設の造成・建設工事で首里城の遺構はさらなるダメージを受けることとなる。しかし、このような状況下においても首里城の威容は衰えることなく、規模・内容ともに沖縄を代表するに相応しい城跡として、1972（昭和47）年の日本復帰と同時に国の史跡として指定され、その後2000（平成12）年12月には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一遺産として、世界遺産（文化遺産）に登録された。今日では年間約247万人（平成20年度入園者数）もの観光客が訪れる沖縄の一大観光地として、常に賑わいを見せている。

御内原北地区

御内原は正殿の裏側一帯を指し、国王やその家族の生活の場として位置付けられていた空間である。この区域は、国王以外の男性は立ち入りが禁止され、違反者とそれを見逃した門番は、一世流罪などの厳罰が定められていたとされる。

一帯には、国王が居住していた黄金御殿や執務室として使用された二階殿、専用の厨房である寄満、使いの女官たちが詰めていた女官居室等の建物が配置され（第3・4図）、常時70人ほどの女官が、国王やその家族のために従事していたとされる。

この御内原は、王妃の統括により、古式の伝統に則して運営が行われていたとされており、王族のほかに、士族出身者で王妃・王婦人に仕える御側御奉公（ウスバグフークー）、神官、そして平民出身で官廷職務を司る「城人（グシクンチュ）」らが居住していた。この城人は、真和志、南風原、西原間切を中心に、首里近郊の農村から「城人選び」により選定され、一定期間奉公に入るとされる。

この城内の生活における食事は自給制で、上記の御側御奉公、神官、城人の各グループで「あがま」と呼ばれる炊事係によってなされていた。そのため低位の者は、わずかな奉公米以外の惣菜・汁などは、寄満や料理座で分けてもらうほか、国王一家の食事や祭事供物のお下がり等を譲り受け、工面していたと伝えられる（真栄平1997）。このように、御内原の中でも城人階級の女性達の暮らしは、王城での奉公から連想される華やかなイメージとは程遠く、質素なものであったようである。

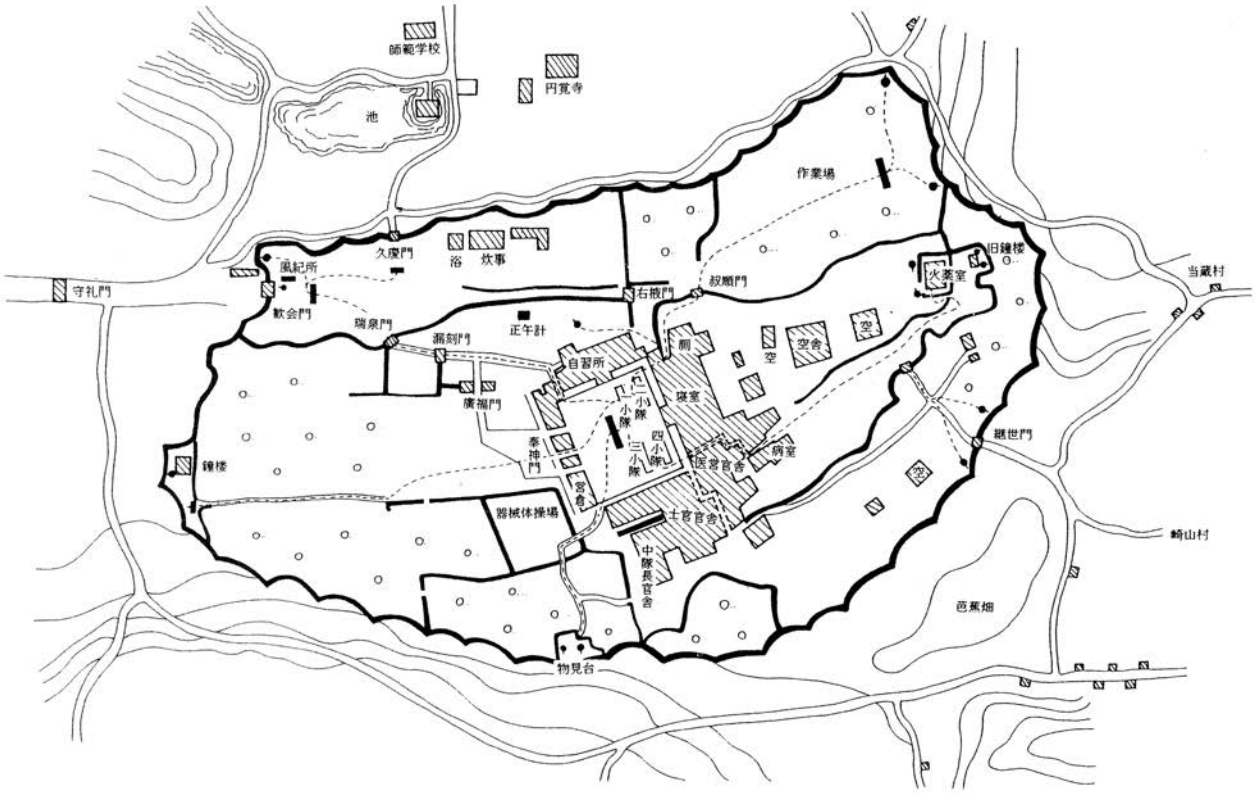
今回調査報告を行う御内原北地区は、首里城正殿の北東裏にあたり、明治初期製作とされる横内家資料平面図によると、かつて女官居室と称される建物の一角や内郭石積み及び、淑順門南側の石段・石畳が敷設されていた区域である（第3図）。

これらは、ともに創建時期について不明であるが、女官居室が存在した場所には、大正13年に沖縄神社の社務所が建てられることから、女官居室は社務所創建前にはすでに撤去されていたとみられる。そのため、1931（昭和6）年頃に引かれた『旧首里城図』（第6図）において、女官居室の区画は建物跡として破線で引かれている。なお、社務所の設置にあたっては、御内原のほぼ中央に位置していた世誇殿を移築したとされ、移築後の詳細な平面図が残されている（第6図）。そのほか、神社の創設に際しては、御内原内の各所において改変が行われたと見られ、横内家資料平面図に見える建物間を結ぶ通路や、仕切り等の区画についても撤去されたと見られ、『旧首里城図』では本殿へ至る参道等が敷設されている（第6図）。

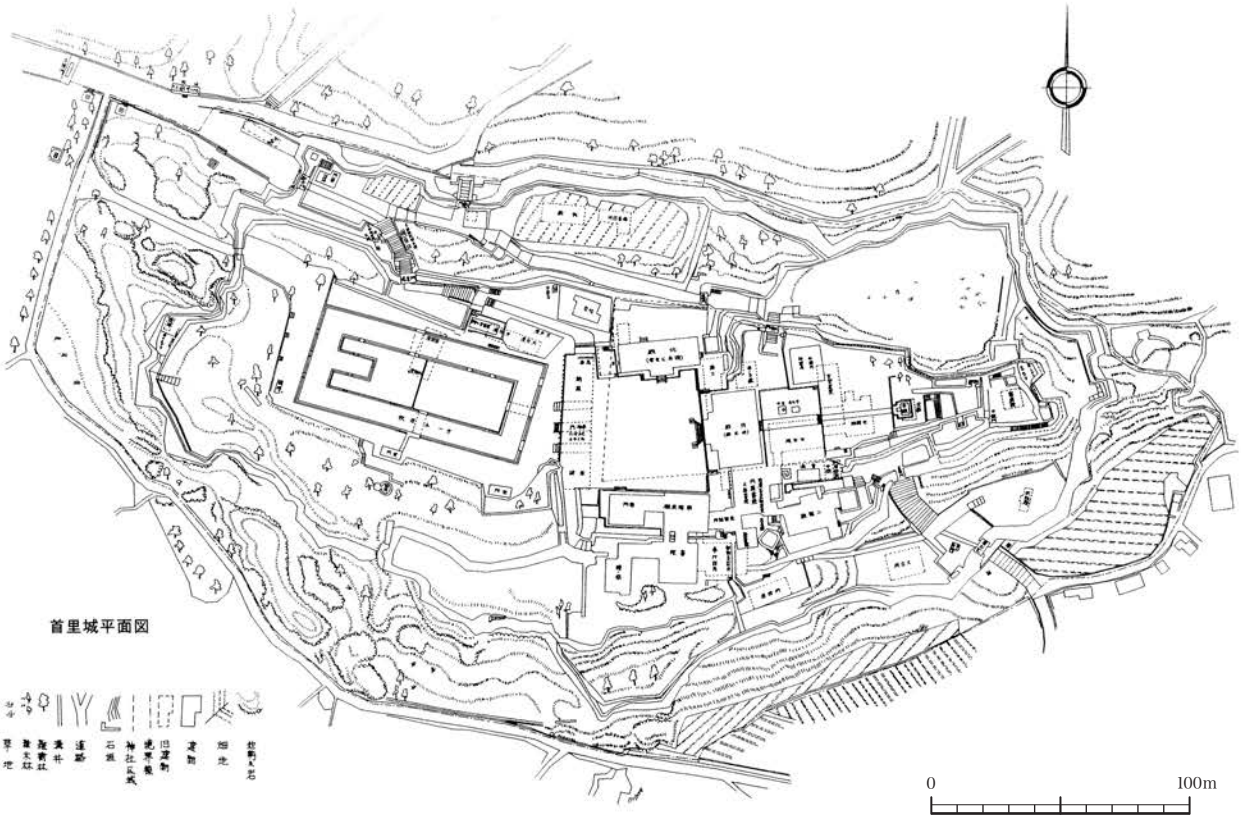
その後、首里城は沖縄戦で破壊され、戦後は琉球大学の設置により、調査区周辺には大学本館及び風樹館等の施設が建設され、その北側には擁壁の石積みが積まれる（第7図）。大学移転後は、首里城公園の管理用道路や仮設の駐車場として使用され、今後の復元を待つ状況である。

〈参考文献〉

真栄平房敬 1997『首里城物語』ひるぎ社



第５図　旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（明治期　沖縄県史料編集室蔵）



第６図　「旧首里城図」（昭和６年頃　阪谷良之進原図　県立図書館所蔵）

第７図　「旧琉球大学校舎配置図」（1950年～1984年）

第３章　調査の概要

第１節　調査区の設定

本報告における調査区は、平成11（1999）年度と平成19（2007）年度の２ヶ年にまたがり、グリッド設定も年度ごとに行っている。そのため、両年度で同名のグリッドが存在しており、報告に際して重複しないグリッド名をあてるため、第１表のとおり修正を行った。本報告ではこの修正分を用いるが、遺物の注記及び袋書きは旧グリッド名の状態であるため、遺物を照合する際は、対照表を基に旧グリッド名を割り出したうえで照合していただきたい。次に、調査年度ごとに調査区の設定について報告する。

第１表　新旧グリッド対照表

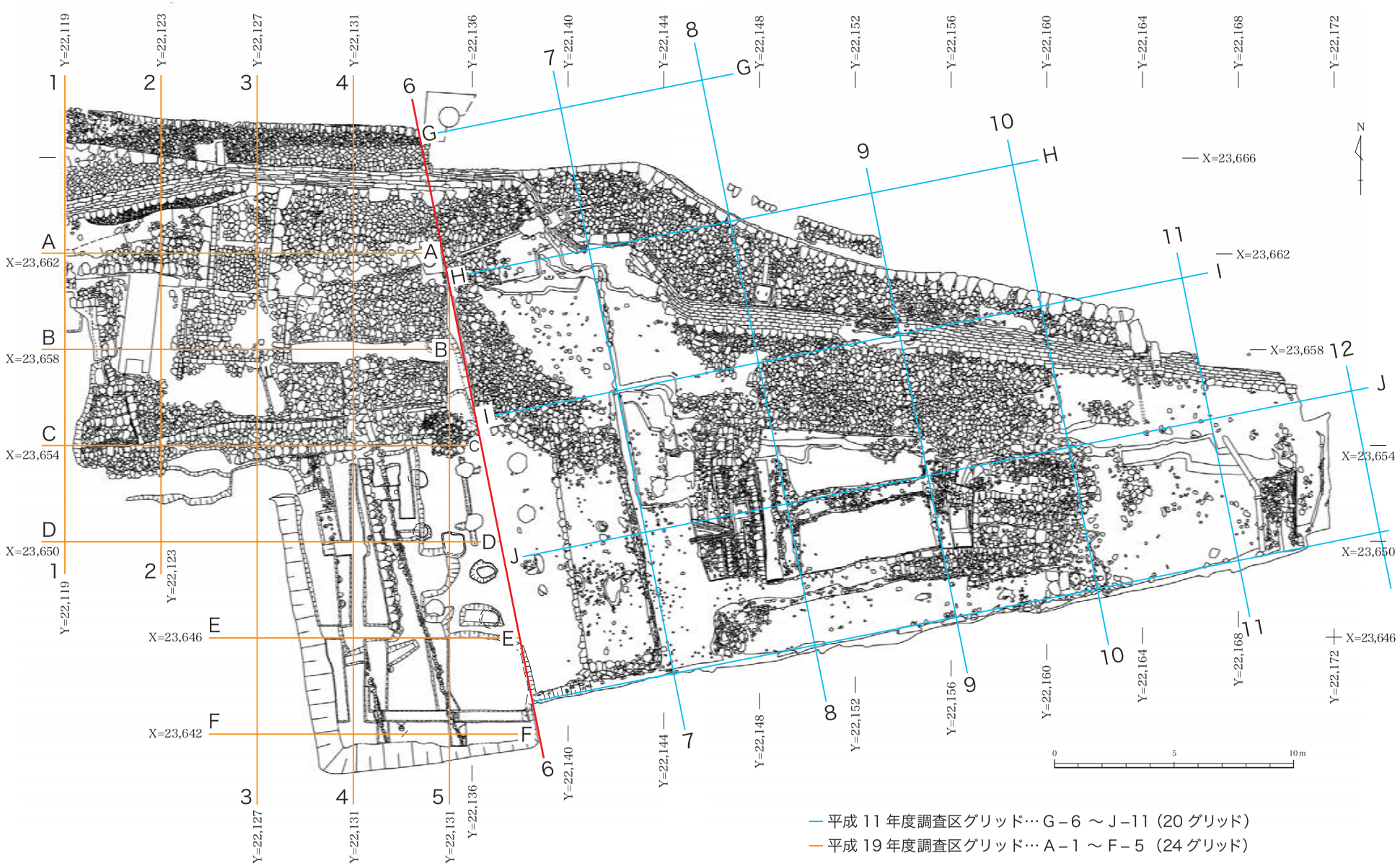
平成19（2007）年度調査区		平成11（1999）年度調査区	
修正前　→　修正後	修正前　→　修正後	修正前　→　修正後	修正前　→　修正後
A－① → A－1	C－1 → C－3	A－3 → G－6	D－4 → H－9
A－0 → A－2	C－2 → C－4	A－4 → H－6	D－5 → I－9
A－1 → A－3	C－3 → C－5	A－5 → I－6	D－6 → J－9
A－2 → A－4	D－1 → D－3	A－6 → J－6	E－4 → H－10
A－3 → A－5	D－2 → D－4	B－3 → G－7	E－5 → I－10
B－① → B－1	D－3 → D－5	B－4 → H－7	E－6 → J－10
B－0 → B－2	E－1 → E－3	B－5 → I－7	F－5 → I－11
B－1 → B－3	E－2 → E－4	B－6 → J－7	F－6 → J－11
B－2 → B－4	E－3 → E－5	C－3 → G－8	
B－3 → B－5	F－1 → F－3	C－4 → H－8	
C－① → C－1	F－2 → F－4	C－5 → I－8	
C－0 → C－2	F－3 → F－5	C－6 → J－8	

平成11（1999）年度

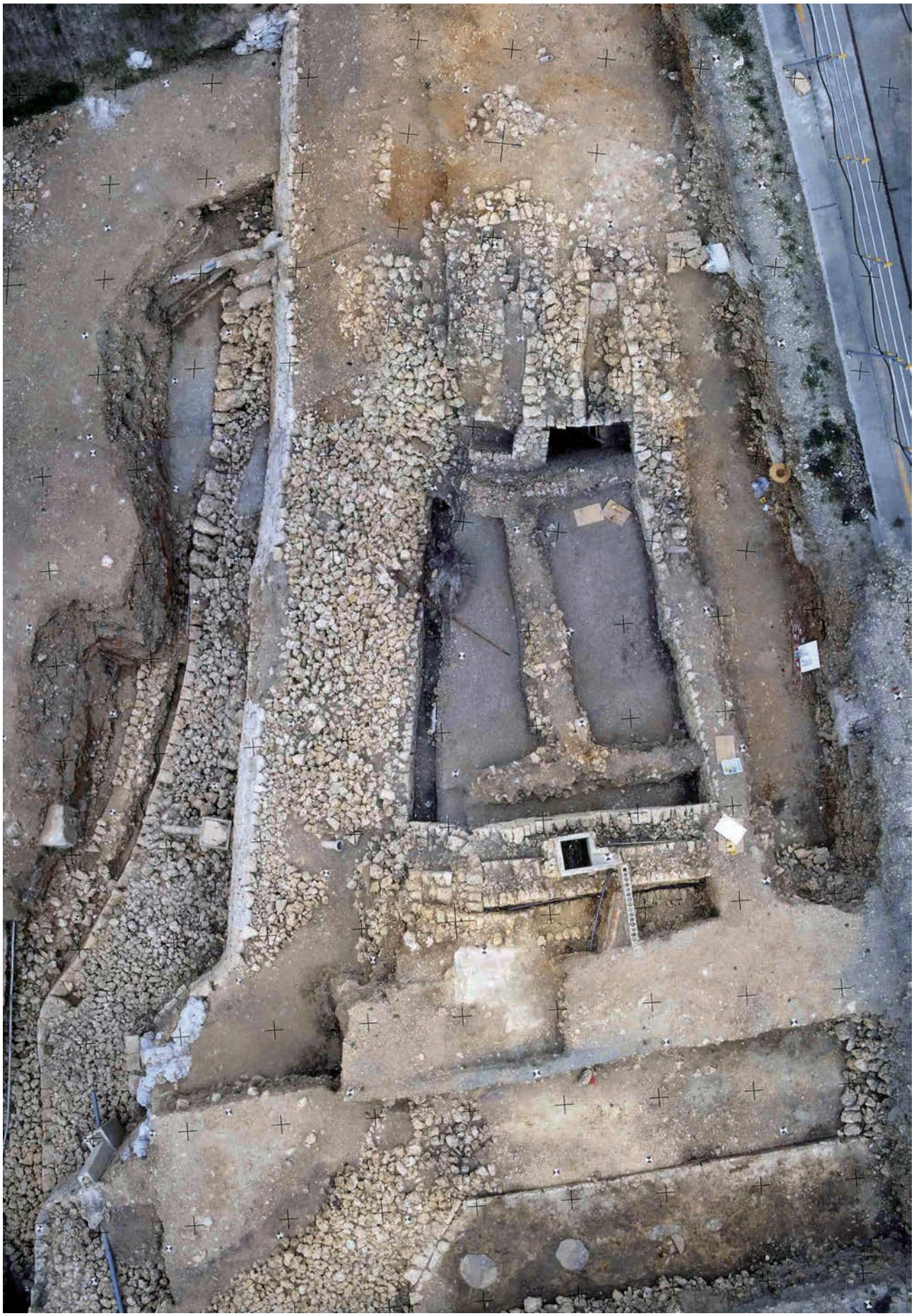
平成11（1999）年度の調査区は東西に長く、東側が短い台形状を呈する（第４図）。この中でグリッド設定は、調査区の南及び西辺を結ぶ角がほぼ直角を成すことから、この軸に合わせ、東より５グリッド、北より６グリッドのナンバーで、６m四方のグリッド設定を行い、調査を開始した（第８図）。

平成19（2007）年度

平成19（2007）年度の調査区は、当初、南北に長い方形であったことから、調査区の規模・方角を勘案し、グリッドラインは切れのいい座標数値で磁北に合わせ、４m四方で設定を行った。グリッド数は、調査当初は北西角から東へ３グリッド、南へ６グリッドの範囲で設けて開始したが、のちに調査区を西側に拡張することになり、西側へ４グリッドを新たに設定し、最終的にはL字状の調査区での作業となった（第４・８図）。


Y=22,119
Y=22,123
Y=22,127
Y=22,131
Y=22,136
Y=22,140
Y=22,144
Y=22,148
Y=22,152
Y=22,156
Y=22,160
Y=22,164
Y=22,168
Y=22,172
X=23,666
X=23,662
X=23,658
X=23,654
X=23,650
X=23,646
X=23,642
N
0
5
10m
平成 11 年度調査区グリッド…G－6 ～ J－11（20 グリッド）
平成 19 年度調査区グリッド…A－1 ～ F－5（24 グリッド）

第８図　グリッド設定図



図版１　平成11年度調査区平面（上空より・画像左が北）

図版２　平成19年度調査区平面（上空より・画像上が北）

第２節　調査経過

平成11（1999）年度

平成11（1999）年度の調査は、平成11（1999）年９月１日～平成12（2000）年３月31日までの７ヶ月間にわたり、正殿裏手の北側寄りにおいて約600㎡の面積で調査を実施した。

表土掘削は、重機により琉球大学の建物基礎及び側溝等の構築物の撤去をしつつ、撹乱層及び沖縄戦後の造成土について剥ぎ取り作業を行った。作業中に調査区北側で琉球大学のものと思われる石積みが検出された。また、調査区の西側においては、建物基壇と思われる遺構が、礎石を伴って検出された。さらに調査区南側では、石積みや石列が縦横に走る状態で検出されたことから、この状態で重機による掘削を終えた。この時点で調査区の地形は、南側に平場を持ち、北側が傾斜する形となる。

表土除去に続き、グリッド設定を行った。今回の調査区は、西及び南側の縁辺がほぼ直角であることから、このラインを基準として、６m四方のグリッドを東西に６、南北に4グリッド設定し、その内20グリッドにおいて調査を実施した（第８図）。

遺構の検出作業は、調査区北側の表土掘削時に検出されていた琉球大学の石積み周辺及び、平場部分で検出されていた石列等を重点的に行った。その結果、琉球大学の石積み北側に石積みが検出され、その積み方や配置・規模等から、かつての内郭石積みであることが考えられた。この琉球大学の石積みについては、調査中に撤去する予定であったが、撤去時にその南側に近接する遺構が崩落する危険性があり、この遺構を保護する目的で、現状保存することとした（図版３－１・2）。

そのほか、基壇を有する礎石建物跡や、石積みが複雑に積まれた状態の遺構、台形状の石組みを検出したが、周辺を沖縄戦か戦後の開発により改変され、明確なつながりを確認することができなかった。この段階で発掘を終了し、シートで遺構を保護して調査を終えた。

１．作業状況１

２．作業状況２

図版３　調査経過１（H11）

平成19（2007）年度

平成19（2007）年度の発掘調査は、当初の計画では平成18（2006）年度より調査を実施している銭蔵地区の西及び、南側を拡張して行う予定で準備を進めていたが、今後の復元整備計画エリアの優先順から、正殿の北東側に残る未調査区を調査することになった。これにより、9月3日より約2ヶ月間は銭蔵地区の表土掘削・清掃作業を行った。この清掃面を保護したのち、10月29日より調査区を正殿裏手に移動し、御内原北地区として約300㎡の面積で調査を開始した。

本地区は、調査前まで首里城公園の管理用通路や監視カメラ等が設置されていた地点である。表土掘削に先立ち、電線等の埋設物を移設し、重機による掘削を開始した（図版4－1・2）。

表土掘削を開始してしばらくすると、南北方向に1列の石積みが現れる（図版4－2）。この時点では、古絵図等に見える東西を区画する石積みと思われたが、掘削を進めるうちに、石の切り方や積み方に疑問を感じたため、目地及び裏込め部を清掃したところ、アフリカマイマイの殻が数点採取できた。アフリカマイマイは、1932（昭和7）年以降、台湾経由で沖縄に移入され、当初は養殖動物として隔離して飼育されていたが、沖縄戦を機に飼育個体が野外に逸出、県内各地に拡散したとされる。したがって、この石積みは戦後に構築されたと考えることができる。また、これにあわせて旧琉球大学の平面図や写真を確認したところ、大学本館前面に積まれていた石積みと符合することが判明した（第7図）。確認に用いた写真では4段ほどが積まれているが、残存するのは下部の2段のみであった。その後、人力での表土・撹乱層の清掃、グリッド設定を行う。グリッドは、調査区の形状に合わせ、4m四方のグリッドを東西に5、南北に6グリッド設定し、その内24グリッドで調査を開始した（第8図）。

表土掘削を終えると、この琉球大学石積みを境として、東西で様相が異なる状況が見えてきた。西側は旧琉球大学石積み前面にあたり、この石積み構築のため、下部まで深く削平されており、その北側では、掘削を免れたそれ以前のものと思われる切石が、北に面して東西方向に配置されている状況が確認できた。これに対して琉球大学石積み東側では、この石積み上端の高さで、焼土面及び礎石と思われる砂岩が表土直下に検出され、琉球大学石積み西側下部で検出されていた切石とつながる石灰岩の石列が確認できた。なお、調査区南端は、沖縄戦後の開発により撹乱を受け、遺構は残っていない。

表土掘削を終えるとグリッド設定を行い（11月4日）、人力による表土清掃作業を行った（図版4－4）。続いて、不発弾探査を目的とした磁気探査を行い（12月3日）、3点の異常点を確認した（図版4－5）。うち2点は番線等に反応したものであったが、残りの1点は米国製5インチ艦砲弾に反応したものであった。発見直後には警察に通報して経緯等の検分を行い、続いて自衛隊による記録後に回収、無事に処理を終えた（図版4－6）。砲弾は南方向から遺構を貫き、斜位に突き刺さるように残されており、火薬等が抜けた弾核のみの状態であった。

その後、表土の除去を進めていくと、徐々に遺構面が現れる（図版4－7・8、図版5－9～11）。特に調査区東側の遺構面は、一面が被熱により変色し、その中に礎石と思われる砂岩が数点確認できた。また、この被熱面には、二次的に焼けた陶磁器類や金属製品が散布している状況が確認でき、ある時期に何らかの理由で建物が焼け落ちた状況が想定できた。

これに対し、調査区南側と西側は、前記した遺構面より深く撹乱を受け、遺構は削平され赤色土が広がっている。続いて旧琉球大学石積みの裏込めの除去を行うと、周辺の撹乱部と同様、下部より赤色土が現れる。しかし、その赤色土の中に、10㎝内外の石灰岩礫が南北方向に列を成すように検出された。当初は、これが赤土の地山上に並べられた表面的なものと考えていたが、確認の目的で一部にトレンチを設け掘り下げたところ、地中まで続く状況が見えてきた。しかし、この時点でも遺構の性格は判然とせず、部分的で小規模な石積みを想定していた。しかし、調査区全体を俯瞰すると、この石列が調査区南北を貫くように2列存在することが確認できた。

そこで周辺の遺構に影響しない調査区南端において、石列と交差するように50㎝幅のトレンチを設け、赤色土の掘り下げを行った。その結果、トレンチの東西で全く異なる状況が検出された。西側では赤色土を約30㎝下げると、大和系瓦が大量に詰まった暗灰色土層が現れるのに対し、東側では約１ｍ掘り下げると、ようやく黒色土が現れる。この両者の境界には、石列を含む50㎝幅のセクションベルトを残すが、このベルト1枚を境として極端に状況が異なるため、確認の目的で壁の除去を行うと、石灰岩礫が西側にやや傾斜した状態で、約１ｍの高さに積み上げられていることが判明した。

この状況から、石列下部の黒色土は火災時の堆積層で、この火災後、石灰岩礫で土留めをしつつ、大量の赤色土及び瓦を用いて平場造成を行い、次なる建造物を造営したことが考えられた。

これに並行して、調査区北側では、内郭石積み裏込め内から、東西方向に大規模な石積みが検出され、赤色造成土及び土留め石列がこの石積み南面で留まることから、石積みは城壁と土留めを兼ねたものであることが想定できた。

続いて、調査区西側、淑順門南側のマンホール及び表土の除去を行うと（図版４－３）、門の間口につながる石段が４段と、その脇に側溝が検出される（図版５－９）。明治初期の平面図（横内家資料・第３・４図）によると、この石段と北殿の間に石段を囲うようにL字状の石積み区画が見えることから、その根石を探る目的で付近の掘り下げを行ったが、撹乱を受け残存していなかった。しかし、その下部からは絵図等に見られない古い時期の石積みが縦横に５本検出され、その内の1本は先述した城郭と土留めを兼ねた石積みにつながるが、他の石積みに関しては性格が判然としない。

検出された遺構は、順次実測、写真撮影による記録を行い、一部の図面は地上写真測量を委託した。1月以降は雨天日が多く、調査が滞る時期もあったが（図版５－14・15）、図化作業は２月29日の調査最終日まで行い、無事に終えることができた（図版５－12）。調査終了後は、遺構を保護する目的で白砂を盛り、その上に土砂を投入後、舗装及び芝生養生を行い、調査前の状況に復旧作業が行われた（図版５－16）。

1．アスファルト除去

2．遺構面まで表土をはがす

3．表土除去

4．表土の清掃及びグリッド設定

5．磁気探査

6．不発弾処理

7．作業状況１

8．作業状況２

図版４　調査経過２（H19）

9．作業状況３

10．作業状況４

11．作業状況５

12．作業状況６

13．高所作業車による撮影

14．雨天時の遺物洗浄作業

15．雨天後の水抜き作業

16．埋め戻し後の調査区

図版５　調査経過３（H19）

第４章　層序・遺構・主な遺物

平成11（1999）年度及び19（2007）年度の調査区は、戦前から幾度もの改変が行われてきた区域にあり、過去に実施された御内原内の調査を振り返っても、遺構の遺存は良好と言えない状況であった。そのため、遺構の残存状況を想定することが困難な中で調査を開始することになった。

その中で、平成19（2007）年度の調査区においては、結果的に数種の遺構が重層的に検出されるとともに、その下部には造成事業として投入されたおびただしい量の赤色土や瓦が堆積する状況が確認され、調査区内の変遷を見ることができた。なお、ここで示す層序は次項の遺構ともリンクしており、これらを遺構の種別、上下関係、検出状況、遺物の種別・年代等により７次期に区分して一覧を第10図及び第２表に掲載した。

出土遺物については、第１節では各層に伴う主な遺物を掲載し、遺構から出土している遺物は、第２節の遺構の節で掲載している。また、本章での遺物は、その傾向を概観したのち主要な遺物の実測図のみを掲載し、観察表及び写真は第５章遺物の章で種別ごとにまとめ、遺物の集計表は別添のCD−ROMに収めた。

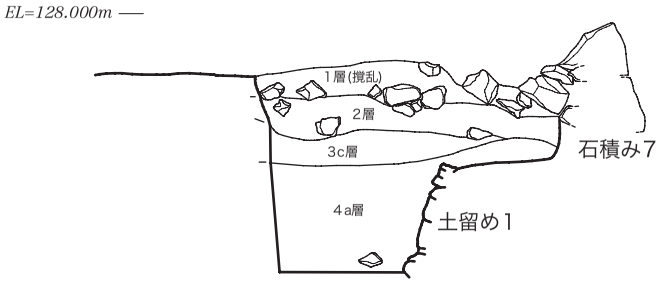
第1節　層序と主な遺物

首里城の発掘調査において、調査区をとおして層序が共通する例は少ない。この理由として、首里城は幾度もの火災や再建を繰り返しているほか、部分的な構築物の築造や撤去が行われてきたことにもよる。したがって、発掘調査においては、検出された遺構ごとに共伴する遺物を分析・検討した上で、その概ねの年代を割り出し、関連する層や遺構を結びつける作業を行う必要がある。以下に層序ごとの概要を記すが、ここでは各層序から出土した主な遺物もあわせて掲載し、層序及び遺構の時期を特定するための参考としたい。

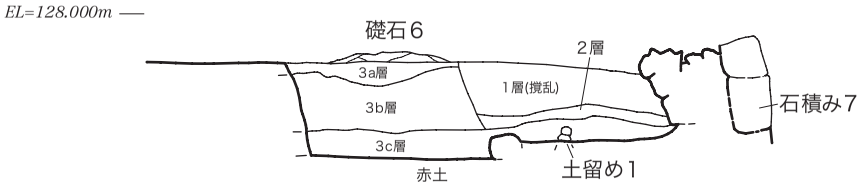
なお、本報告では平成11（1999）年度及び19（2007）年度調査分の報告を行うが、平成11（1999）年度調査区では数基の遺構が検出されているものの、傾斜地であることも相まってか、沖縄戦あるいは戦後の改変による撹乱が著しく、明確な層序を把握するに至らなかった。そのため、層序については、平成19（2007）年度調査分の成果を中心に報告を行う（第９図、図版６）。

第1層（表土・撹乱層）

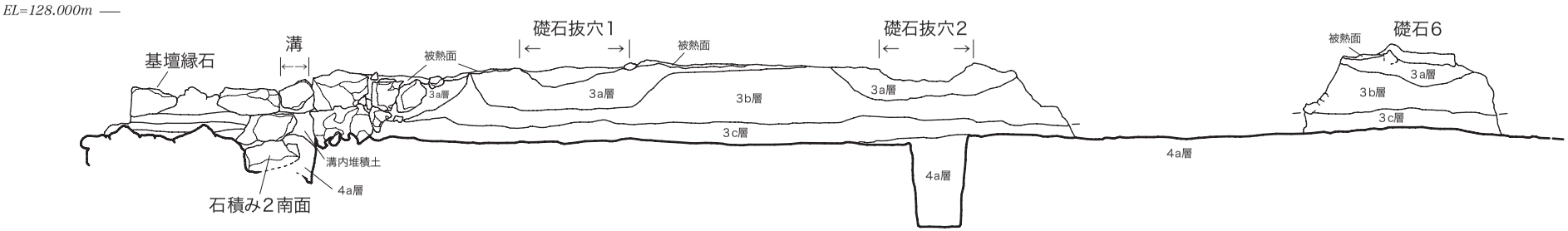
旧琉球大学及び、首里城公園造園時の撹乱層。泥岩（クチャ）や赤土で構成され、琉球石灰岩の切石や礫が多量に含まれる（第９図１・２、図版６－１）。この殆どは重機により表土掘削時に除去されるが、掘削立会中に採取可能な遺物は回収を行う。含まれる遺物は、大半が明朝系赤瓦や塼であるが、陶磁器類は14世紀代～現代までの資料が入り交じり、その種別も多い。古くは14世紀の青磁双魚文皿で、ほかは14世紀後半～15世紀前半の輸入陶磁器、16世紀以降の肥前陶磁器、沖縄産陶器と続く。その他、金属製品や貝製品等も若干得られている（第11・12図）。



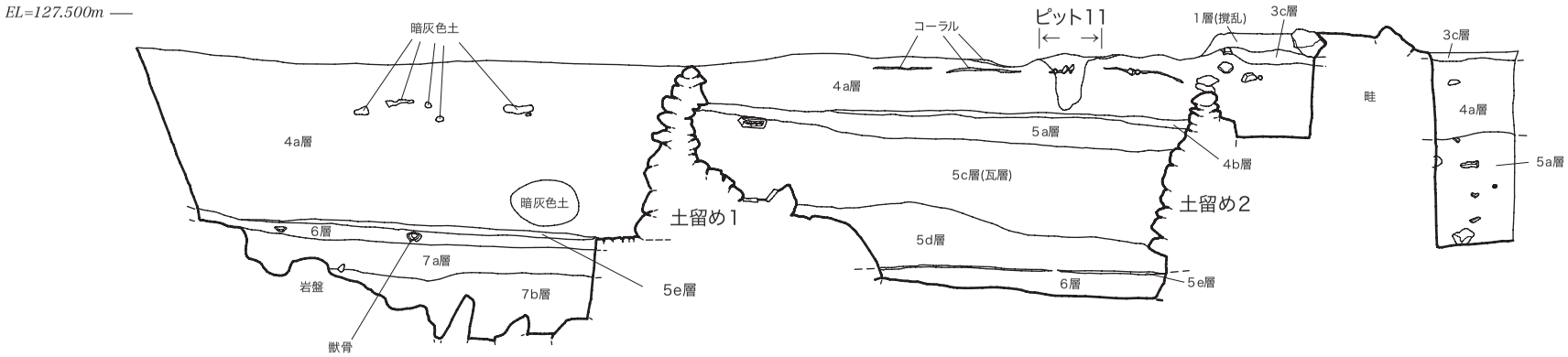
1　C−4南壁土層図



2　D−4南壁土層図



3　C・D−4東壁土層図



4　E−4・5南壁土層図

0　1m
1:40

第9図　土層図

1．C−4南壁（1〜4層）

2．C・D−4東壁（3・4層）

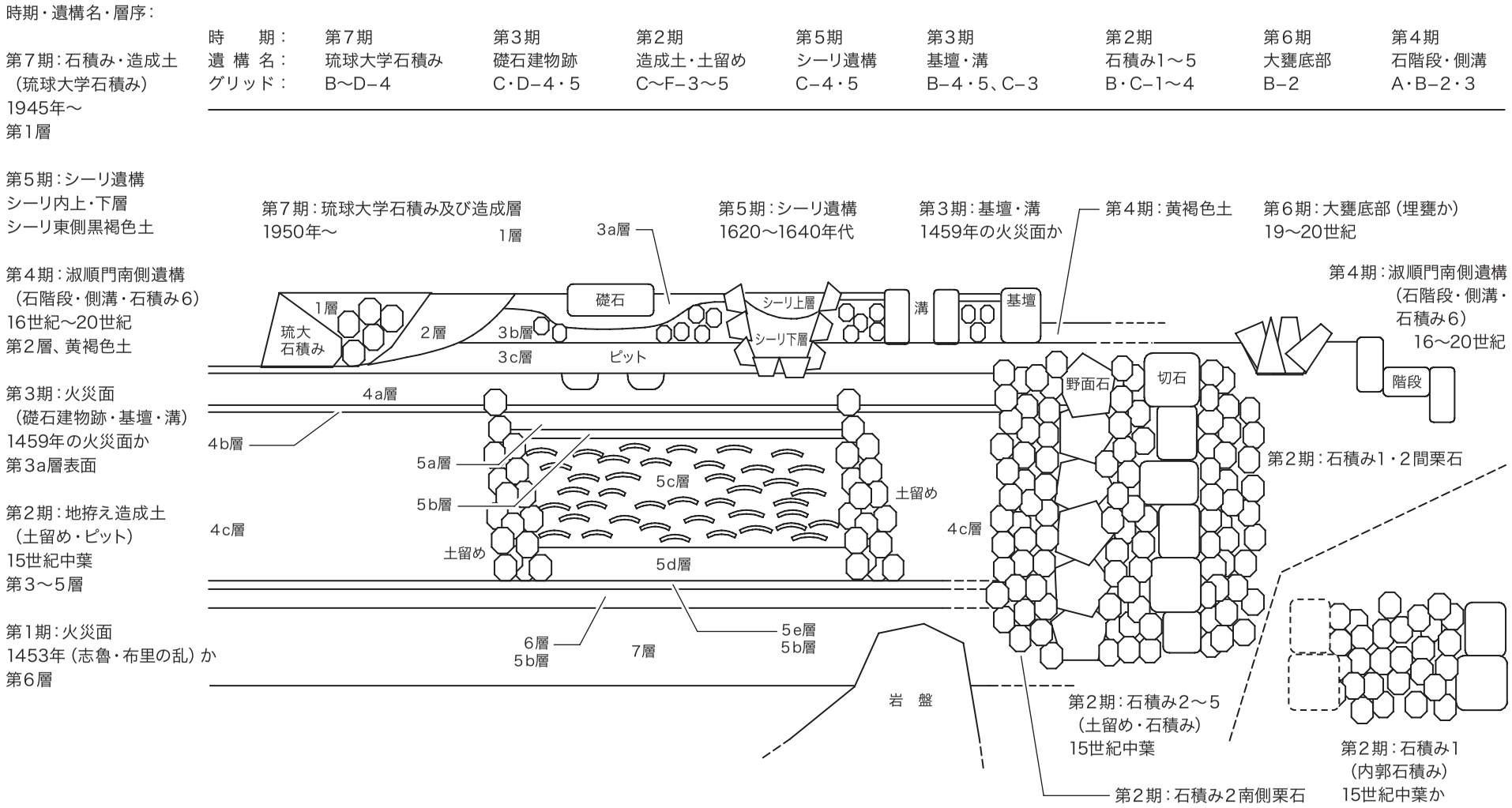
3．C−4東壁（礎石抜け穴1、3・4層）

4．E−4西壁（4・5層）

5．E−4東壁（4・5層）

6．E−5西壁（土留め、4・6・7層・岩盤）

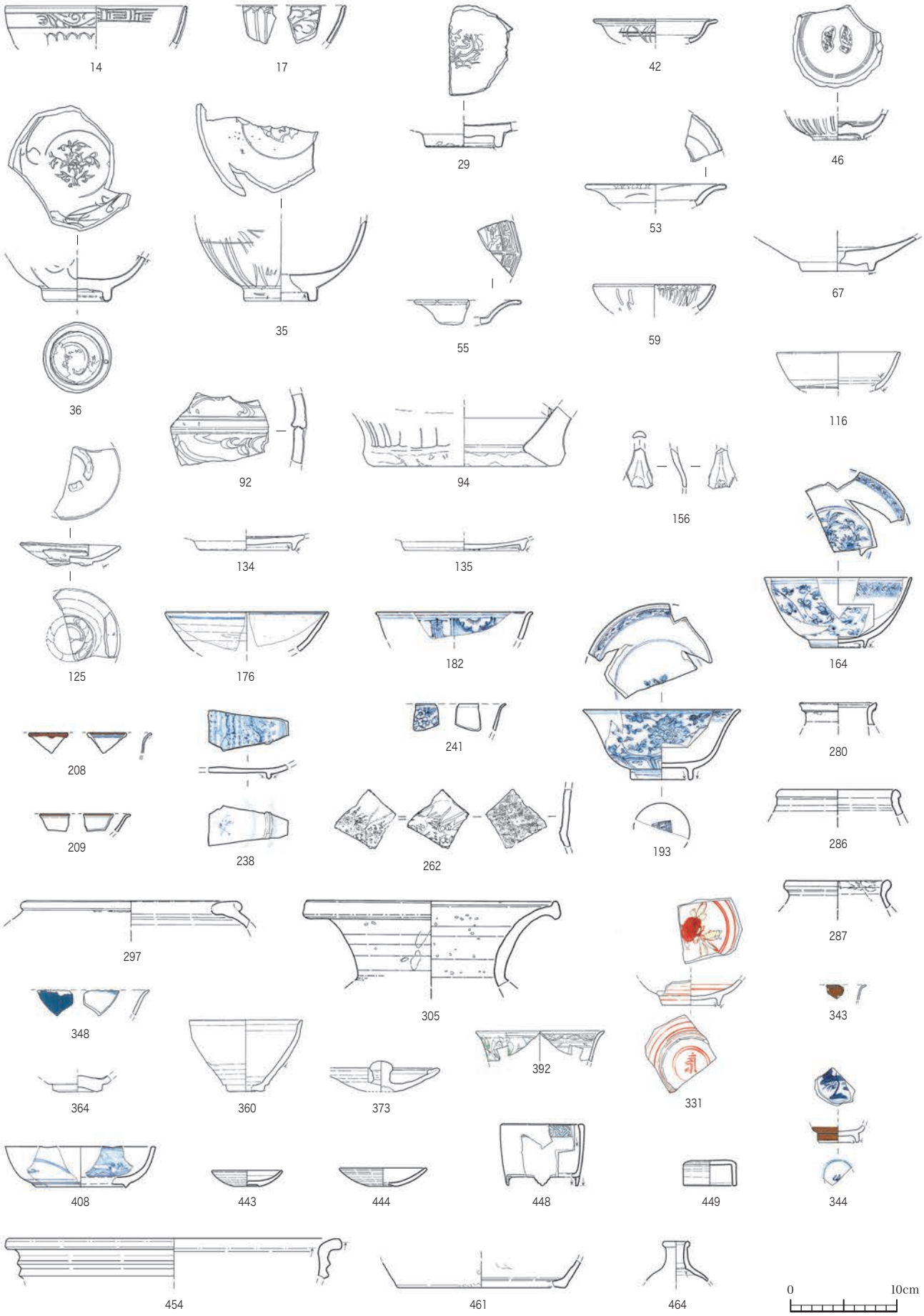
図版6　層序



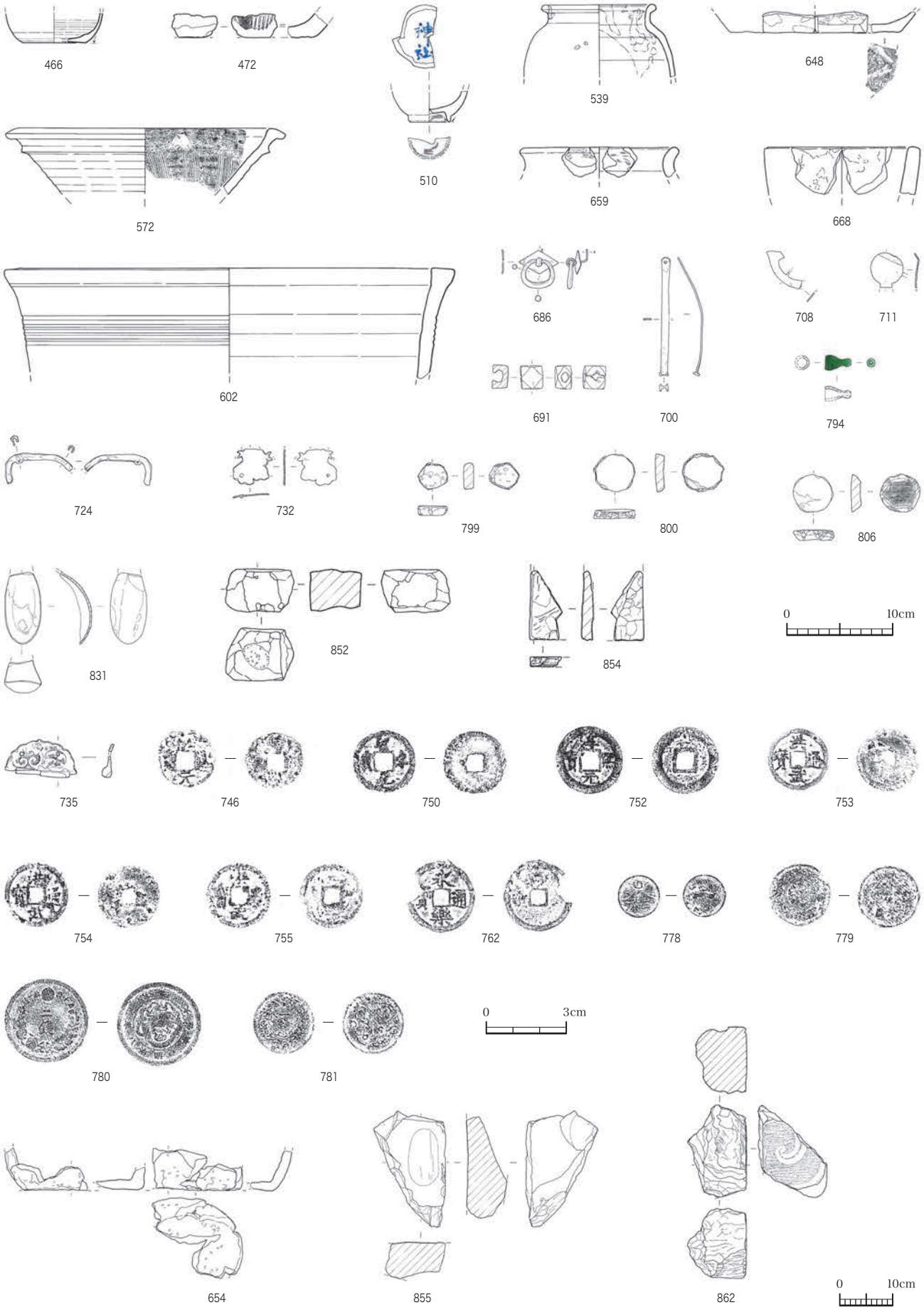
第10図　層序・遺構模式図

第２表　層序・遺構・遺物の概要一覧

時期		土層							主な遺構	主な遺物
区分	年代	層序		性格・分布（グリッド）		色調	土質	層厚（cm）		
第７期	20世紀	第１層		表土・撹乱層（全域）		灰色	クチャ等	150～	石積み（琉球大学本館）	現代遺物（陶磁器、ガラス、銭貨、金属製品）
第６期	19世紀～20世紀	－		埋甕土壙（B－2）		暗褐色	礫＋白砂粒混土	4～18	埋甕及び土壙	中国産白磁、染付、沖縄産陶器、自然遺物
第５期	17世紀	第２層		遺物包含層（B～D－4）		炭混淡黄色	コーラル＋木炭＋しまりのない暗灰色土	8～20	未確認	中国産白磁、染付、褐釉陶器、肥前陶磁器、沖縄産陶器、明朝系瓦、銭貨、鉄釘、自然遺物
		－		遺物包含層（B～D－4）		炭混褐色？	木炭＋粘質土	－	シーリ遺構か	中国産陶磁器、沖縄産陶器、明朝系瓦、塼、鉄釘、自然遺物
		－		遺物包含層（B－4・5シーリ遺構内）	上層	炭混黄褐色	木炭＋密な粘質土	18	シーリ遺構	明朝系瓦、塼、鉄釘、自然遺物
					下層	黒褐色、暗赤褐色、灰白色	しまりのない腐葉土状	30～40	シーリ遺構	中国産白磁、染付、褐釉陶器、肥前陶磁器、沖縄産陶器、明朝系瓦、銭貨、鉄釘、木製品、自然遺物（獣魚骨、貝類、種実類、糞石）
第４期	16世紀～20世紀	－		遺物包含層（A－1石積み6前面）	a	炭混黄褐色	木炭＋密な粘質土	25	石積み6	中国産青磁、白磁、染付、褐釉陶器、瓦質土器、沖縄産陶器、銭貨、鉄釘、銅製品、自然遺物
					b	炭混淡褐色	木炭＋しまりのない淡褐色土	75～	石積み6	中国産青磁、白磁、染付、褐釉陶器、色絵磁器、緑釉陶器、肥前陶磁器、沖縄産陶器、銭貨、鉄釘、銅製品、自然遺物
				遺物包含層（A・B－1・2淑順門南）		暗褐色	サンゴ砂利混暗褐色土	－	石積み、石段、側溝、石畳、石積み6	中国産青磁、白磁、染付、褐釉陶器、肥前陶磁器、沖縄産陶器、銭貨、鉄釘、銅製品、明朝系瓦、自然遺物
				遺物包含層（B－4）		淡黄色	微粒子コーラル	－	なし	中国産青磁、白磁、染付、褐釉陶器、金属製品、自然遺物
第３期	15世紀	第3層	a	造成層・表面は遺物包含層（B～D－4・5）		淡黄色（被熱部は橙色）	固められた微粒子コーラル（表面被熱）	2～24	礎石、礎石抜け穴、基壇状遺構、側溝	中国産青磁、白磁、褐釉陶器、銭貨、銅製品、鉄釘、ガラス玉、石製玉、自然遺物
			b	造成層（B～D－4・5）		淡黄色	琉球石灰岩礫	10～35	なし	なし
			c	造成層（B～F－3～5）		淡黄色	固められた微粒子コーラル	8～16	なし	なし
第２期	14世紀～15世紀	第4層	a	造成層（B～F－4・5）		赤土＋暗灰色	赤土＋暗灰色土粒	2～14	ピット、土留め石積み	なし
			b	被膜層（E・F－4・5）		淡黄色	微粒子コーラル	0.5～2	土留め石積み	なし
			c	造成層（E・F－4・5）		赤土＋暗灰色	赤土＋暗灰色土粒	20～100	土留め石積み	なし
		第5層	a	被膜層（E・F－4・5）		淡黄色	微粒子コーラル	2～5	土留め石積み	なし
			b	造成層（E・F－4・5）		赤色土混暗灰色	しまりのない粘質土	4～18	土留め石積み	大和系瓦、鉄釘、自然遺物
			c	造成層・二次的遺物包含層（E・F－4・5）		赤色土混暗灰色	瓦間にしまりのない粘質土が少量	36～56	土留め石積み	中国産青磁、白磁、褐釉陶器、朝鮮青磁、カムィヤキ、グスク土器、大和系瓦、銭貨、金属製品、貝製品、自然遺物
			d	造成層（E・F－4・5）		赤色土混暗灰色	しまりのない粘質土	16～34	土留め石積み	大和系瓦、鉄釘、自然遺物
			e	被膜層＋土留め根固め礫敷き層（E・F－4・5）		淡黄色	微粒子コーラル＋石灰岩礫	2～4	石積み2～5、土留め石積み、根固め礫敷き	石積み2～5裏込めから中国産青磁、白磁、褐釉陶器、自然遺物
		－		遺物包含層（A・B－3・4）石積み1・2間栗石		淡黄色	10～30㎝大の石灰岩	－	未確認	中国産白磁、染付、褐釉陶器、大和系瓦、銭貨、武具、鉄釘、自然遺物
		－		遺物包含層（C－3）石積み2南側栗石		淡黄色	10～30㎝大の石灰岩	－	未確認	中国産白磁、染付、褐釉陶器、大和系瓦、銭貨、武具、鉄釘、自然遺物
第１期	14世紀～15世紀	第6層		遺物包含層（E・F－4・5）		漆黒	細粒木炭＋灰か	5～14	未確認	中国産青磁、白磁、褐釉陶器、カムィヤキ、グスク土器、大和系瓦、骨鏃、自然遺物
		第7層	a	造成層？（E・F－4・5）		焼土混暗灰色	密な粘質土	14～17	未確認	グスク土器、焼土塊
			b	造成層？地山？（E・F－4・5）		暗橙褐色	密な粘質土	40～	未確認	なし（琉球石灰岩の岩盤に接する）



第11図　表土・撹乱層出土遺物１

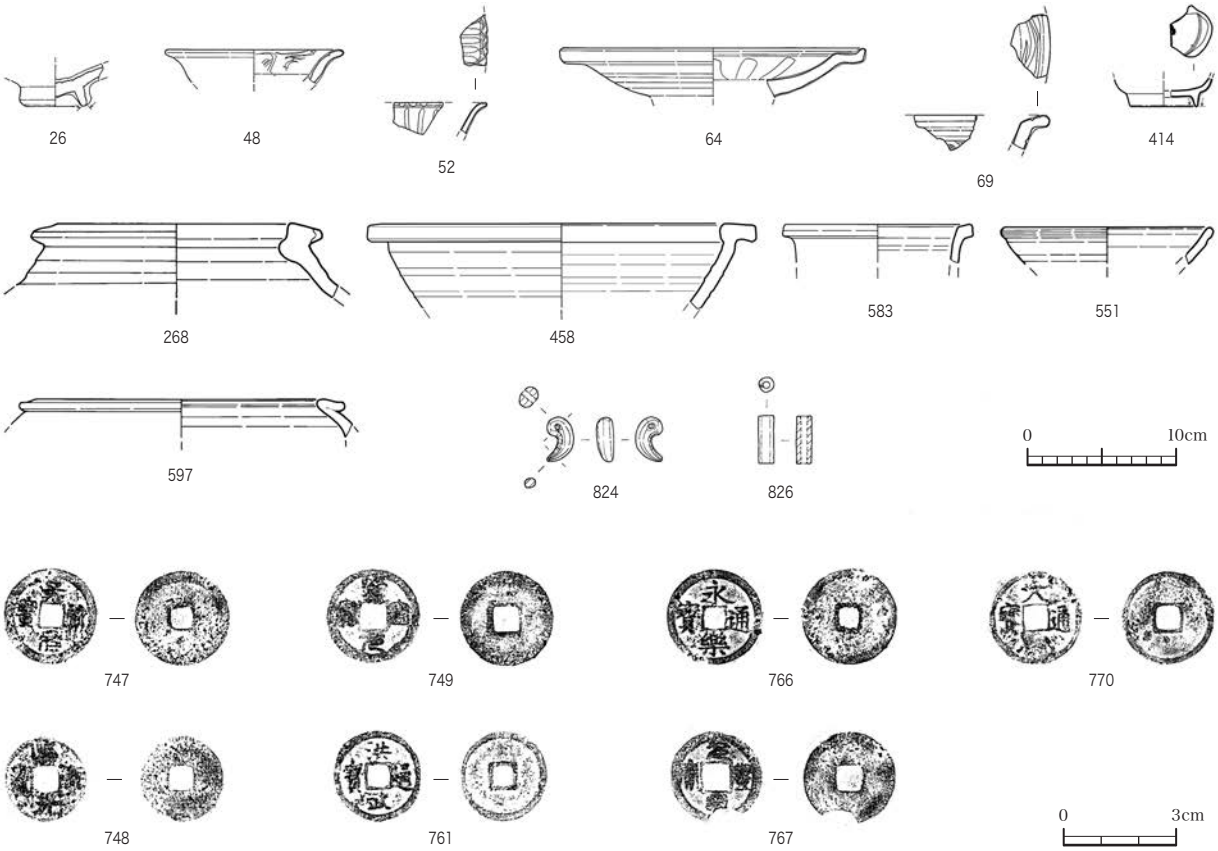


第12図　表土・撹乱層出土遺物２

第２層（遺物包含層）

炭混黄褐色土で粘質。琉球大学本館石積み裏込めの直下、第３層の一部に部分的に傾斜した状態で張り付くが、撹乱を受ける前は全面に広がっていた可能性がある（第９図1・2、図版6－1）。遺物は14世紀後半～15世紀前半の青磁も含まれるが、17世紀末～18世紀初頭の肥前産青磁染付、沖縄産無釉陶器のほか、勾玉や管玉も得られ、新旧の遺物が混在している状況が見える（第13図、図版7）。

本層は一部の区画にのみ見られる層で、性格が不明であったが、数種の古絵図・平面図において当地の状況を比較すると、本層が分布する区域には、明治初期製作とされる横内家資料平面図（第４図）において階段の区画が引かれているが、昭和６年頃製作の「旧首里城図」（阪谷図・第６図）には、その階段が引かれていない。この理由として、首里城内には1924（大正13）年に沖縄神社が創設され、御内原内は神社の施設建設のため改変が行われる。後者の平面図によると、本地点には社務所が設置されていることから、その工事により階段が撤去されたことが考えられ、新旧の遺物が出土していることを考慮しても、本層はその際に撹乱を受けたか、17世紀頃の堆積層の可能性がある。



第13図　第２層出土遺物

１．B−４第２層　管玉出土状況

２．B−４第２層　勾玉出土状況

図版７　層序に伴う遺物出土状況１

第３層（造成層・遺物包含層）

第３層は、基壇内部に投入された造成土を指しており、a～cの３枚に分けることができる。3a層は一面に焼土面が広がることから、火災時の地表面と考えている層である。基壇内は、石灰岩粒子による舗装により固く締まっており、その面に細粒砂岩（ニービ）の礎石及びその抜け穴が規則的に見られ、石灰岩粒子はこの礎石及び抜け穴の下部のみ厚く堆積している。この理由として、緻密な石灰岩粒子を厚くすることにより、礎石の沈下を防いだことが考えられる。続いて3b層は、3a及び３ｃ層の間に挟まれるように投入された造成土で、10～20㎝大の石灰岩礫が主体となる。隙間が多く、根固めや排水等の機能が想定できる。3c層は、第４層赤色造成土上に造成された石灰岩粒子からなる層である。上層の3a層ほどではないが、突き固めら硬化している（第９図1～3、図版６－２・３）。

遺物は陶磁器や金属製品が被熱を受けた状態で、3a層表面から出土しており、陶磁器の年代は14世紀後半～15世紀前半の遺物が占めている。この様相は、北に隣接する基壇状遺構の遺物とも似ており、両者は同時期の遺構であることが考えられる。また本層は、最初の火災層と思われる第６層の遺物とも時期差がない点から、両層の火災年代を推察し、造成の工程及びその期間を復元する上で参考になるものと思われる。この遺物の詳細は、第２節４の礎石建物跡の項で報告する。なお、本層表面より得られた炭化物を放射性年代測定にかけ、補正年代で600±30BPの数値が得られている。

第４層（造成層）

第４層は殆ど混入物の見られない赤色土で構成されている。そのため、当初は地山と考えていたが、岩盤確認のために設定したトレンチ下部から第５層以下の遺物包含層が確認されたことから、本層は第６層で起きた火災後の造成層と考えている。最深部では約100㎝を測り、分層が不可能なほど均質で密に堆積している。このことから、本層は城外の同一地域から城内に持ち込まれ、短時間で投入されたことが考えられる（第９図４、図版６－４～６）。

本層はほぼ無遺物の層であるが、この前後の第３層、第５層も造成層として連続する工程が想定できることから、同時期の層と考えられる。

第５層（造成層）

第５層は、第６層の火災直後に造成された層で、第３層、第４層と同様な時期が想定できる。しかし、第３層、第４層と異なり出土遺物が多く、特に大和系瓦が大量に含まれ、その中に輸入陶磁器が散見できる状況である（第９図４、図版６－５・６）。陶磁器は中国産（青磁、褐釉陶器ほか）、朝鮮産（青磁）、タイ産（褐釉陶器）、本土産（瓦質土器）と多彩で、量的に中国産青磁が多いが、朝鮮産が数点含まれる点で特異である。これらの陶磁器の年代は、やはり14世紀後半～15世紀前半となっており、その堆積状況から、第６層の時期に使用されていた瓦や陶磁器類を、造成土の一部として投入していることが考えられる。このことから、本層の人工遺物は二次的な堆積と言えるが、遺物の使用年代及び廃棄年代を想定する上で参考になると思われる。この遺物の詳細は、第２節２の造成遺構の項で報告する。

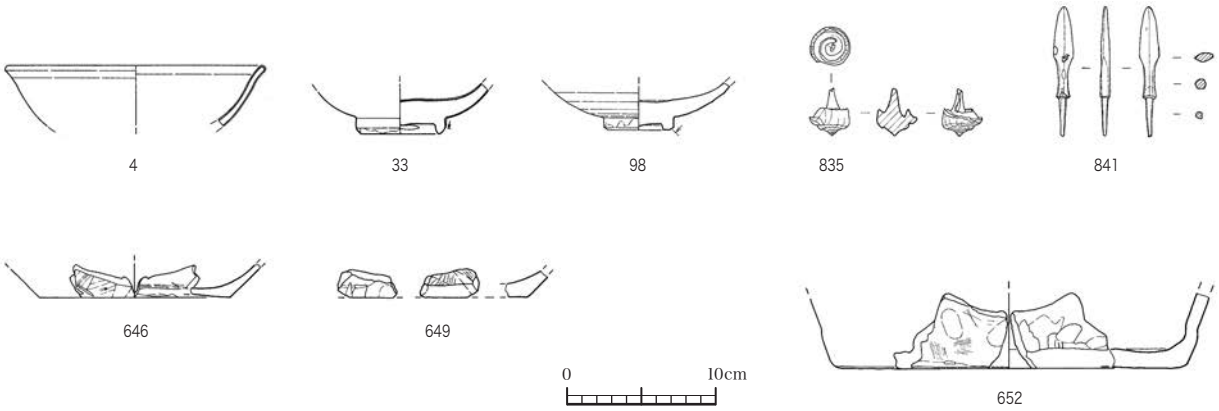
第６層（遺物包含層）

第６層は木炭粉が堆積したような状況であることから、調査時に炭層と称していた層で、火災時の堆積層を想定している。層厚は10㎝前後と薄い。一部のトレンチ内での確認であり、範囲は明確でないが、堆積状況から周辺にも広がることが考えられる（第９図４、図版６－６）。出土遺物は中国産青磁、白磁、骨鏃ほかが含まれ、年代は14世紀後半～15世紀前半である（第14図、図版８）。この陶磁器の年代は、第３層の火災面まで時期差がないことから、15世紀代に起きた火災時の堆積層である可能性が考えられる。なお、本層より得られた炭化物を放射性年代測定にかけ、補正年代で530±30BPの数値が得られている。

第７層（遺物包含層）

第７層は、火災面と考えられる第６層の下に堆積する層で、暗茶褐色を呈する層である。確認されたのはE-３グリッドトレンチ内のみであることから、範囲については不明であるが、岩盤と思われる石灰岩を内包しており、岩盤上に堆積する層であることが考えられる（第９図４、図版６－６）。しかし、発掘により焼土が大量に出土するとともに、平底及び丸底になると思われる土器片が出土しており、地山ではなさそうである。本層からは陶磁器の出土が見られないことから、時期については判然としないが、出土する土器片はグスク土器に限られており、第６層の15世紀以前の時期が考えられる（第14図）。

なお、多量に出土した焼土については、形状が不定形で混入物も見られないことから、人工物ではないことが考えられる。その成因として、直上の第６層が火災面と考えられることから、その火災時に地表面が高熱にさらされたことにより、地中で焼土塊が生じたことが想定できる。



第14図　第６層・第７層出土遺物（第6層：4・33・98・835・841、第7層：646・649・652）

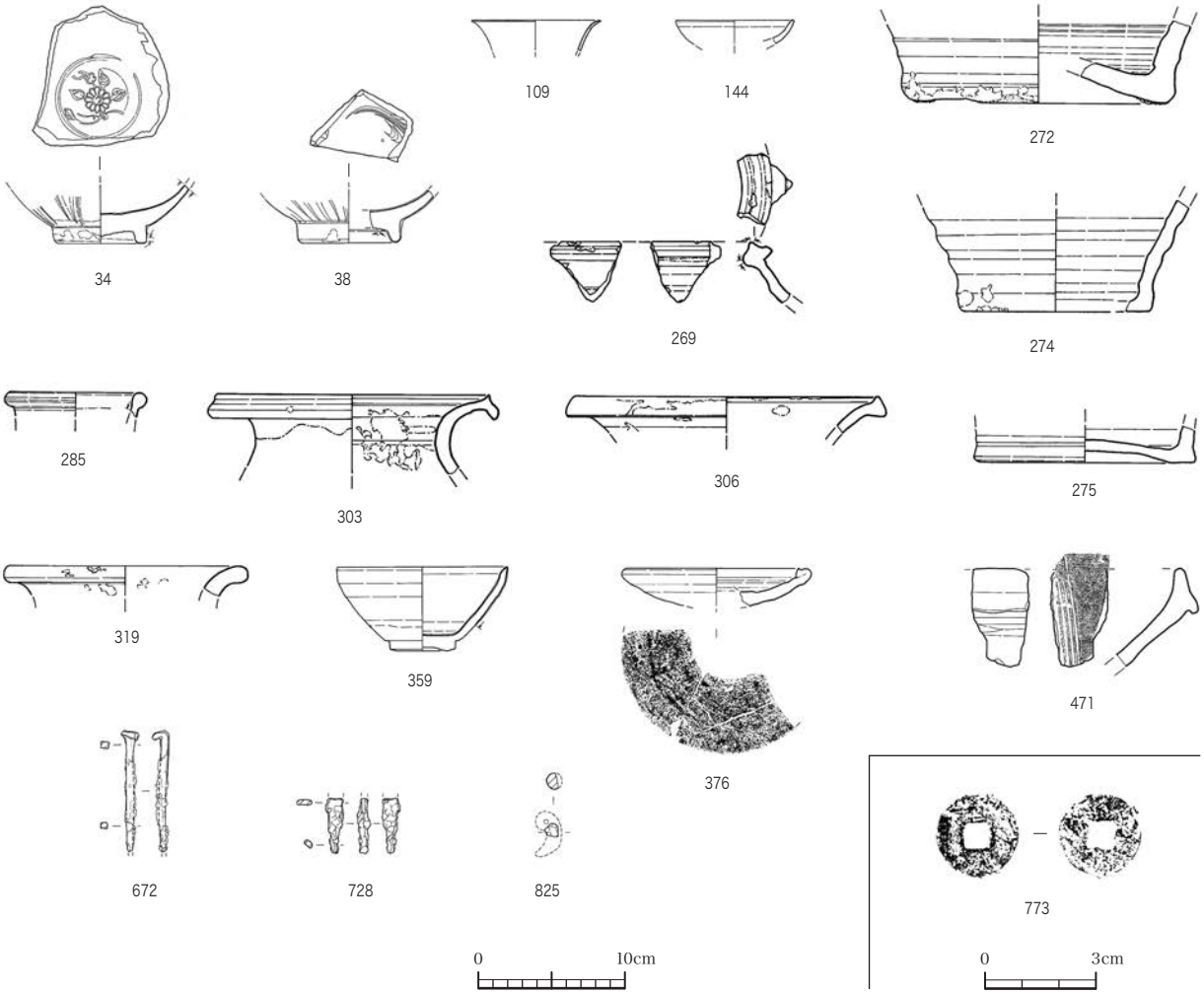
１．E−５第６層　中国産白磁出土状況

２．E−４第６層　骨鏃出土状況

図版８　層序に伴う遺物出土状況２

黄褐色土（造成層・遺物包含層）

本層は周辺の撹乱により、基壇状遺構の北側にのみ分布する層で、残存する範囲は2グリッド分と小範囲である。第3層の微粒子のコーラルを突き固めた舗装面と似ている点で、当初は基壇の北側を埋めるために投入された層と思われた。しかし、本層には褐釉陶器や貝類等の自然遺物が多く、その他青磁、黒釉陶器、備前擂鉢等が得られ、その年代は16世紀代の資料も含まれている（第15図）。この点で15世紀前半までとしている基壇状遺構と時期差が生じている。そのため、本層は基壇状遺構が機能しなくなり、その後、基壇を埋めるように造成した層である可能性が考えられる。本層に関連が考えられる遺構としては、時期的に淑順門周辺の遺構があげられるが、淑順門南側の遺構に連続する層が見られないため、明確な関係は不明である。



第15図　黄褐色土出土遺物

第２節　遺構と主な遺物

今回報告する遺構は、平成11（1999）年度及び平成19（2007）年度調査分において検出したものである。平成11（1999）年度調査分では、内郭石積みをはじめとして、４期に区分できる多数の遺構が検出されている（第16図）。

また、平成 19（2007）年度調査時に検出された遺構の種別は、内郭造成に係る遺構から、石積み、礎石建物跡及び、これに付帯する周辺施設の遺構を中心に、数種が検出されている。その年代は、14世紀後半から沖縄戦終結後までの７期に区分が可能であり、これらの遺構は首里城の幾多の変遷を物語っている（第 10 図・第２表）。この総合的な解釈は考察でまとめることとし、ここでは今回検出した遺構を個別に報告する。また本節では、遺構から出土した主な遺物の実測図を掲載し、その性格及び時期特定の参考としたい。なお、遺物の番号は通し番号を付し、この観察表及び写真は、第５章 遺物の章で種別ごとに掲載している。

１．石積み

首里城が機能していた約500年間、多くの拡張や重修を経て、現在の復元対象となる首里城が形成されている。その痕跡は、発掘調査により検出される多くの重複する石積み等の遺構が物語っているが、今回の調査においても、多数の石積みが検出されている。その年代は、14世紀後半から戦後までと幅広く、石積みの切り合い及び、周辺遺構との先後関係、裏込めからの出土遺物により築造の順番・年代を割り出し、時期区分を行っている。次に石積みごとの概要を記す。

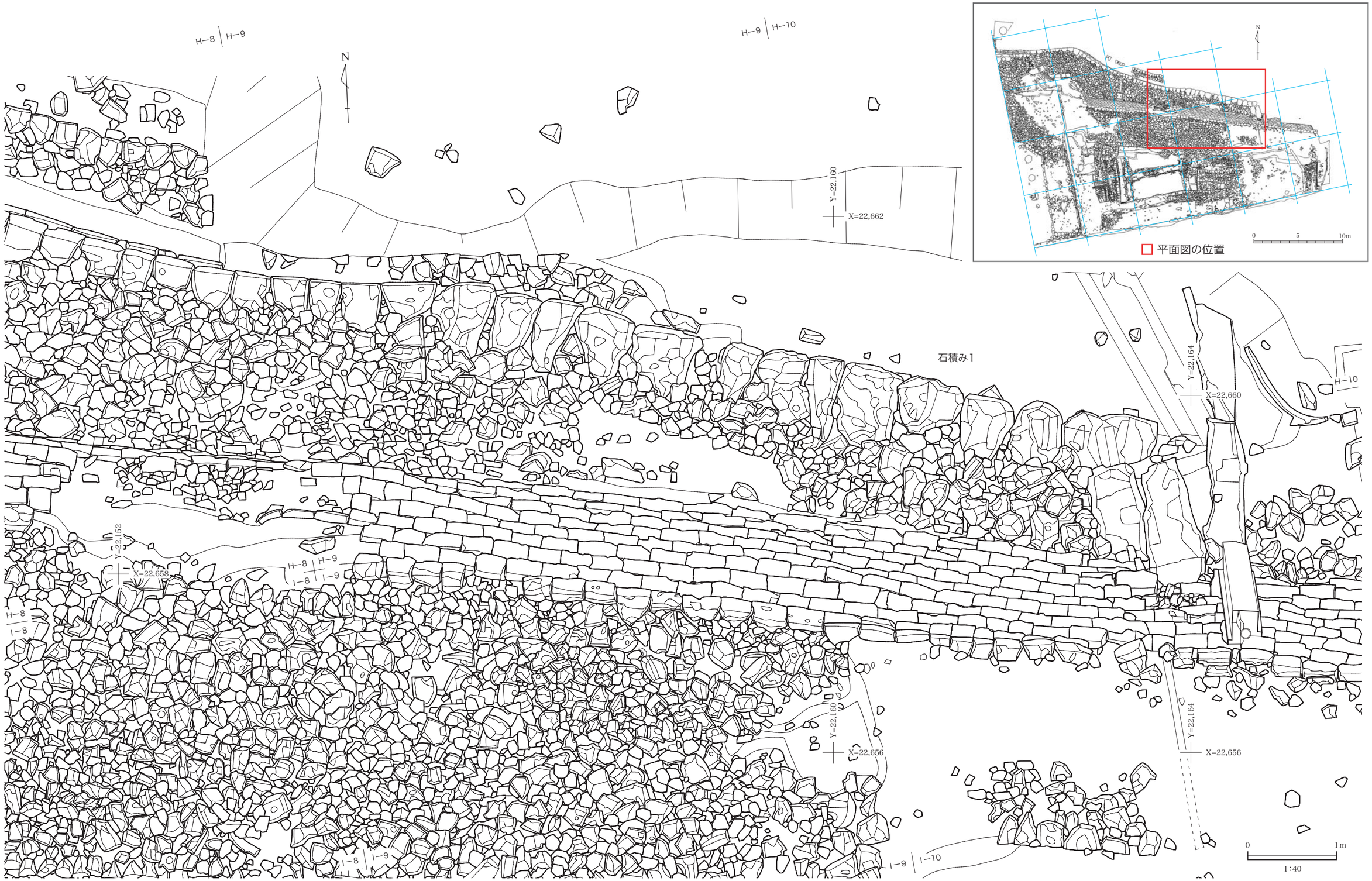
①石積み１（第17･18図、図版1・9）

G-6～8、H-8～10、I-10グリッドにおいて石積み１を検出した。遺構はほぼ東西方向に延びるが、G-7グリッドにおいて南側にゆるく折れ、南にわずかにたわみながら東へ連なる。積み石は琉球石灰岩で、幅が約50～80㎝大の長方形の切石を用いている。この切石の控えは、舌状に尖るものと丸く収まるものが混在し、その長さも不揃いであるが、相対的に見ると短く丸みを持つ石が多い。積み方は基本的に横目地の通る布積みである。裏込めには20㎝内外の野面石を密に詰める（図版９－５）。調査範囲の関係で根石を確認するに至っていないが、調査区の西端にあたるA-３グリッドにおいては、高さ３ｍ以上が残存し、その勾配は72度で積み上げられている（図版９－２）。なお、この石積みは同グリッド内で緩やかな曲線を描いて南側へ分岐するが、これを辿ると旧琉球大学の擁壁石積みにつながる。このことから、琉球大学石積みの一部は、石積み１の上に積まれていることがわかる（図版９－２）。

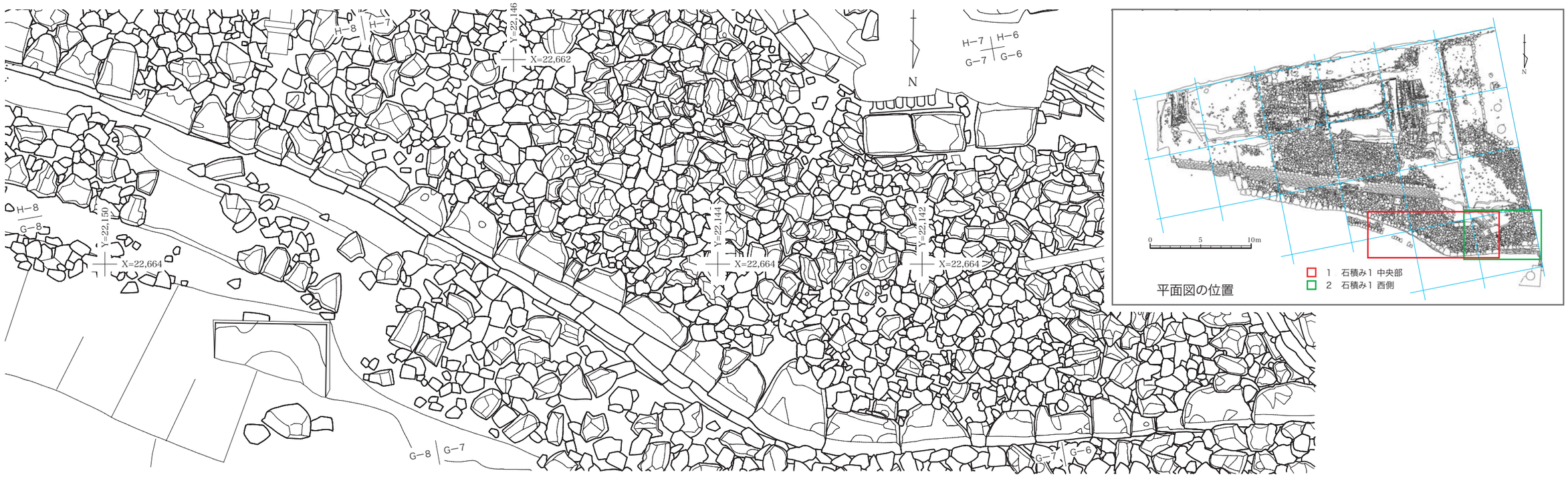
この石積み１の天端はすべて失われており、当初の高さは不明である。しかし、そのライン及び積み石のサイズ等の状況から、本石積みは内郭石積みの外面である可能性が高い。この場合、その南側に背反した状態で内面石積みの検出が予測できるが、この可能性として、I-10グリッドにおいて、この石積み１から約５ｍ南側に、同様な並びで南面した１列の石積みが検出されている（第17図）。しかし、その規模は５点程度の切石が並ぶにすぎず判然としない。その他、内面石積みの可能性があるとすれば、琉球大学石積み及びその裏込め下にあるか、この施工時に撤去されたことが考えられる。

N
石積み 1
琉球大学石積み
淑順門南側遺構
側溝遺構
階段遺構
石積み 6
石積み 3
石積み 5
埋甕遺構
石積み 4
石積み 2
基壇状遺構
シーリ遺構
側溝遺構
礎石 4
礎石 1
ピット 9
礎石抜穴 1
礎石抜穴 2
礎石 5
礎石 2
土留め 2
ピット 1
ピット 8
ピット 2
ピット 3
ピット 4
ピット 5
ピット 6
ピット 7
方形落ち込み
礎石 3
礎石抜穴 3
石積み 7
礎石 6
礎石抜穴 4
ピット 10
礎石建物跡
造成遺構
土留め 1
ピット 11
土留め 2
ピット 12
台形状石組み
台形状石組み西側
台形状石組み東側
琉球大学石積み
石積み 1
X=23,666
X=23,662
X=23,658
X=23,654
X=23,650
X=23,646
X=23,642
Y=22,119
Y=22,123
Y=22,127
Y=22,131
Y=22,136
Y=22,140
Y=22,144
Y=22,148
Y=22,152
Y=22,156
Y=22,160
Y=22,164
Y=22,168
Y=22,172
0
5
10m
1:150
平成 11 年度調査区グリッド…G–6～ J–11（20 グリッド）
平成 19 年度調査区グリッド…A–1～ F–5（24 グリッド）

第16図　遺構配置図



第17図　石積み１平面図①



1　石積み1 中央部平面図

2　石積み1 西側平面図

3　石積み1 西端部立面図

第18図　石積み１平面図②

1．石積み１遠景（西から）

2．石積み１西端（東から）

3．石積み１（東から）

4．石積み１及び前面石積み（北西から）

5．石積み１積み石の様子（北から）

6．石積み１検出作業状況（西から）

図版９　石積み１

なお、平成16(2004)年度に調査を実施した淑順門地区発掘調査では、この石積みの西側につながる遺構(H16石積み2)が検出されており、その内面と思われる石積み(H16石積み8)も小範囲ながら検出している。この石積みの幅は約5mであり、石積み1の状況に類似する(沖縄県立埋蔵文化財センター 2006)。

また、G・H-8グリッドにおいては、石積み1の約1m北側に沿うように、北面して1列の石積みが確認されている(第18図、図版9-3・4)。30㎝内外の石灰岩を相方積みした遺構で、根石は確認していない。検出範囲が断片的であることから、その性格は不明であるが、石積み1に関連する何らかの機能が考えられる。

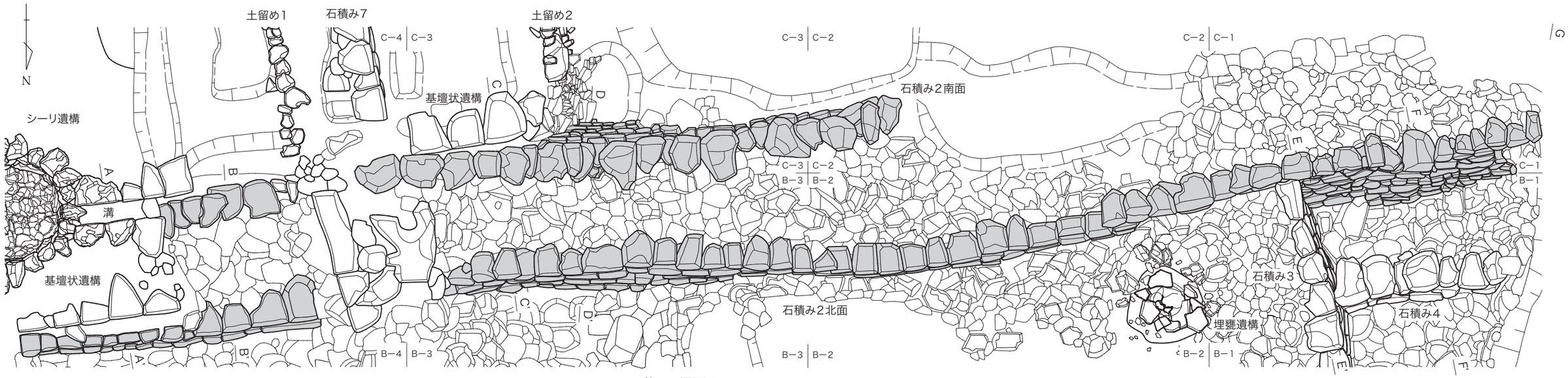
出土遺物は、殆どが遺構直上まで厚く堆積していた撹乱層からの出土であり、裏込めからの遺物も確認できなかったことから、築造年代を特定できる状況にないが、この石積み1は石積み2の築造後に積まれ、その直後に両石積み間が栗石により埋められることになる。次項の石積み2と淑順門付近にある内郭石積みの裏込め・栗石内からは、15世紀代の陶磁器が出土しており、築造年代の参考になるものと思われることから、ここではそこから出土した遺物を石積み2とも関連させ、石積み1・2間栗石内出土遺物として第21図に掲載する。

②石積み2 (第19～21図、図版10～12)

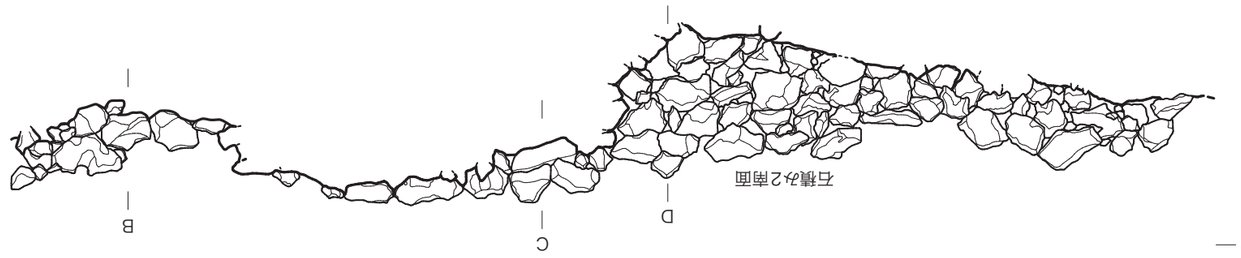
石積み2と称するのは、B・C-1～4グリッドにおいて検出された、ほぼ東西方向に直線状に積まれた石積みである。天端は残存しないが、検出した範囲は東西に約15m、幅140㎝～190㎝、高さは2m以上で根石は確認していない。今回は周辺遺構を保護するため検出範囲が限られ、全貌を把握するに至らなかったが、その延長はさらに東西へとおよび、根石の深度も深くなることが想定できる。

石積みは南北に面を有する両面積みで、外面となる北面は琉球石灰岩を粗く長方形に加工し、20㎝～40㎝大の不揃いな石を用いている(第19図・図版11)。積み方は横目地の通った布積みを基本とするが、数段にわたり縦目地が通る箇所も見られる。勾配は東側でほぼ垂直に積まれ、西側では70～80度となっている。積み石の間は隙間が多く、部位によって亀裂やはらみが生じ、それを補修したと思われる痕跡も見受けられる(第19図1・図版11-2)。このことから北面部分はある一定期間、石積みとして露出していたと思われるが、北側に内郭石積みとなる石積み1が積まれると、その間は直後に裏込め石・栗石により充填され、またこの石積み2の上には、後述する基壇状遺構が築造されている。このことから、石積み2はその時点で石積みとしての機能を終えたと見られる。さらに、裏込めから出土する遺物の年代も15世紀代に収まることから、石積み2が露出していた期間はそう長くなかったことが考えられる。

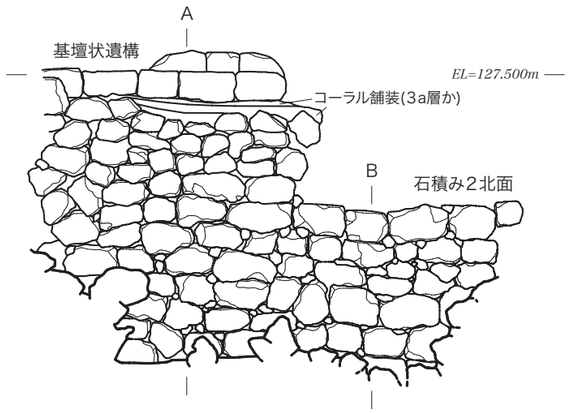
これに対し、C-3・B-4グリッドで検出された南面となる内面は、すべて未加工の自然石を用いている(第19図4・図版12-4)。石のサイズは不揃いで、勾配は約80度に積まれており、この前面(南側)には、次項の造成遺構で記す造成土及び裏込め石が厚く投入されている。この状況から、当石積み面は、当初から埋めることを前提に積まれた可能性が高く、このことから石積み及び土留めとしての機能が考えられる。また、この石積み南面及び裏込め部分の検出時には、中国産陶磁器類や金属製品等、数種の遺物が検出され、その年代は概ね15世紀前半に留まっている。これらのことから、石積み2の築造から南側の造成、北側の石積み1にあたる内郭石積み築造までの大きな時期差は認められず、この工程は、内郭部分を造成する一連の工程として、短期間で行われたことが想定できる。



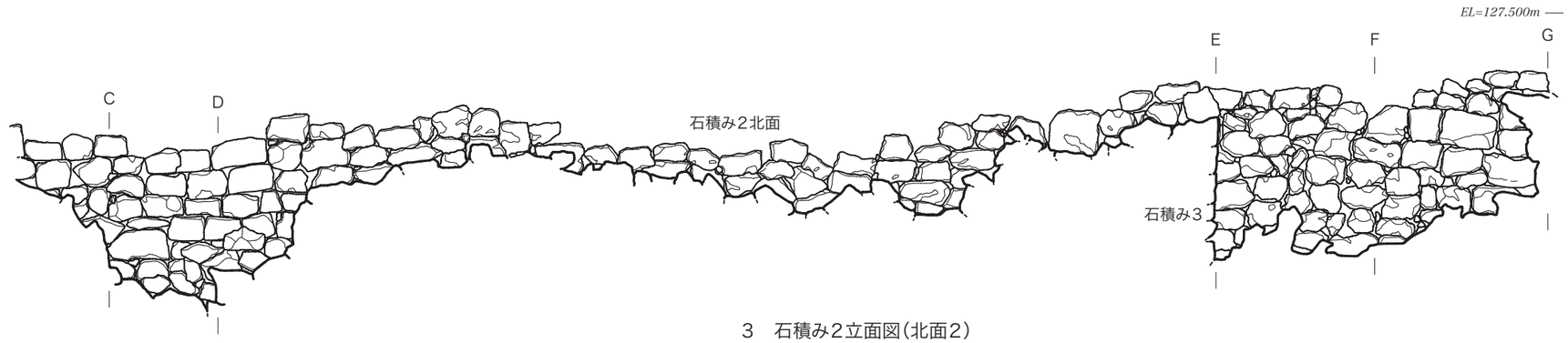
1　石積み2平面図



4　石積み2立面図(南面)



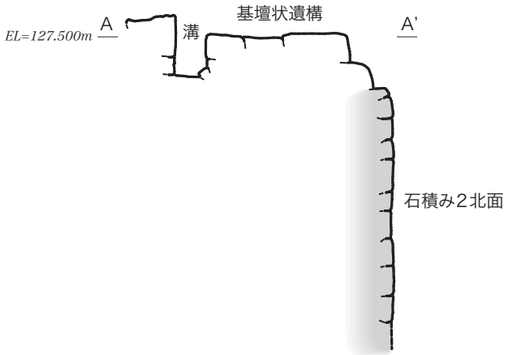
2　石積み2立面図(北面1)



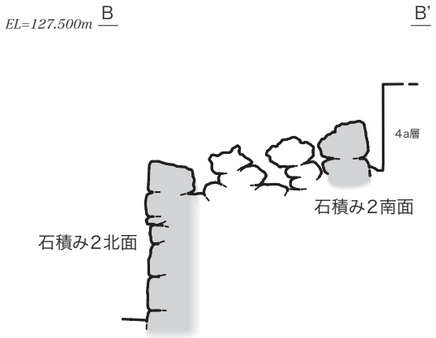
3　石積み2立面図(北面2)

0　1m
1:40

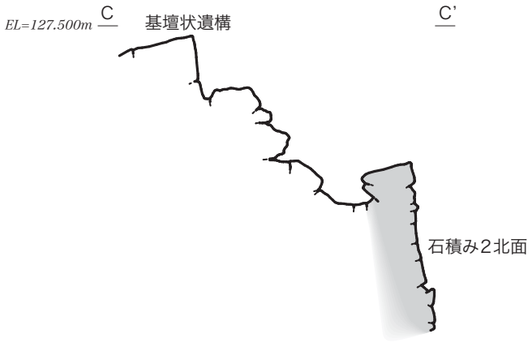
第19図　石積み2①



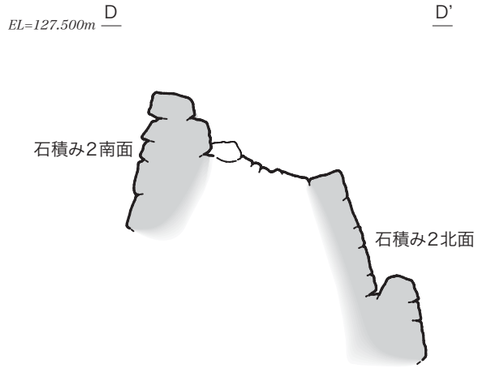
1　石積み2 A―A' 断面図



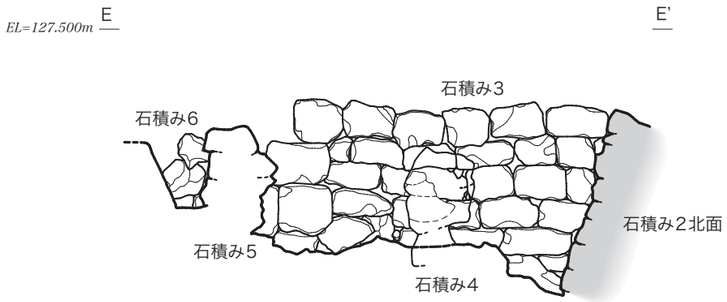
2　石積み2 B―B' 断面図



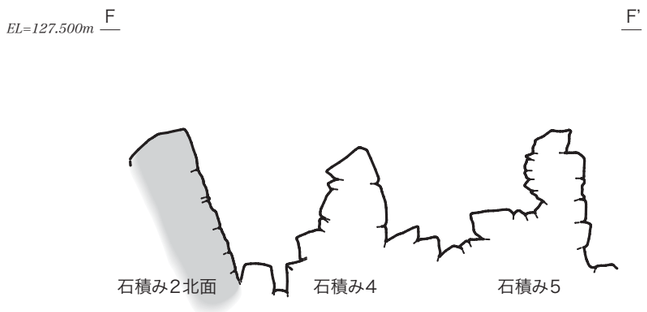
3　石積み2 C―C' 断面図



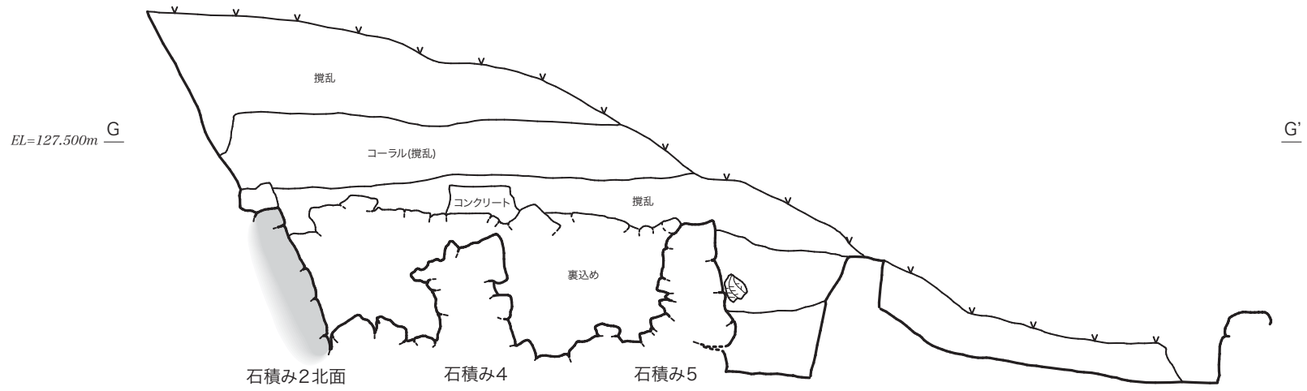
4　石積み2 D―D' 断面図



5　石積み2 E―E' 断面図



6　石積み2 F―F' 断面図



7　石積み2 G―G' 断面図

0　1m
1:40

第20図　石積み２②

図版10　石積み２～６平面

１．石積み２北面立面（北から）

２．石積み２北面立面（北から）

図版11　石積み２北面立面

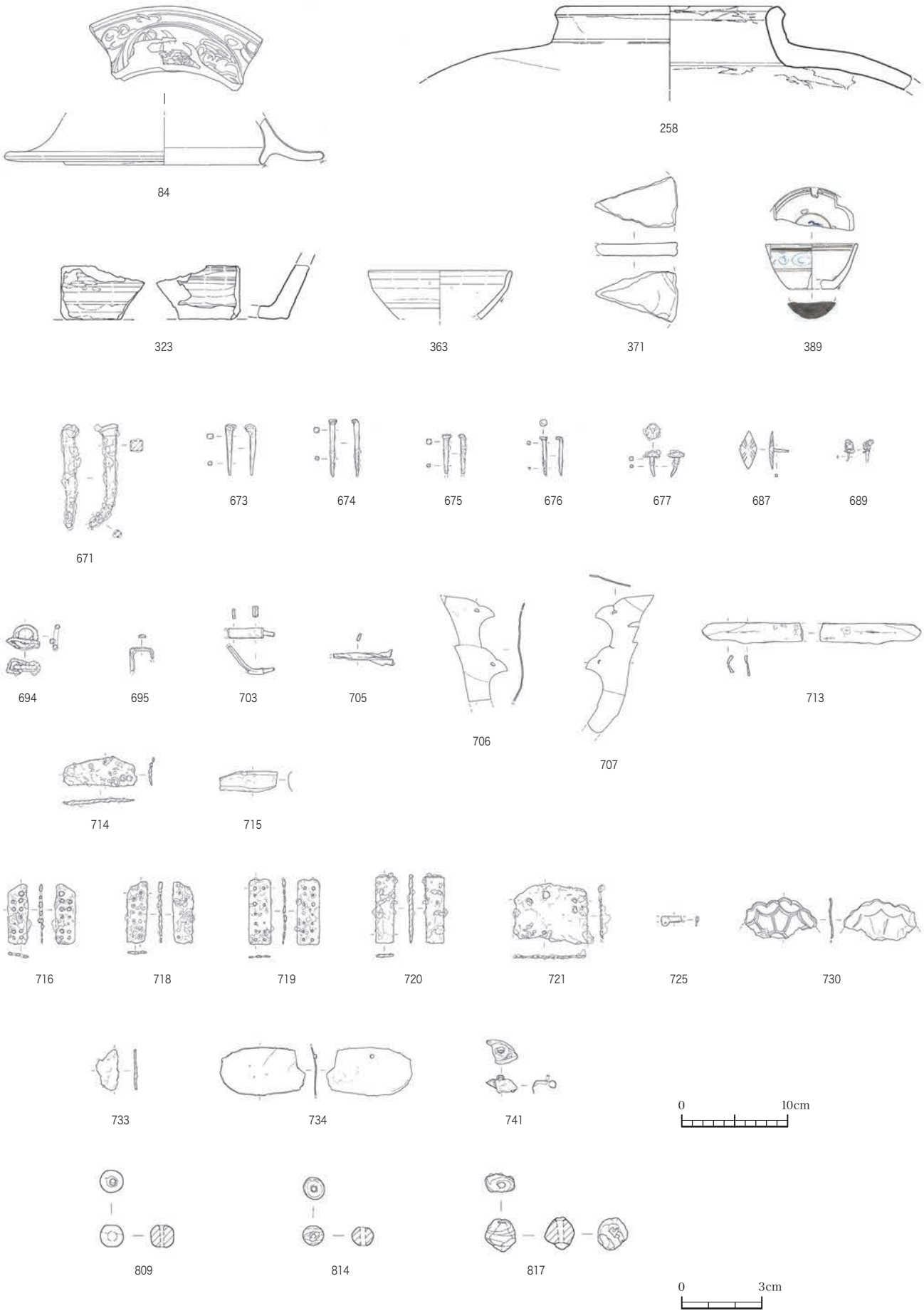
１．石積み２平面１

２．石積み２平面２（西から）

３．石積み２北面立面（北から）

４．石積み２南面立面（南から）

図版12　石積み２



第21図　石積み１・２間栗石内出土遺物

出土遺物は、石積み前後の栗石内から出土しており、石積み北側からの遺物は石積み1とも関連させ、石積み1・2間栗石内出土遺物として第21図に、南側の遺物は造成遺構の遺物として第31・32図に掲載した。陶磁器は、青磁や褐釉陶器が主体となり、その他ベトナム産染付等が見られる。これらの年代は、14世紀後半～15世紀前半に概ねまとまる。その他の遺物としては金属製品が多く、鉄釘や鎧金具等の武具、銭貨が目立つ。中でも兜の前立て（鍬形）は数点出土しており、小札類の出土も多い。銭貨は錆や融解資料が多く、判読が困難な資料が多いが、永樂通寶、洪武通寶が占めており、遺構や陶磁器との年代を比較する上で興味深い。

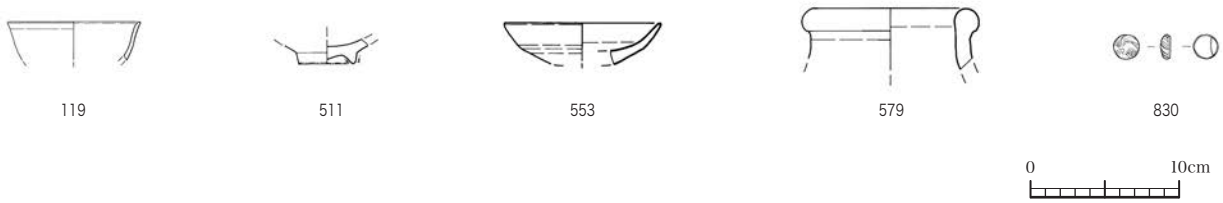
③石積み３（第23・25図、図版13）

石積み３は、B-1グリッドで検出した。遺構は淑順門の南側に位置し、石積み２の北面に南端を接して築造されている。石積みは片面のみで西に面している。天端石は破壊されており、この西面に接して石積み４及び５が並列して積まれている。そのため石積み前面の掘削範囲が狭く、根石の確認に至っていない。検出された高さは約120㎝、長さは280㎝であるが、北側は淑順門遺構下に潜り込むため、全長は確認できない。積み石は約20㎝×40㎝の切石を、横目地の通った布積みにより積まれ、石積み1北面の積み方に似ている。

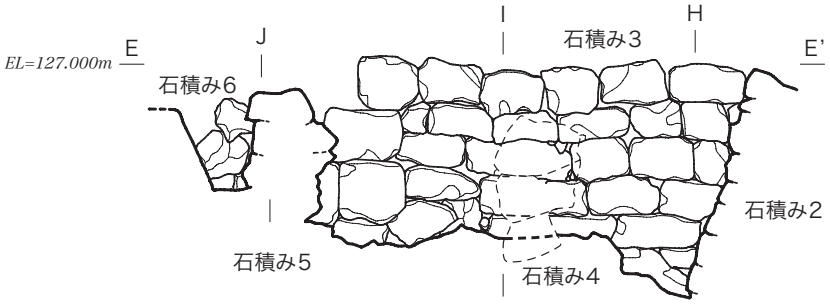
この状況から、石積み３の築造年代は淑順門築造以前であり、石積み２築造以降という先後関係が読める。なお、当石積み裏込め部分には、後述する埋甕遺構や淑順門に関する遺構が検出されていることから掘り下げはできず、出土遺物もわずかだが、そこから出土した黒釉陶器碗１点を図化した（第25図）。これに接する石積み２及び４周辺からの出土遺物にも大きな時期差は認められないことから、両者は14世紀後半から15世紀前半のほぼ同時期に築造され、外郭拡張時から淑順門築造以前まで機能していた可能性が高い。しかし、これらの石積みは、ともに検出範囲が限られていることと、古絵図をはじめとする記録に見えないため、その機能・性格は判然としない。

④石積み４（第22・24図、図版13）

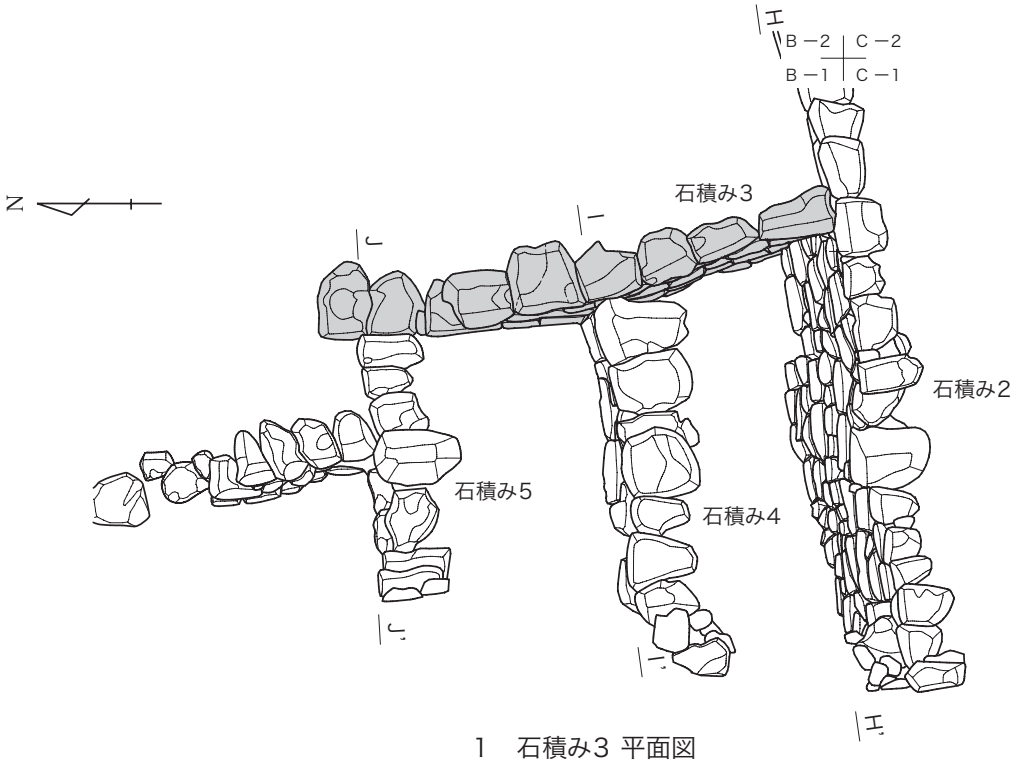
石積み４は、B-1グリッドに位置し、石積み３の西面に東端を接し積まれている。北に面する片面積みで、検出した高さは約40㎝、長さは170㎝であるが、西端は調査区外で北殿下に延びると思われ、北側には並行して石積み５が積まれる。そのため全長は不明で、根石の確認も不可能であった。施工は不揃いな切石を雑に積み、隙間が多く不安定である。裏込めの上層は、黒褐色土の撹乱層が浅く堆積するが、沖縄戦後の開発時に混入したものと思われ、沖縄産陶器が出土している（第22図）。この撹乱層以下は黄褐色土が主体となり、大和系瓦や中国産陶磁器の細片がわずかに出土している。



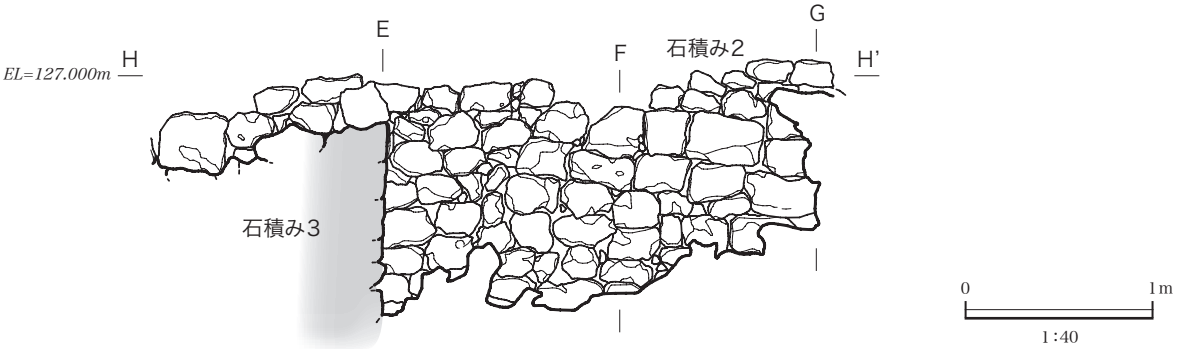
第22図　石積み４出土遺物



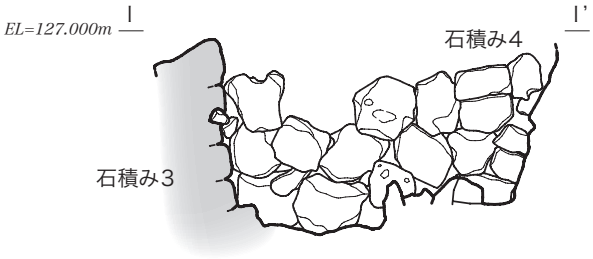
2　石積み3立面図(西面)



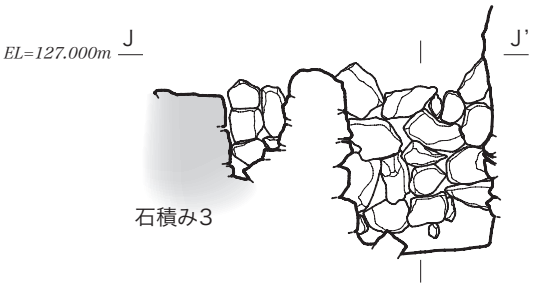
1　石積み3 平面図



3　石積み3 H―H'断面図

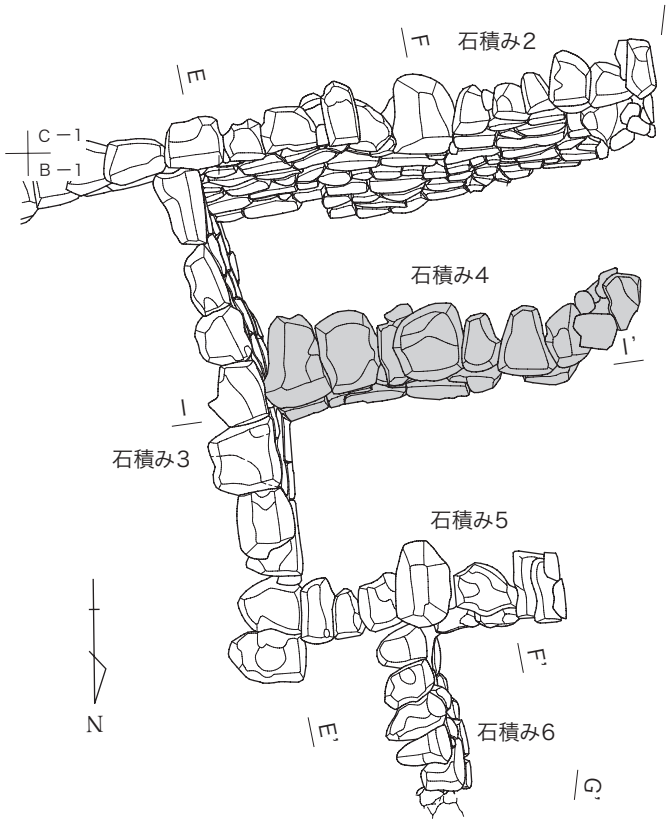


4　石積み3 I―I' 断面図



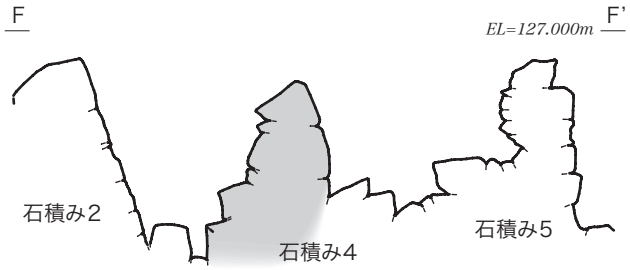
5　石積み3 J―J' 断面図

第23図　石積み3

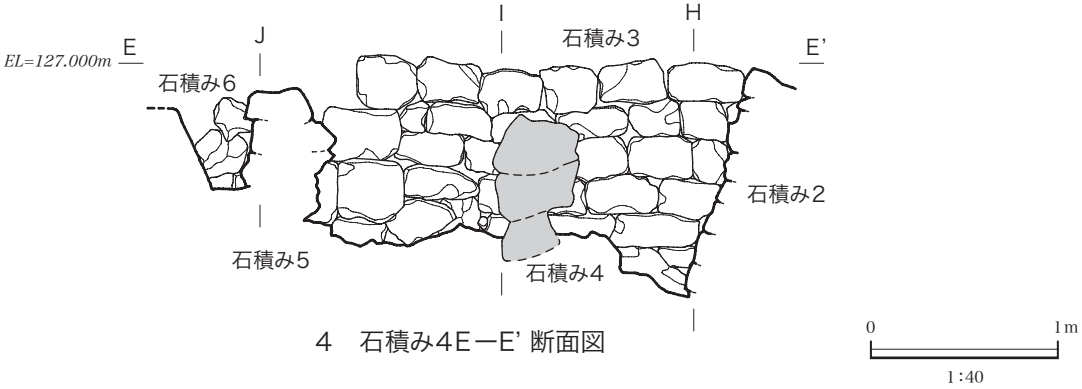


1　石積み4平面図

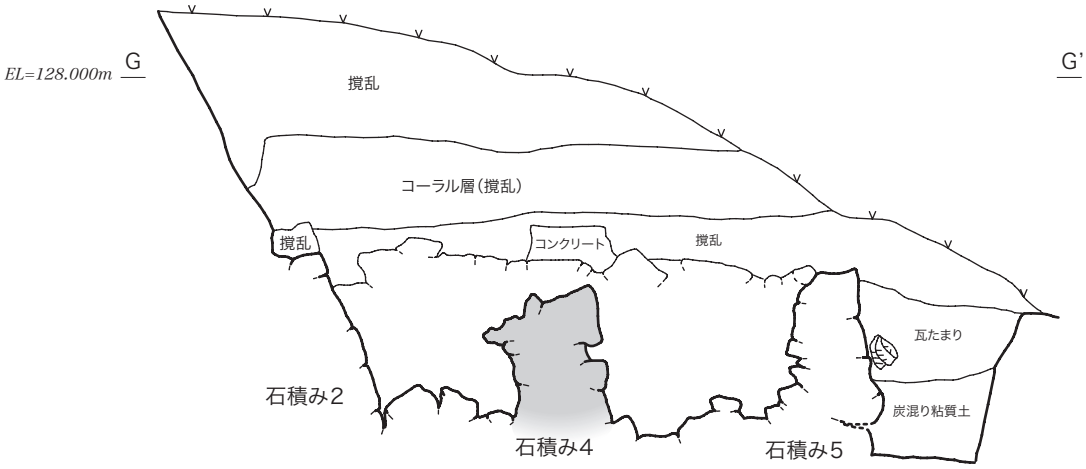
2　石積み4立面図（北面）



3　石積み4F－F' 断面図



4　石積み4E－E' 断面図

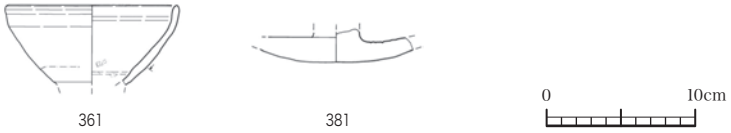


5　石積み4G－G' 断面図

第24図　石積み4

⑤石積み５（第25・26図、図版13）

石積み５は石積み３の西面に東端を接し、石積み４の約150㎝北側に並行して積まれた石積みである。北面するこの石積みも、石積み４同様に西側が調査区外であるため全長は不明で、前面には石積み６の南端が接して積まれていることから、根石の確認もできなかった。検出した高さは約１ｍ、長さは約140㎝である。積み方は石積み４と同様、不揃いなサイズの切石を雑に積み、隙間が多い。裏込めからの出土遺物はわずかだが、タイ産半錬土器の蓋が得られている（第25図）。



第25図　石積み３・５出土遺物（石積み３：361、石積み５：381）

⑥石積み６（第27・28図、図版14）

石積み６は、A・B-1グリッドにおいて検出された石積みで、石積み５の北面に南端を接し、西側に面を有する石積みである。北端は淑順門の手前で西へ折れ、平成16（2004）年度調査時の石積み４へとつながる。検出した高さは最大で約110㎝、長さは350㎝である。この前面には、淑順門から分岐する仕切りの石積みが復元されているため、根石の確認はできなかった。積み方は前記した石積み２～５までと様相が異なり、大小の切石や野面石を粗く積んでおり、隙間が多く控えも短いことから不安定で、歪みも顕著である（第27図）。

調査範囲が限られ、裏込め部分の遺物を確認することができなかったが、この前面（西側）を掘り下げると多くの陶磁器が出土した。遺物の種別は中国産陶磁器を主体とするが、タイ産褐釉陶器壺、ベトナム産白磁瓶、備前焼の鉢や沖縄産瓦質土器も含まれ、16世紀後半～17世紀初頭の陶磁器が占めている状況である。この遺物の年代から、石積み６は17世紀初頭まで機能していた可能性がある（第28図）。

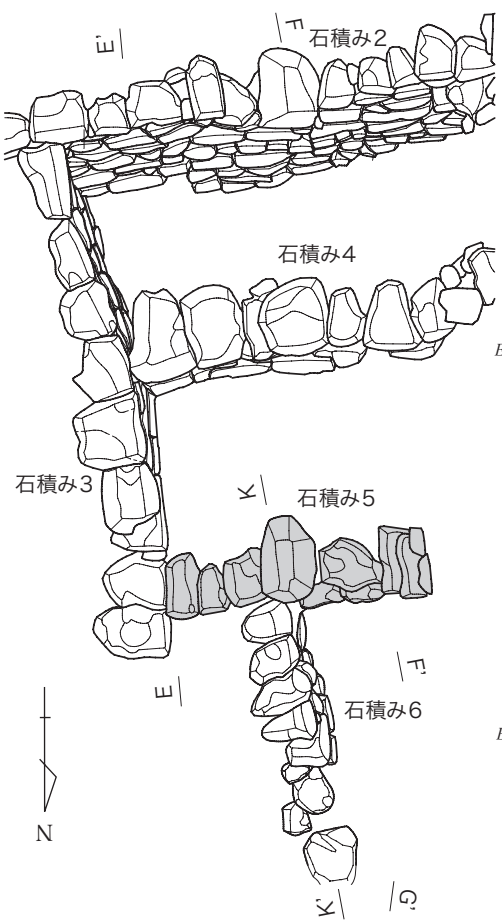
⑦石積み７（第29図、図版15）

石積み７は、B-３・C・D-４グリッドにおいて、南北方向に約８ｍの長さで積まれた西に面を持つ石積みである。約40㎝大の長方形の切石を布積みし２段が残る。表土掘削の時点では、淑順門石階段と女官居室部分の境界かと思われたが、切石の状態や積み方がこれまでの首里城の検出例と異なる点と、裏込め内にガラス片やアフリカマイマイの殻が数点確認されたことから、沖縄戦の後に築造されたものと特定できた。その後、旧琉球大学関係の図面及び写真資料を確認したところ、当地には本館が所在しており、その前面に４段ほど積まれた石積みが見える（第７図）。その積み方や向きから、石積み７はこの本館前石積みの一部と判明した。

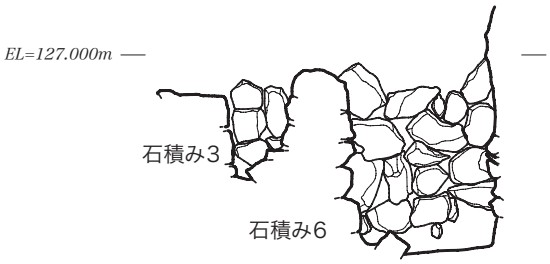
なお、この石積みを施工する際には、その裏込めにあたる部分から前庭部にかけて根石の深さまで掘削したと見られ、周辺の遺構は破壊され撹乱層が入り込んでいる。

〈参考文献〉

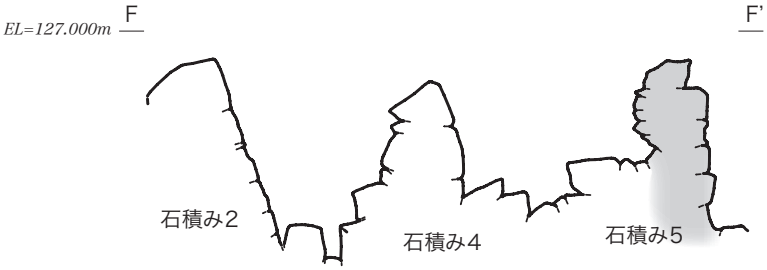
沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡 –淑順門地区発掘調査報告書–』沖縄県立埋蔵文化財センター



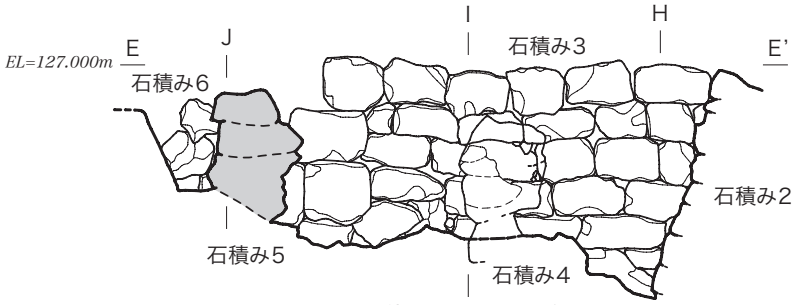
1　石積み5 平面図



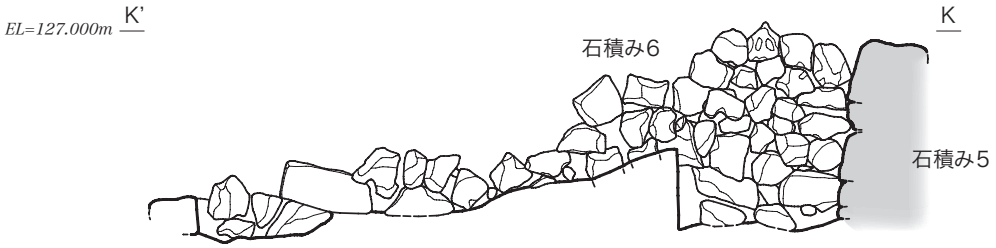
2　石積み5立面図（北面）



3　石積み5 F―F' 断面図

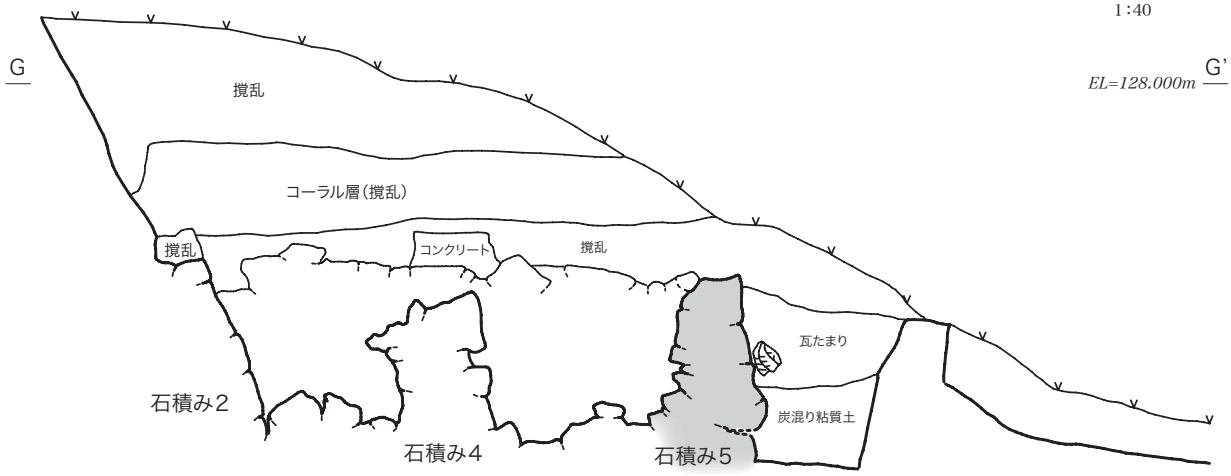


4　石積み5 E―E' 断面図



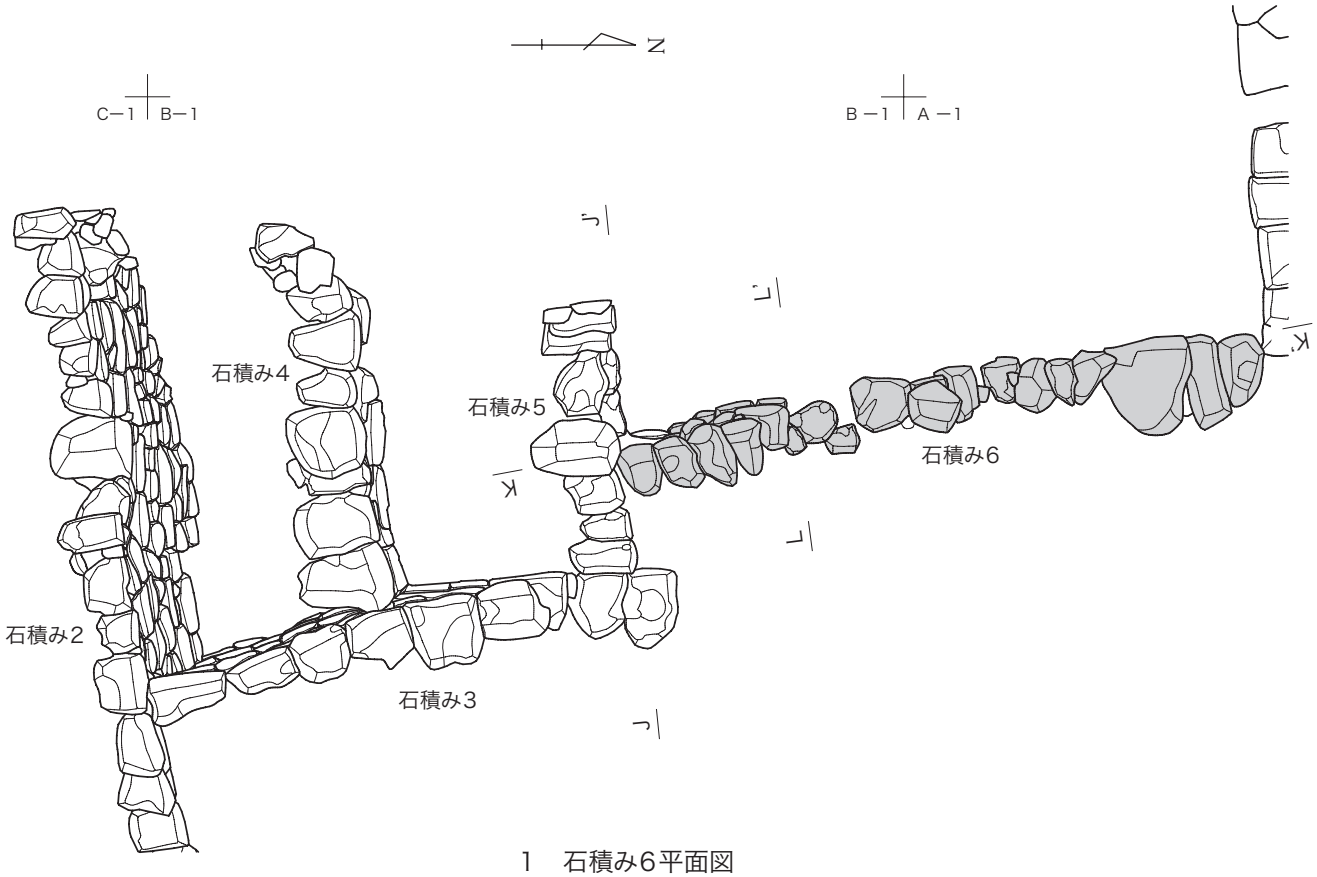
5　石積み5 K―K' 断面図

0　1m
1:40

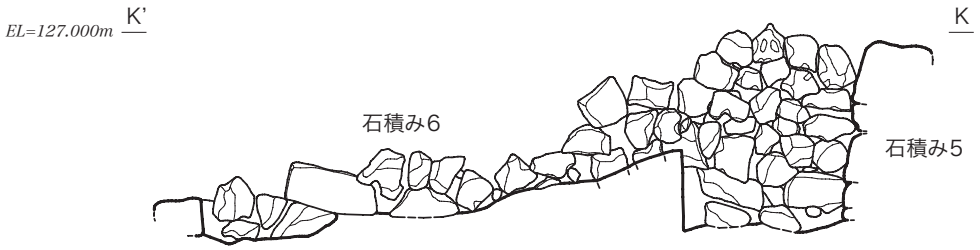


6　石積み5G―G' 断面図

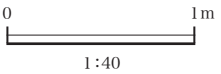
第26図　石積み5

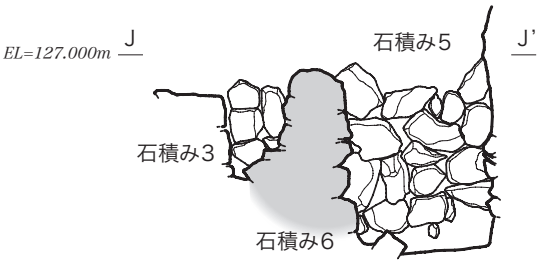


1　石積み6平面図

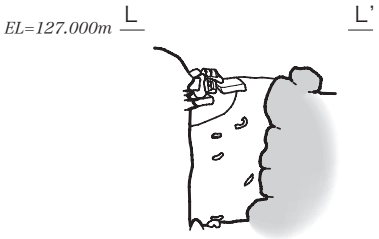


2　石積み6立面図（西面）





3　石積み6 J—J' 断面図



4　石積み6 L—L' 断面図

第27図　石積み6

１．石積み２～５立面平面１（西から）

２．石積み２～５立面平面２（北から）

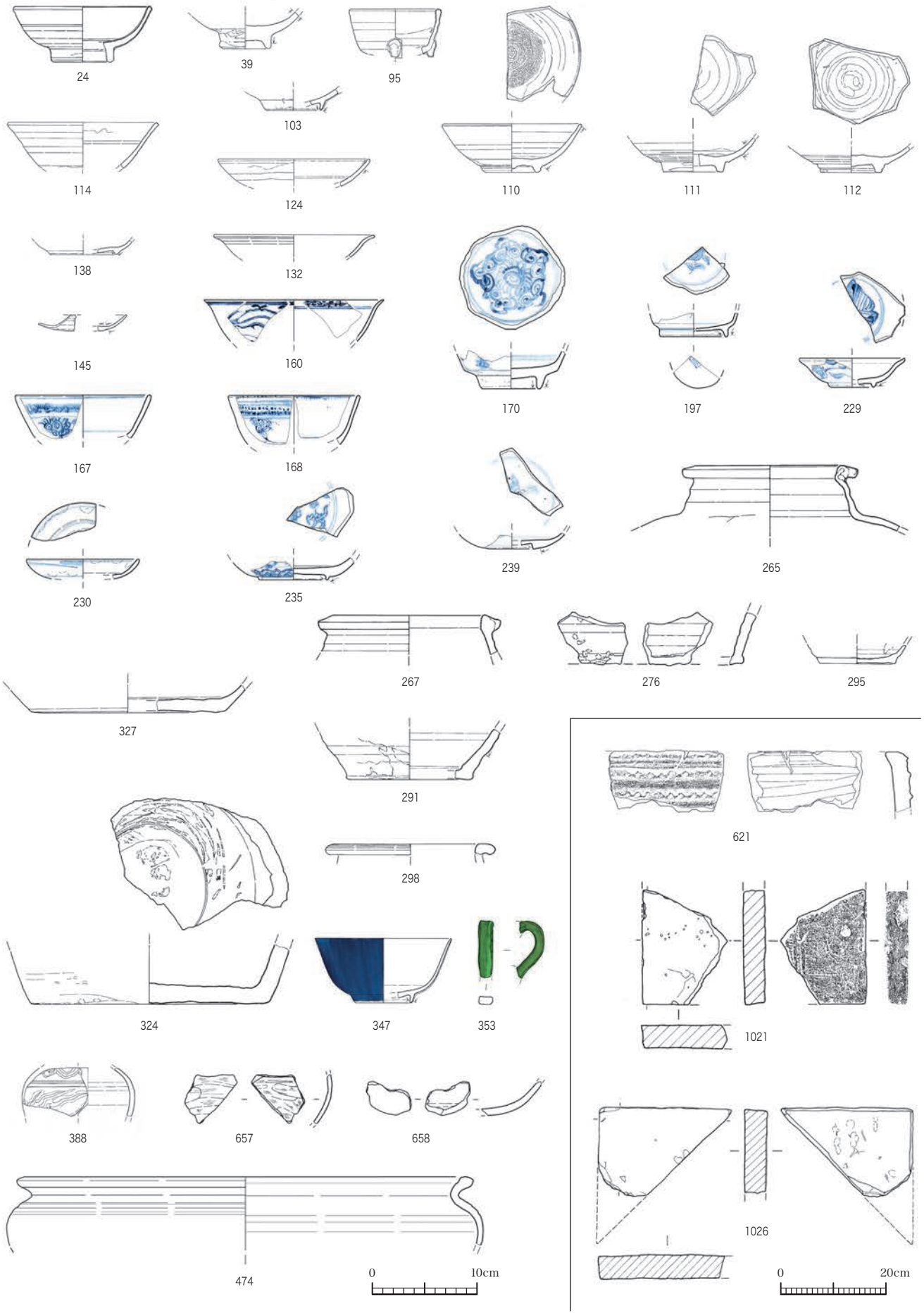
図版13　石積み２～５

１．石積み６東面立面（東から）

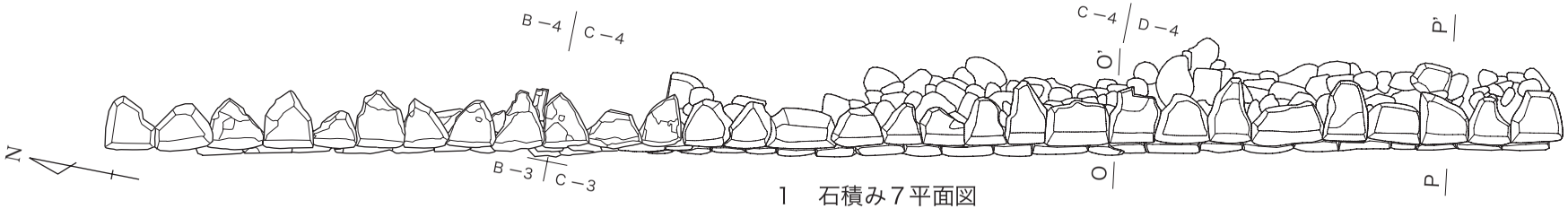
２．石積み６平面

３．石積み６前面堆積土北壁断面

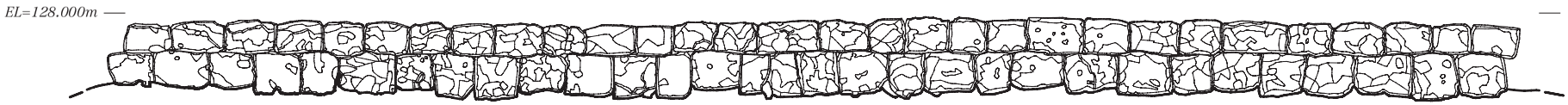
図版14　石積み６



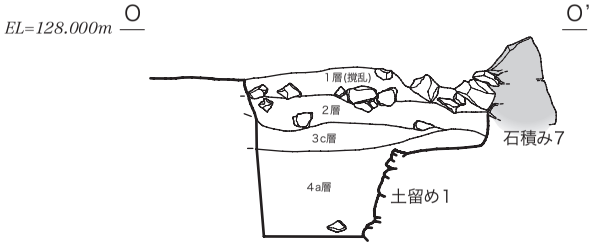
第28図　石積み６出土遺物



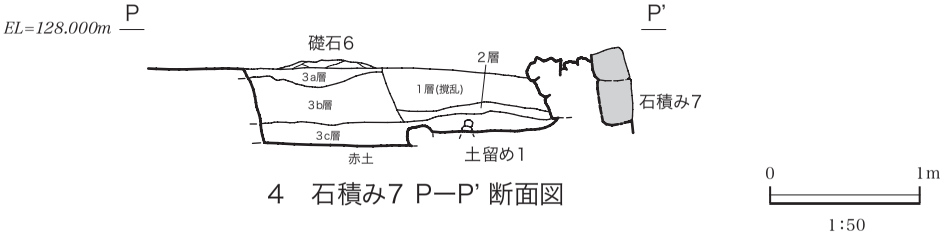
1　石積み７平面図



2　石積み７立面図（西面）



3　石積み7 O―O' 断面図



4　石積み7 P―P' 断面図

第29図　石積み７

1．石積み７（北から）

2．石積み７平面（南西から）

図版15　石積み７

２．造成遺構

平成19（2007）年度の調査では、調査区の大半において多数の遺構が検出されており、その中でも特に、沖縄戦以前のものについては保存の対象となっている。しかし、沖縄戦やその後の開発により、一部においては遺構が破壊され、跡形もない状況が確認できる。このような地点においては、その下層の情報を得るため、トレンチ（溝）掘りによる確認調査を行うことにしている。今回は調査区の南側において、トレンチを数本設けて確認調査を実施した。その結果、内郭部分を大規模に造成したと思われる痕跡が確認されている。この造成の工程及び機能については、第７章にて考察するが、次に個々の状況について報告する。

①造成土（第33・34図、図版16～18）

造成土は、C～F-３～５グリッドにおいて検出した。この造成土は大きく上部・下部に大別できる。上部造成層は第３層を主体とする層で、石灰岩礫の層を微粒子のコーラルでサンドする構造を有する。その表面は後述する礎石建物跡が広がり、一面が被熱を受けている。その下部は、第４・５層としている造成土である。表面は殆ど混入物の見られない赤色を呈すことから、当初はこれを地山として考え、この面で調査を終える計画で発掘を進めていた。ところが、周辺の赤色土表面を清掃する内に、赤色土面に石灰岩の石列が現れたことから、この石列を確認する目的でトレンチを設け掘り下げを行った。その結果、赤色土は一帯を埋め立てた造成土で、石列としていたのはこの造成土を区切り、土留めをする目的で積まれたものと判明した（第33図、図版16・17）。

この下部造成土は、土色や性質の違いから、大きく２種に区分が可能であるが、これらの造成土は、後述する礎石建物跡を構築するための一連の工程で施工されたものであり、工程上の先後関係は見られるものの、時期差は認められない。この下層部を確認するため、E-４及びE-５の両グリッドにおいて幅50㎝、東西方向に８ｍの長さでトレンチを設けて調査を行った。両グリッドは隣接するが、その中間を境界として堆積状況が異なることから、グリッドごとに報告を行う。

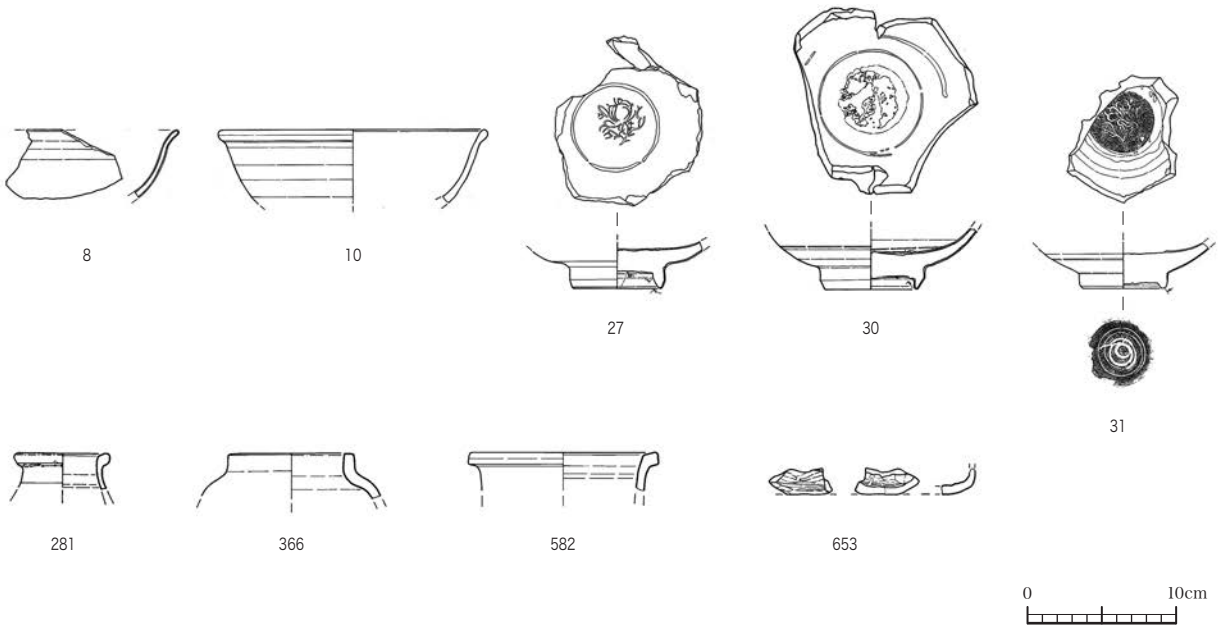
E-４グリッドは、赤色土と大和系瓦を主体とする造成土である。当初は両グリッドともに、殆ど遺物や混入物のない赤色土で構成されていたが、約20㎝掘り下げを行うと黒褐色土の層が現れ、続いて大和系瓦が多量に詰め込まれた層が検出される（第33図２、図版18）。

一方、E-５グリッドは赤色土を主体とする造成層で構成される。E-４グリッドと同様に掘り下げを開始したが、同グリッドで検出した黒褐色土や瓦を主体とする層までレベルを下げても状況は変わらず、遺物も見られない（第33図２、図版17）。

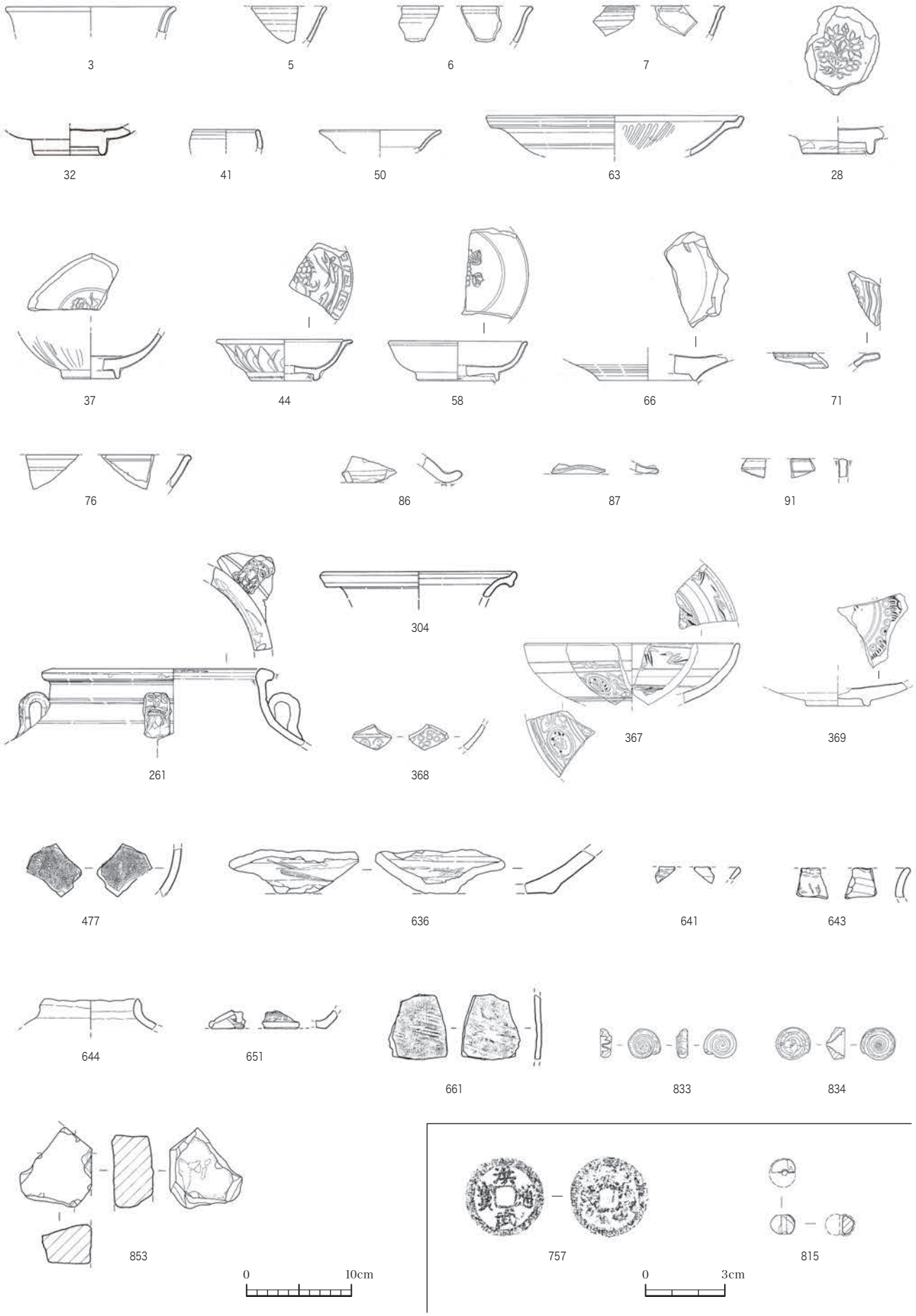
調査したトレンチは、人ひとりがようやく入れる幅で、作業が困難なほど狭いことから、ある程度掘り下げた地点で変化が見られない場合は、掘削を中止する計画でいた。ところが、深度約150㎝地点から、石灰岩礫が敷き詰められた状況が現れ、土色が変わり獣骨や陶磁器類が出土し始める。ここからようやく、両グリッドにおいて共通する層に変わる（図版17）。本層の厚さは５～15㎝と薄く、木炭や灰が堆積したように炭様の黒色を呈することから、調査中は炭層と称し、のちに第６層とした。その次層、第７層は暗赤褐色土で、表層付近に多量の焼土とともに、わずかにグスク土器が含まれる。この層からは、岩盤と思われる琉球石灰岩が検出されていることにより、地山が近いと思われるが、

調査範囲の制約から確認できなかった。この状況から、炭層は火災時の堆積層で、第３～５層までの造成土は、この火災直後に首里城を再建する目的で投入された層であることが想定できる。

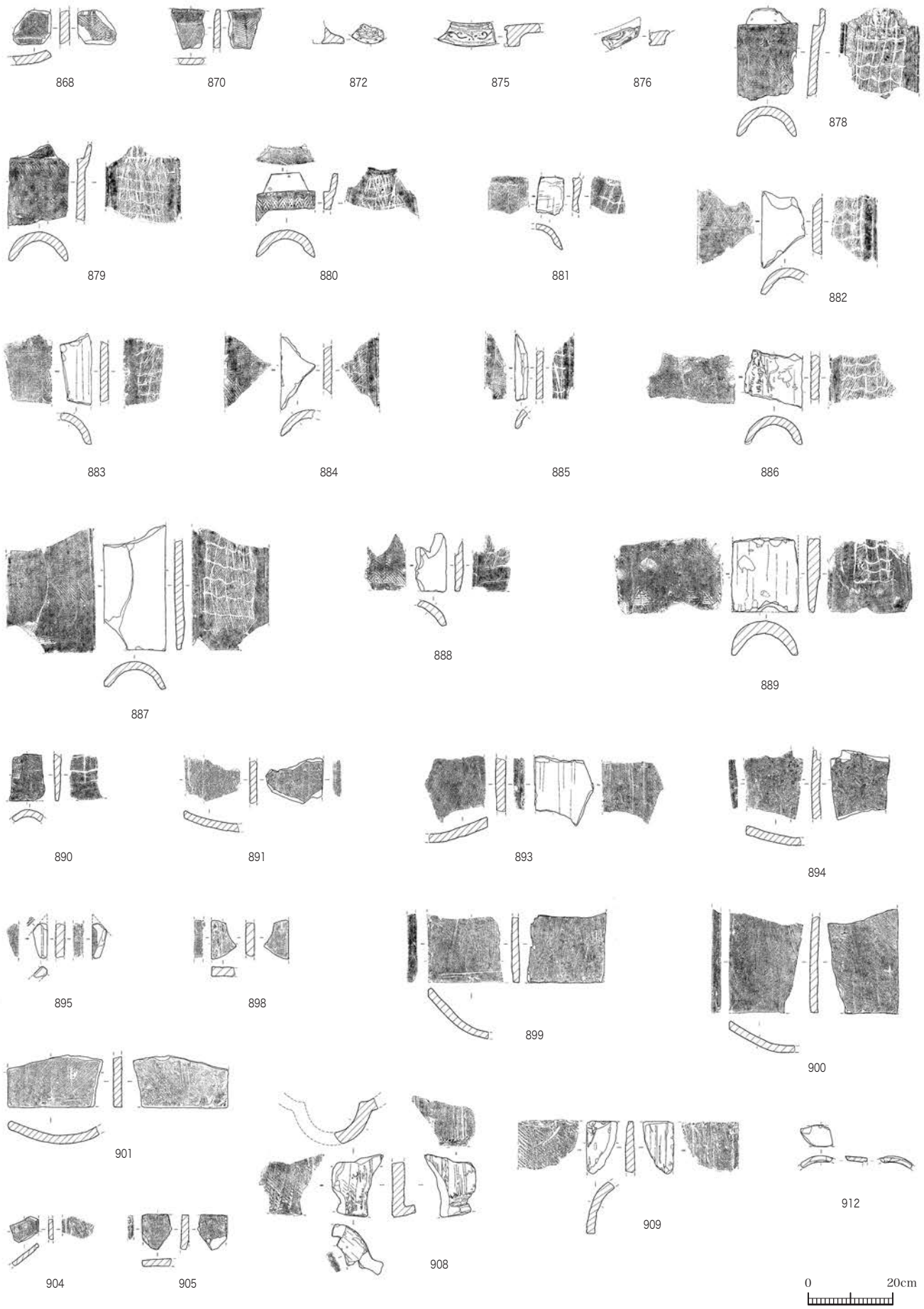
出土遺物は、主に第５層及び石積み２南側栗石内からである。この内、第５層は大和系瓦が大量に投入された層であるが、その中に若干陶磁器や金属製品、自然遺物が混入する。陶磁器は14世紀後半から15世紀前半の中国産青磁、褐釉陶器、タイ産褐釉陶器のほか、朝鮮産の象嵌青磁も数点得られており、製品の多くは粗製が占める傾向にある（第31・32図）。銭貨は洪武通寶（初鋳年1368年）が出土しており、その他、ウシの骨が大量に出土している。石積み２南側栗石内（第30図）及び石積み1・2間栗石内（第21図）からも、この第５層と似た傾向を持つ遺物が出土しており、同時期に造成されたことが考えられる。



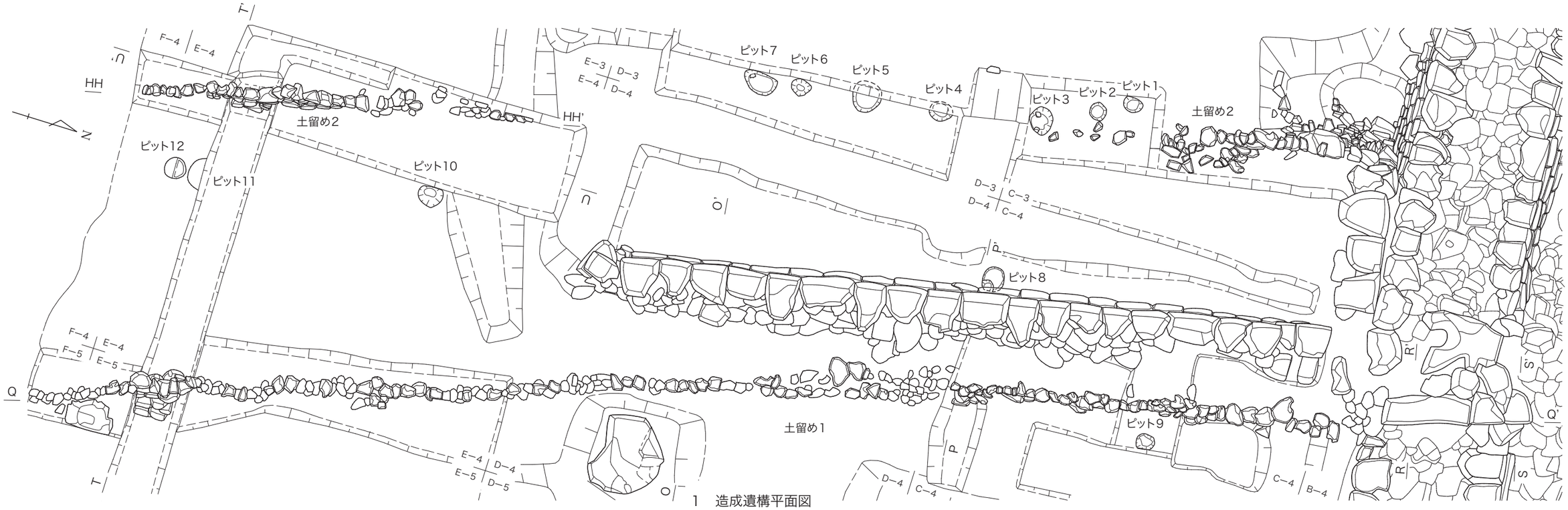
第30図　造成遺構（石積み２南側栗石）出土遺物



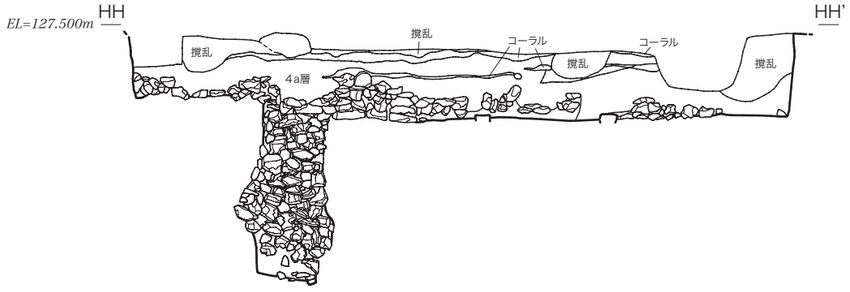
第31図　造成遺構（５層）出土遺物１



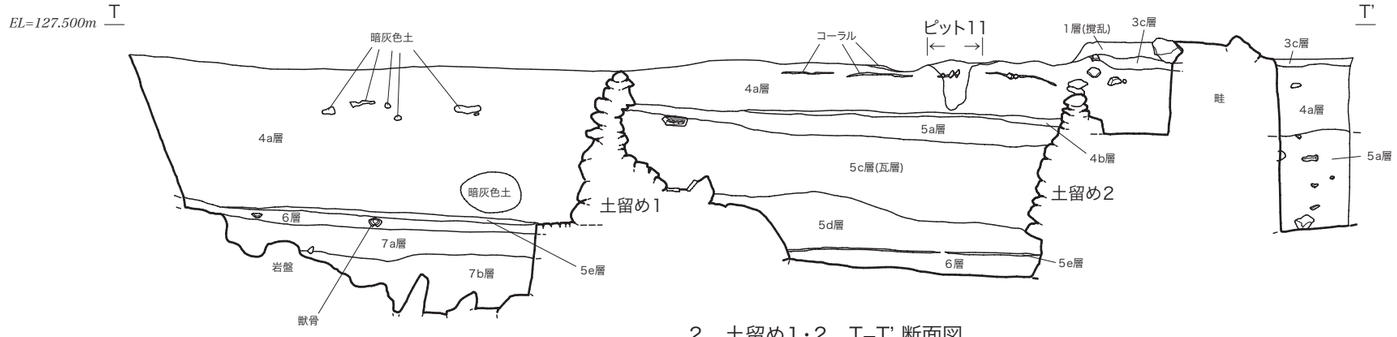
第32図　造成遺構（５層）出土遺物２



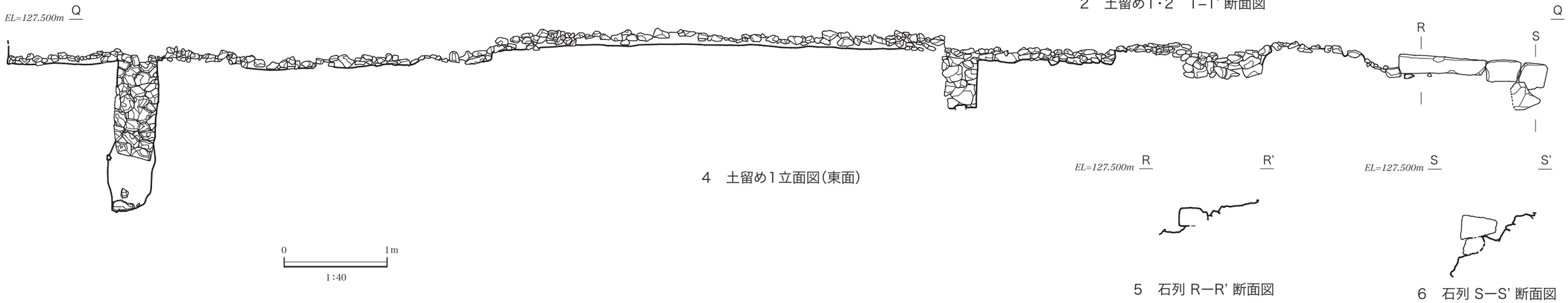
1　造成遺構平面図



3　土留め2立面図(東面)



2　土留め1・2　T−T' 断面図

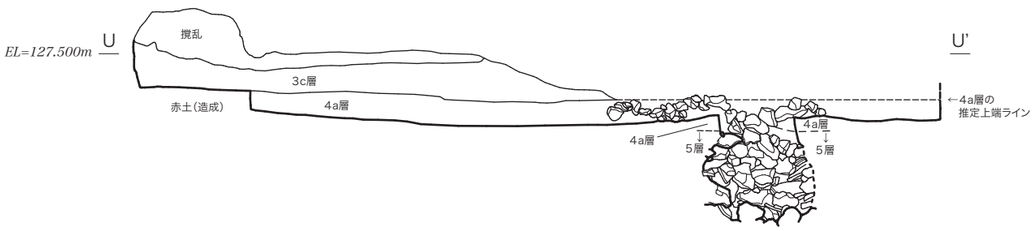


4　土留め1立面図(東面)

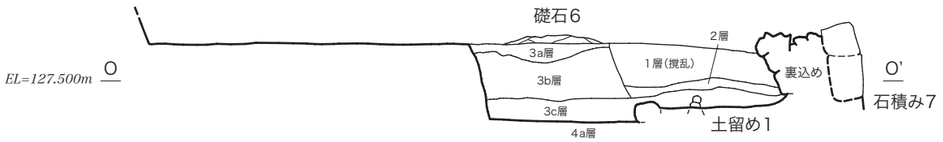
5　石列 R−R' 断面図

6　石列 S−S' 断面図

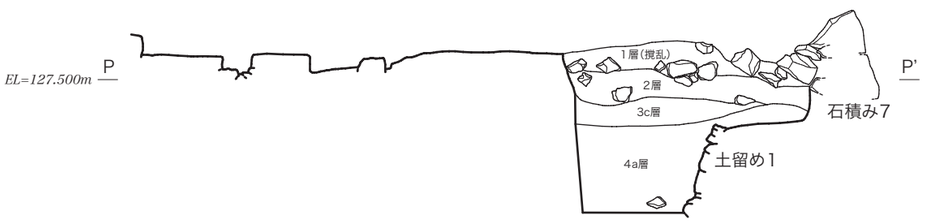
第33図　造成遺構1



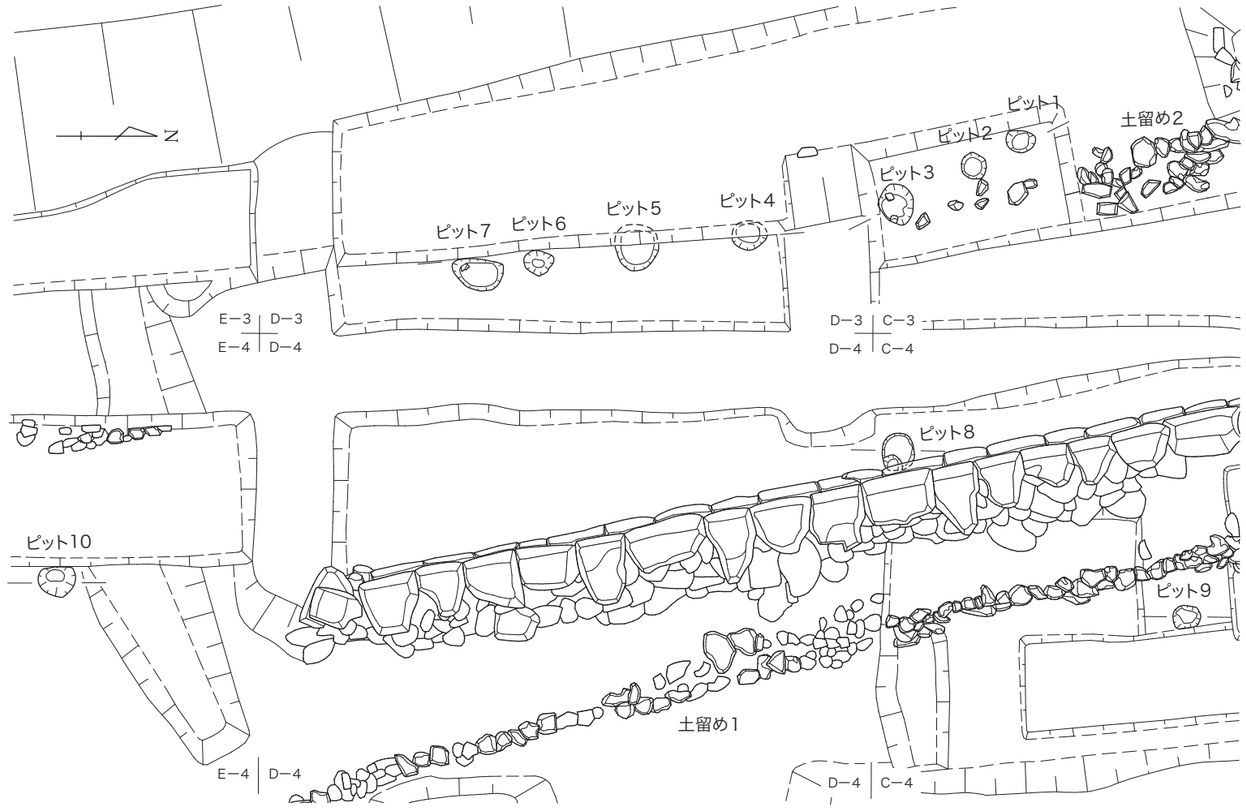
1　土留め2　U—U' 断面図



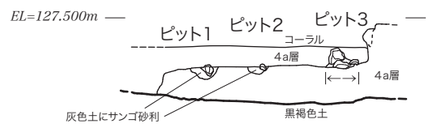
2　土留め1　0—0' 断面図



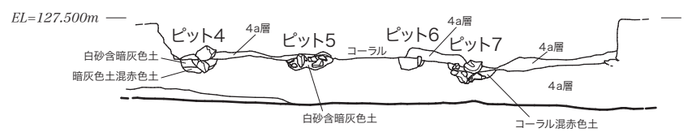
3　土留め1　P—P' 断面図



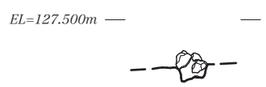
4　ピット1～10 平面図



5　ピット1～3 断面図(東壁)

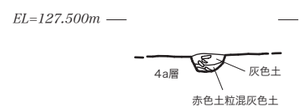


6　ピット4～7 断面図(東壁)

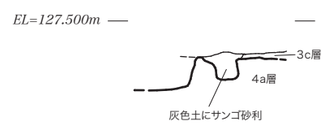


7　ピット3断面図(東壁)

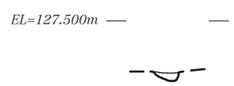
8　ピット8 断面図(東壁)



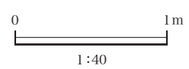
9　ピット10 断面図①(南壁)



10　ピット10 断面図②(東壁)



11　ピット9断面図(西壁)



第34図　造成遺構２

１．造成遺構・土留め１・２（南から）

２．造成遺構・土留め２（東から）

図版16　造成遺構・土留め１

１．造成遺構・土留め１・２（東から）

２．造成遺構・土留め２（東から）

３．造成遺構・土留め下部（東から）

図版17　造成遺構・土留め２

1．造成遺構　第５Ｃ層表面

2．第５層朝鮮産象嵌青磁出土状況

3．造成遺構　第４層・第５層堆積状況

図版18　造成遺構堆積状況・遺物出土状況

②土留め（第33・34図、図版16・17）

土留めは2列が確認されている。先の造成土の項でも記したが、この遺構は、赤色造成土中に埋められた状態にあり、確認用のトレンチを設けたことにより発見されたものである。ここでは東側を土留め1、西側を土留め2として報告する。

土留め1は、C・D・E-4、F-5グリッドにかけて見られ、第6層の炭層上に石灰岩の小礫を敷き詰めて根固めとし（図版17）、その直上に造成土の壁面に貼り付けるように石灰岩礫を積み上げている。高さは約110㎝、検出した長さは約12mを測る。土留めの下部は、20㎝内外の礫を約50㎝幅で積み上げられている。上部に行くにつれ、10㎝前後の小振りの石へと変わり、最上部では1～2列の石が並べられ、10㎝内外の幅で収まる。そのため、断面は上部が尖る三角形を呈するが、西側に約80度の勾配で積まれていることから、西側の赤色造成土を投入後に、その造成土の壁面に礫を貼り付けて土留めとした工程が想定できる。この土留め1は、北側で石積み2の南面にぶつかるが、南側は調査区外にあり全長は不明である（第33図）。

なお、この土留め1北端に連なるように、B-4グリッドにおいて、石積み1の上に乗る形で切石が3点検出されているが、その関連については判然としない。

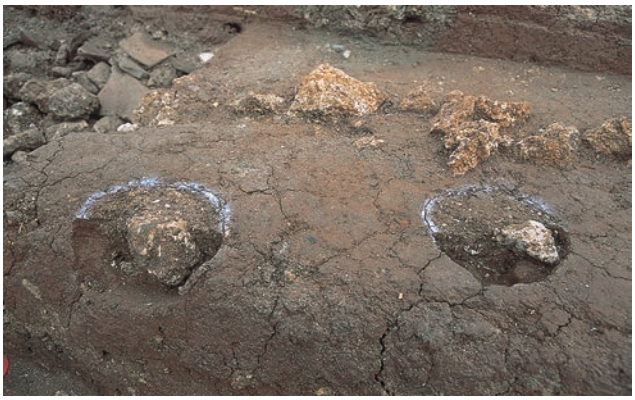
続いて土留め2は、C・D-3、E・F-4グリッドにかけ、土留め1の西側約280㎝の位置に並行して検出されている。工程及び礫の大きさ等は土留め1と同様である。高さは約120㎝、長さ約12mを検出した。傾斜角は約80度であり、遺構北端も同様な勾配を有することから、造成土は西側から順に投入されたことがわかる。この土留め2は、D-3グリッド中にも連続して埋蔵されていると思われるが、その地点にピットが集中して検出されており、遺構を保護するため確認は行っていない。この土留め2も、北側は石積み2の南面にあたることで北端とするが、南側は調査区外のため全長は不明である。

③ピット（第34図、図版19・20）

平成19（2007）年度調査区のC・D-3、C-4、E-4グリッドにおいて、第4層赤色造成土上に、ピットが計12ヶ所検出されている。平面形は円形～楕円形を呈し、直径は15～35㎝に収まるが、20㎝以内の小型のピットが多い。C・D-3グリッドにおいては7ヶ所が確認されており、ほぼ南北方向に並ぶように確認できるが、その間隔が定まっていないことと、グリッドの西側が後世の配管工事により破壊を受けており確認できないが、規則性は確認できない。

なお、本ピット内からは、一部で貝類や褐釉陶器片が少量出土したのみで、ほかは珊瑚砂利及び石灰岩礫が入った状況が確認されている。また、その深さは10㎝内外と浅く、遺物包含層が伴っていない。この点と、ピットが赤色造成土上にあり、その直上は一連の造成土であるコーラル層が積み上げられている点からも、建物柱跡としてのピットではなく、造成工事等に伴う足場及び支柱を一時的に設置した痕跡の可能性が考えられる。

図版19　第４層上面ピット検出状況（北から）



1．ピット１・２半裁（西から）

2．ピット４・５半裁（西から）

3．ピット６・７半裁（西から）

4．ピット８半裁（西から）

5．ピット９平面

6．ピット10半裁（西から）

7．ピット11半裁（北から）

8．ピット12半裁（北から）

図版20　造成遺構・ピット

１．石積み１・２間栗石内　銭貨出土状況

２．石積み１・２間栗石内　武具出土状況

図版21　石積み１・２間栗石内遺物出土状況

３．基壇状遺構・側溝状遺構

本遺構は、平成11（1999）年度及び19（2007）年度の両調査において検出され、図面上で接合された遺構である。平成11（1999）年度においては、I・J-６・７グリッド、平成19（2007）年度にはB・C-４、C-３グリッドにおいて検出している。検出した範囲は、南北に11m、東西９mであるが、南及び西側は戦後の開発により破壊されているため、全長は不明である。北東角は角を面取りし、台形状に240㎝の長さで縁石が並べられている（第35・36図、図版22～24）。

基壇面と下部舗装面との高低差は、東辺において約20㎝で、一部撹乱により破壊された下部舗装面を掘り下げたところ、縁石は約30㎝がコーラルの造成土に入り込み、底面には赤色造成土が見られた。縁石は長さ20～40㎝、高さ約50㎝で、縦長の石を配置するのと、20～30㎝の高さの石を２段に組み合わせ、50㎝の高さにしている部分が見られる。控えは方形・三角形の２種が認められる。基壇の北辺は側溝と思われる溝が、切石を対面させて約20㎝幅で約１m東西に走るが、西側は約２m分断し、1.2m幅で下段の1段が残る。この状況から、基壇状遺構及び側溝はさらに東西方向へ延びていたことが考えられる。

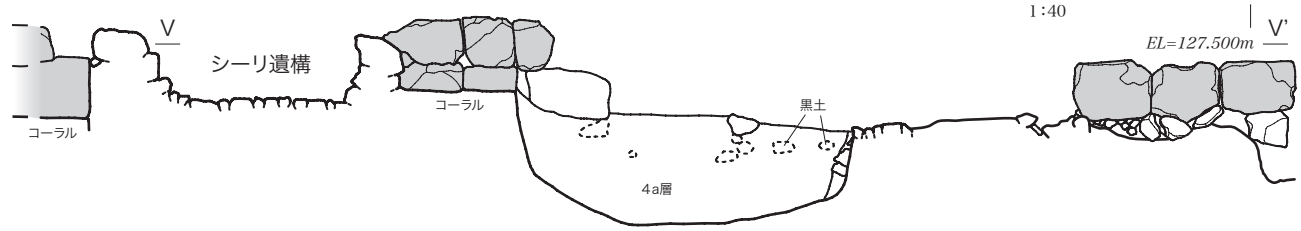
一方、側溝の東側部分は、17世紀に築造されたシーリ遺構により破壊されており、全長は不明である（第35図、図版22）。この側溝内部に底石は見られないものの、南側で切石２段が約40㎝、北側で1段が約30㎝の高さで裏込めに達する。側溝の北側には、１m離れて切石が北面して並べられており、これも基壇に関連する遺構と考えられるが、その北側が破壊されているため、つながりは判然としない。しかし、基壇下部の舗装面と思われる黄褐色のコーラル層がわずかに残されていたことから、基壇外面はこの面にあたると思われる。

遺構の表面は全面が被熱を受け、縁石の石灰岩は赤く変色しているうえ、脆くなり亀裂や剥離が進む。また、この面からの遺物も焼けただれた状態で出土している（図版22）。

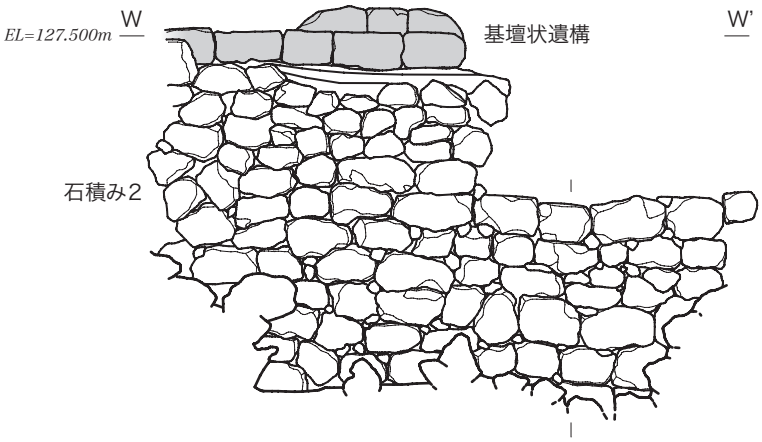
出土遺物は、遺構面及び溝の中から、陶磁器や金属製品が二次的に焼けた状態で多数得られている。中でも中国産の陶磁器類は、14世紀後半から15世紀前半の時期を示しており、接合率が高く良好な状態で出土している（第38図、図版27−１・２）。

また、基壇内面及びその東側の基壇外面は、コーラルにより固く舗装がされ、内面には規則的に礎石が配置されている。このことから、当遺構はこの礎石建物跡の基壇としての性格が考えられ、その北側には、排水用の溝が巡らされていたことが想定できる。

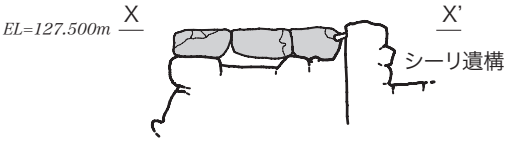
1　基壇状遺構・側溝平面図



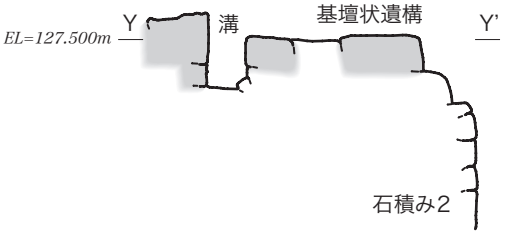
2　側溝 V−V' 立面図(北面)



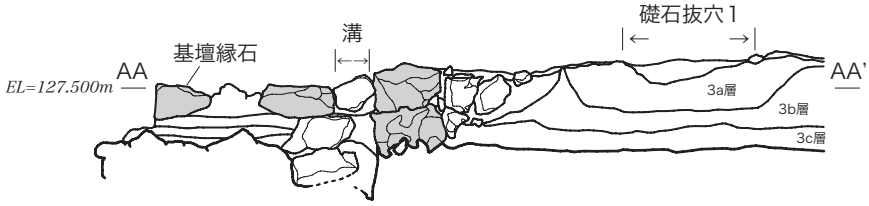
3　基壇状遺構 W−W' 立面図(北面)



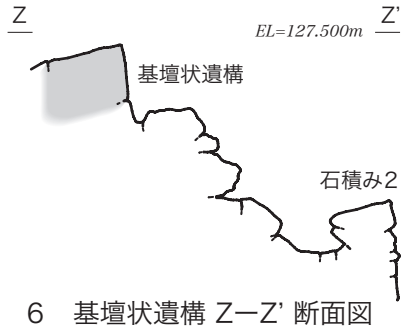
4　側溝 X−X' 立面図(南面)



5　基壇状遺構・側溝 Y−Y' 断面図



7　基壇状遺構・側溝AA−AA'断面図



6　基壇状遺構 Z−Z' 断面図

第35図　基壇状遺構・側溝

1．基壇状遺構・側溝状遺構（北から）

2．基壇状遺構・側溝状遺構平面・遺物出土状況

図版22　基壇状遺構・側溝状遺構（H19）1

１．基壇状遺構（南西から）

２．基壇状遺構・側溝状遺構側面（西から）

図版23　基壇状遺構・側溝状遺構（H19）２

1．基壇状遺構（南から）

2．基壇状遺構（北から）

3．基壇状遺構（東から）

図版24　基壇状遺構・礎石建物跡（H11）3

４．礎石建物跡

この礎石建物跡も、前項の基壇状遺構同様、平成11（1999）年度及び19（2007）年度にかけて検出した遺構で、平成11（1999）年度ではI・J-６グリッド、平成19（2007）年度調査ではC・D-４・５グリッドにおいて見られる。西及び南側は戦後の開発により破壊されている。本遺構は、内郭の大規模な造成工事の痕跡である第３～５層上に位置する。遺構面はコーラルの舗装面で覆われ、その中に規則的に礎石及び礎石が外れ、その抜け穴が残った状態の遺構が確認されている（第36～39図、図版24～27）。

礎石は６点が検出されている。すべて細粒砂岩（ニービ）製で、長軸80㎝以内、短軸65㎝以上の扁平な自然石を用いている。そのため平面観は不定形で、表面は６点とも被熱により剥離していることから、当初のレベルは判然としない。この中で、礎石１～５は、周辺の抜け穴とも規則性を持って配置されるが、礎石６はこの区画から若干はずれている。この理由として、礎石６は琉球大学石積みの裏込めに近接しており、その開発の際に移動した可能性が考えられる。

一方、礎石抜け穴は４箇所で検出されており、第３層表面が円形にくぼむ状況が確認できる。長軸は120㎝以内、短軸は70㎝と不揃いである点は、礎石のサイズと共通する。くぼみの深さは10㎝～20㎝で、残存する礎石の底面も同様な深さが想定できる。

このうち、規格性を有する礎石及び抜け穴の間隔は、120～140㎝であるが、その中央付近をつなぐと、約220㎝の間隔で結ぶことが可能であり、今調査では南北に３間、東西に２間の区画で検出していることになる。しかし、基壇状遺構は礎石の範囲外にも延びており、当初は少なくとも南北４間以上、東西に３間以上の規模を有する建造物が存在していた可能性がある（第36図）。

また、これらの下部舗装面の堆積状況を確認するため、礎石４・５では南北にトレンチを設け、礎石６は撹乱部除去後の断面を観察した。その結果、ここで第３層としている舗装面及び造成土は、第４層である赤色造成土上に、微細なコーラル層で石灰岩礫をサンドするように堆積しているが、礎石及び礎石抜け穴の下部にのみ、コーラル層が厚く敷かれて強固に造成していることが判明した。この状況は、礎石の沈み込みを防ぐ工夫が考えられる（第37図、図版26）。

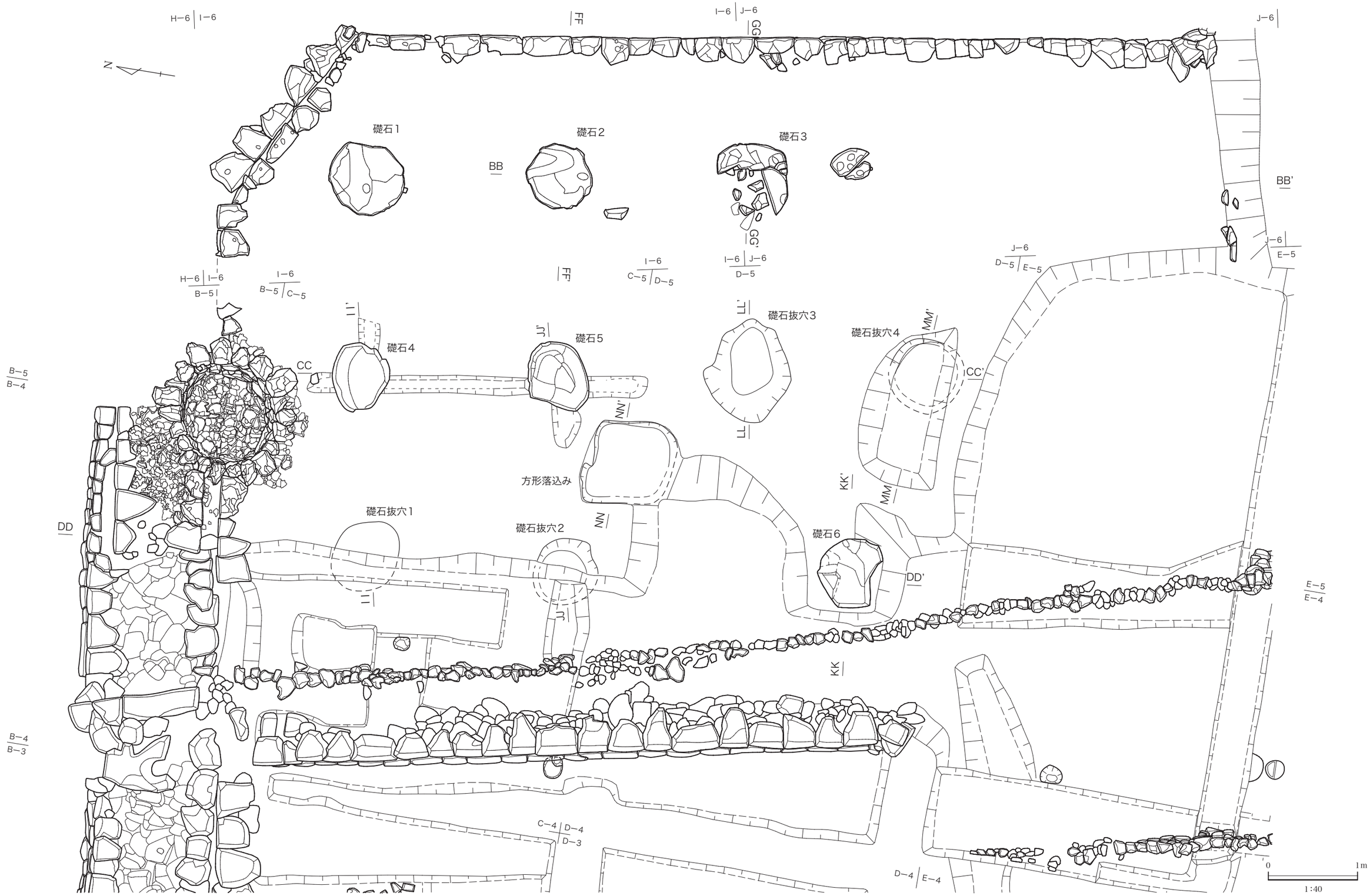
この遺構面からの出土遺物は、中国産陶磁器類のほか、鉄及び青銅製品が多く得られているが、その大半は被熱によりただれ、融解している状況である。その時期は、14世紀後半から15世紀前半を指しており、この時期に火災が起こったことを示しているものと思われ（第38図）、遺構表面より得られた炭化物を放射性年代測定にかけた結果、補正年代で600±30BPの数値が得られている。

なお、平成19（2007）年度調査区のC・D-４・５グリッド交点には、約１ｍ四方で方形の落ち込みが確認されている（第36図、図版27－３）。当初は方形礎石の抜け穴を想定していたが、周辺の礎石や抜け穴の区画から外れることから、何らかの理由で掘りくぼめられたことが考えられる。この落ち込み内部からは、陶磁器や金属製品が出土しており、陶磁器の年代は15～16世紀と、礎石建物跡の年代から若干くだる年代が得られている（第39図、図版27－４）。この点からも、礎石建物跡以降の落ち込みであることがわかる。

1．礎石建物跡平面

2．礎石建物跡（南東から）

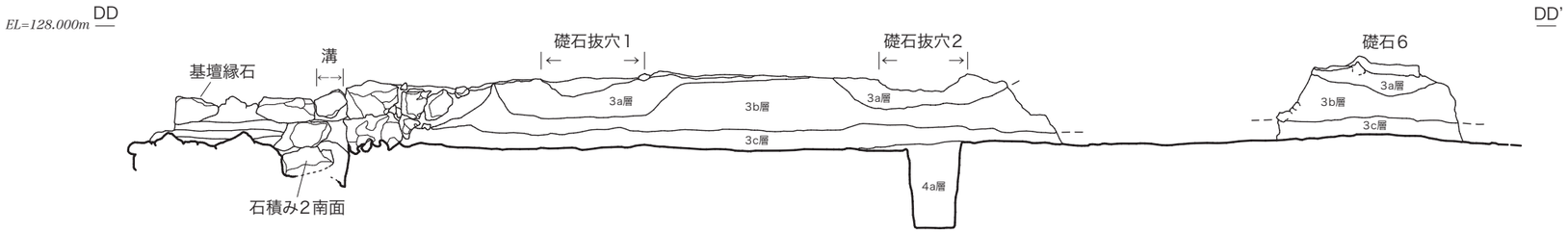
図版25　礎石建物跡（H19）1



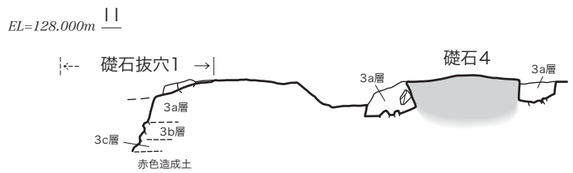
第36図　礎石建物跡１平面図

1　礎石建物跡BB－BB' 断面図

2　礎石建物跡CC－CC' 断面図



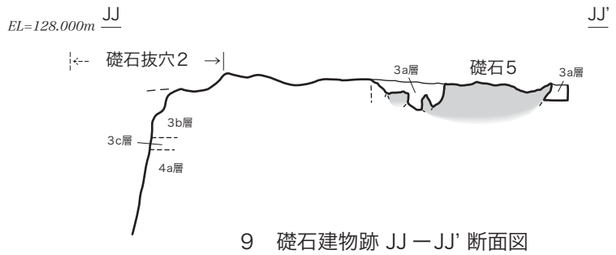
3　礎石建物跡DD－DD' 断面図



8　礎石建物跡 II－II' 断面図

11　礎石建物跡LL－LL' 断面図

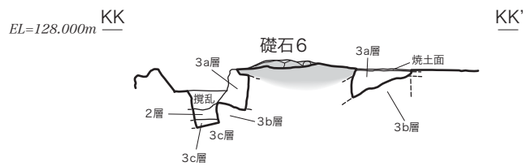
5　礎石建物跡FF－FF' 断面図



9　礎石建物跡 JJ －JJ' 断面図

12　礎石建物跡MM－MM' 断面図

6　礎石建物跡GG－GG' 断面図



10　礎石建物跡 KK －KK' 断面図

13　礎石建物跡NN－NN' 断面図

0　1m
1:40

第37図　礎石建物跡２

1．礎石４・トレンチ断面（西から）

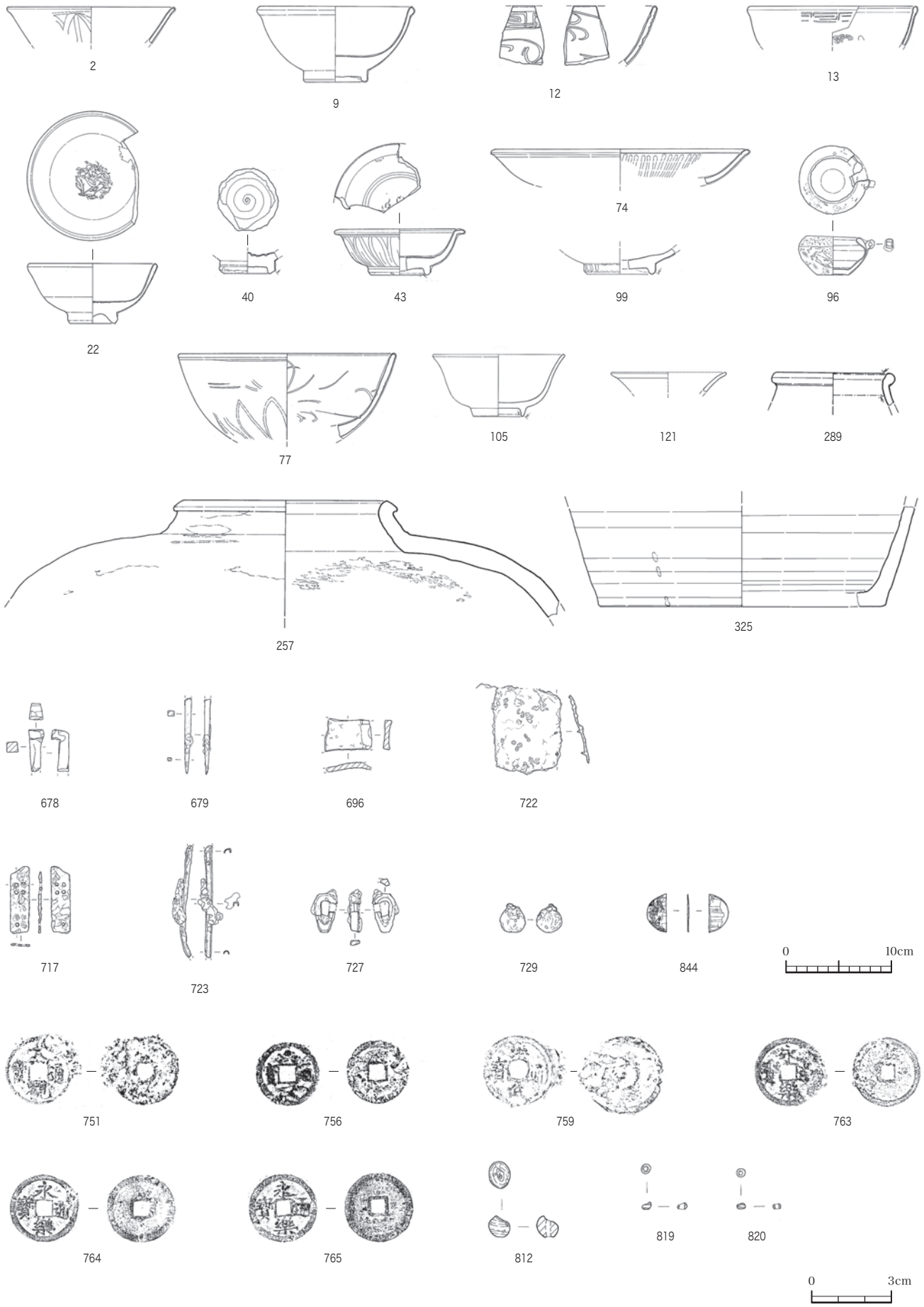
2．礎石５・トレンチ断面（西から）

3．礎石６・トレンチ断面（西から）

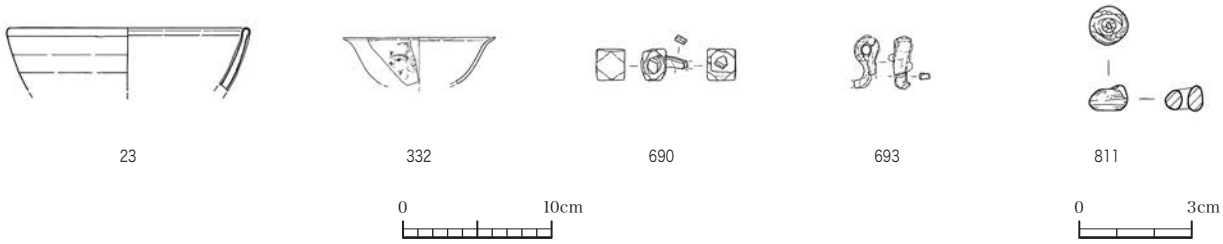
4．礎石抜け穴１（西から）

5．礎石及び礎石抜け穴・第３層堆積状況（西から）

図版26　礎石建物跡（H19）２



第38図　基壇状遺構・礎石建物跡（３層表面）出土遺物



第39図　方形落ち込み出土遺物

１．基壇状遺構青磁鉢出土状況

２．側溝遺構内　青磁餌入れ出土状況

３．方形落ち込み半裁状況

４．方形落ち込み内白磁金彩小碗出土状況

図版27　基壇状遺構・礎石建物跡遺物出土状況

５．淑順門南側遺構

淑順門は、御内原と表とを往来できる境界部分にあたる。そのため、かつては門の北側に門番が配置され、出入りを厳しく取り締まっていたとされる。

今報告分の北側にあたる淑順門地区の発掘調査は、平成16（2004）年度に行われ、門の根石や石畳等、多くの遺構が検出をみており、平成18（2006）年度に報告されている（沖縄県立埋蔵文化財センター2006）。平成19（2007）年度の調査では、その南側に接する部分について調査を行い、淑順門に関連する遺構を各種検出している。次に遺構ごとの報告を行う。

①階段遺構（第40図、図版28・29）

階段遺構はA・B-２・３グリッドにおいて検出されている。淑順門の南側に位置しており、門を抜けて御内原へ上るための階段のひとつである。平成16（2004）年度の調査時には、階段１として門部分及び階段の２段目蹴上げ付近まで検出していたが、調査区の南端法面に位置していたことから、その続きを検出するに至らなかった。

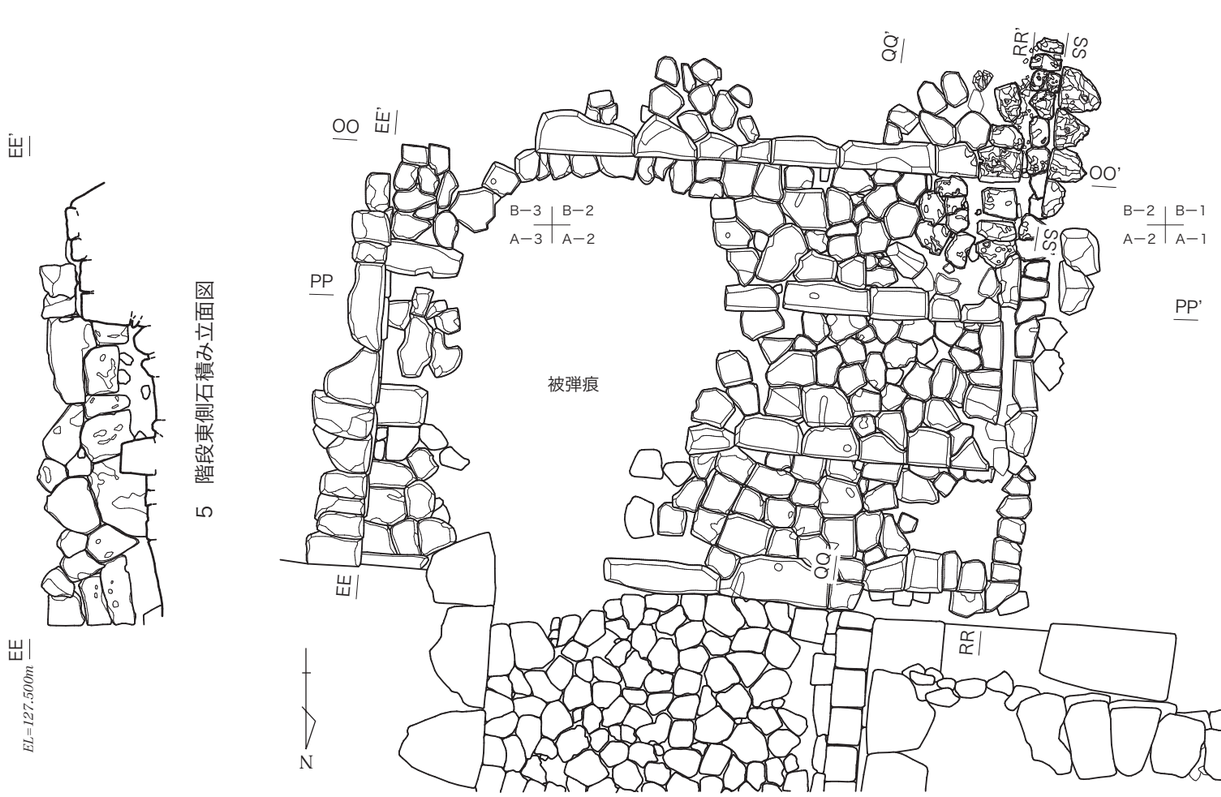
今回の調査では、それに続く３・４段目の階段及びこれに並行する側溝等を検出した。ただし、遺構の東側は、直径約２ｍの範囲でほぼ円形に破壊されており、その内部には階段を構成していた多くの切石や現代遺物が含まれる。この状況から、破壊部分は沖縄戦時に爆撃を受けたことが想定できる。

３段目の階段は、２段目の蹴上から約50㎝南に位置し、蹴上の高さは約18㎝で、長さ20～60㎝、控えは約20㎝の石を並べている。石の上面及び角は摩耗を受けて光沢を発する。４段目階段までの距離も約50㎝で、傾斜角は約６～７度である。4段目は蹴上の一部及び、付随する石畳が部分的にみられ、蹴上の高さ及びサイズは３段目と同様である。この４段目付近は石畳がまばらで土の面が広がるが、砲弾穴や開発による改変の痕跡がみられないことから、遺構は戦前の状態を保っている可能性がある。

②側溝遺構（第40図、図版28・29）

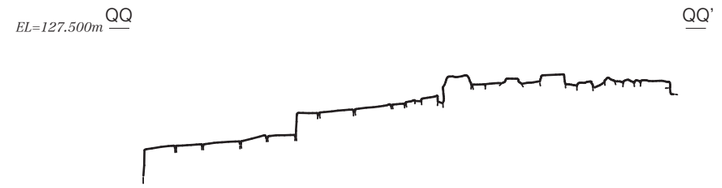
A・B-２グリッドの階段遺構西側に接し、側溝遺構が検出されている。幅は約20㎝で、長さ約3.5mが検出されるが、北側は淑順門南側に当たり、門の内側西端に伝うように敷設された側溝へとつながるが、南側は破壊され、全長及びつながりを確認することはできない。側溝の縁石は、東側では階段の側面を兼用しており、蹴上部分で約30㎝の高さを有する。西側は切石を用いているが、破壊が著しく、当初の姿を留めていない。底石は石灰岩を密に敷き、北へ10～15度傾斜させている。蓋石は確認されていない。

これら淑順門南側からの出土遺物は、検出遺構が戦前まで機能していたこと及び、沖縄戦で一部が破壊されていることにより、現代遺物が占めているが、その中で淑順門と関わりがあるとみられる錠前の鍵や部品等の遺物が出土している。これらの遺物は撹乱層からの出土であることから、第５章遺物の章で報告する

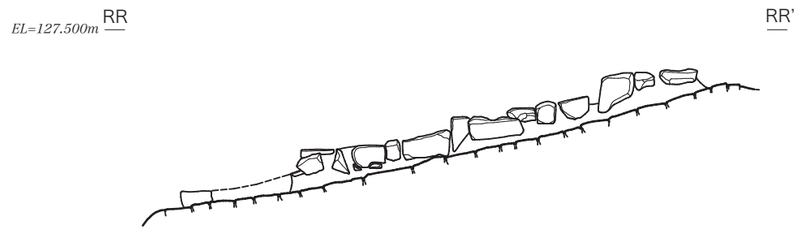


5　階段東側石積み立面図

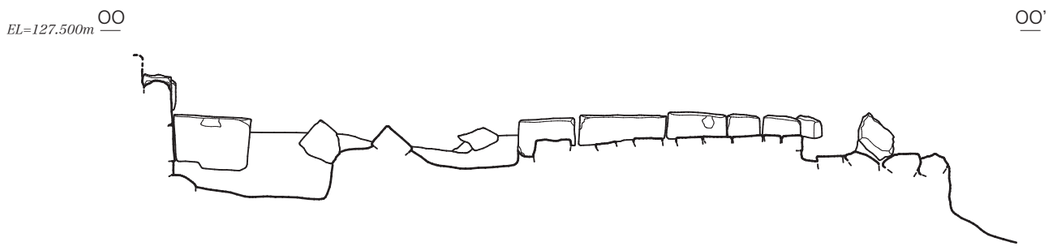
1　淑順門南側遺構平面図



4　階段遺構QQ−QQ' 断面図

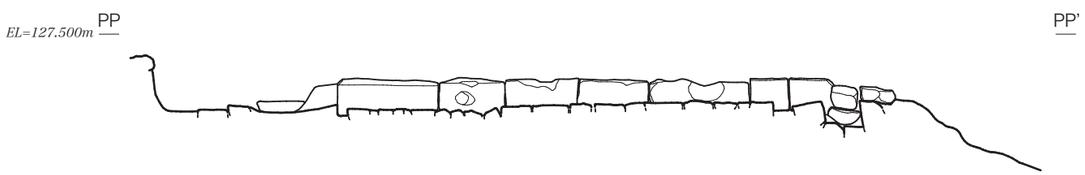


6　側溝遺構 RR−RR' 立面図(西面)



2　階段遺構 OO−OO' 立面図(北面)

7　側溝遺構 SS−SS' 立面図(東面)



3　階段遺構 PP−PP' 立面図(北面)

0　1m
1:40

第40図　淑順門南側遺構

1．淑順門南側遺構

2．階段遺構・側溝遺構平面

図版28　淑順門南側遺構１

1．階段遺構・側溝遺構（東から）

2．側溝遺構（南から）

3．側溝遺構（北から）

図版29　淑順門南側遺構２

６．シーリ遺構

シーリ遺構は、平成19（2007）年度調査において、B・C-４・５グリッドで検出した遺構である（第41・42図、図版30・31）。遺構は天端石が破壊されているため、当初の規模を知ることはできないが、琉球石灰岩を円筒形に積み上げたもので、その外観から当初は井戸を想定し、円形石組み遺構と称して調査を開始した。残存部の口径は約110㎝、底径約90㎝、深さ約60㎝を測る。遺構断面は逆台形を呈し、控えの長い人頭大の雑切石を側石として密に積み、最大４段が残る。その積み方からは、築造に際し側石を円筒形に施工後、底面として大小の礫を平坦に敷き詰める工程を読むことができる。

遺構内の調査は、南北位に断面観察用のベルトを設けて掘り下げを開始した。その後間もなく、内部に堆積する土は大きく上下２層に区分できることがわかってきた（第41図２、図版31－１）。上層は遺構廃棄後に堆積したと考えられる木炭及び瓦類を多く含む密な粘土層、その下部は締まりのない腐葉土状の黒褐色土壌が主体で、多量の獣魚骨を含み、明らかに周辺の状況と異なる。この時点で、遺構は井戸ではなく、生活ゴミを廃棄したシーリの可能性が生じてきた。シーリとは、沖縄の方言で生ゴミを廃棄する穴や、肥溜めを指している。

この断面観察用のベルトにおいて、土壌の堆積状況をつぶさに観察すると、遺構断面形状に沿うように、逆放物線状に幾重にも層を成すことがわかる（第41図－3、図版31－１）。この状況は、日々の廃棄物が堆積していく様子を現すとともに、これらが遺構上部まで溜まると、上から掻き出していたことが考えられる。また、遺構の断面形状が開口部で広がる逆台形であることも、掻き出しやすさを考慮したものと思われる（第41図３・４、図版30－２）。

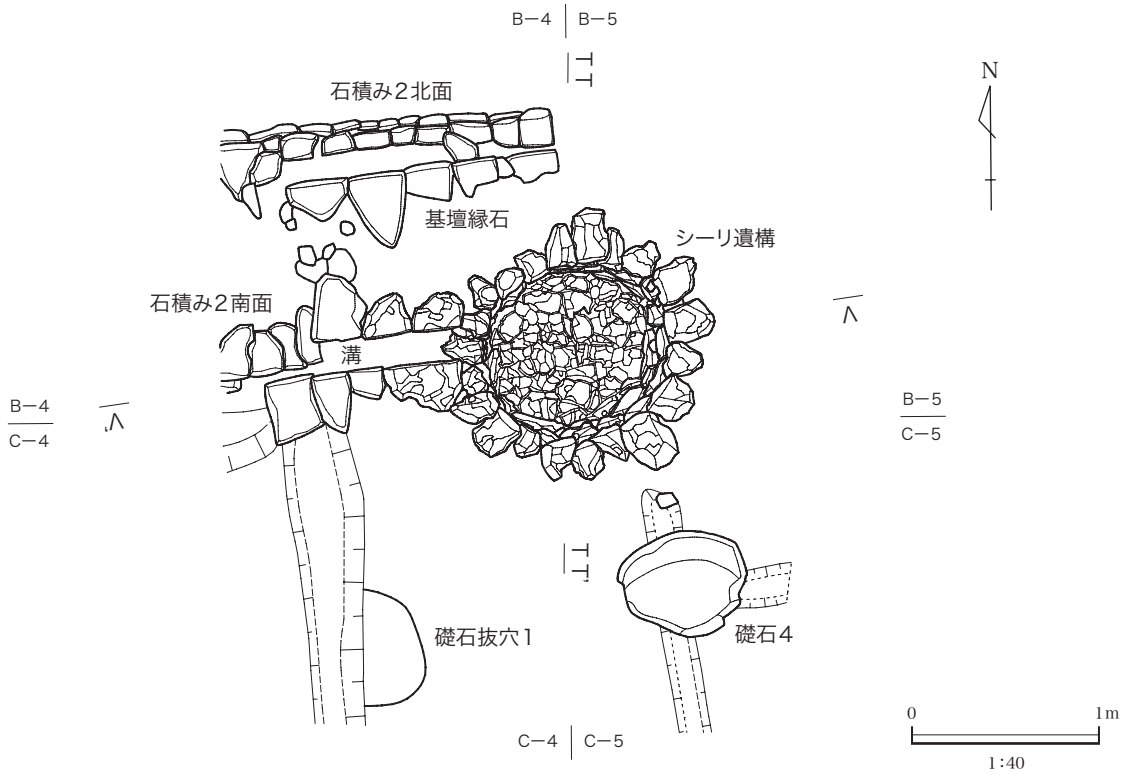
この遺構内の堆積土には、調査時では採取が困難な多くの微小遺物が含まれることから、詳細な分析を目的に、堆積土の全量にあたる土嚢32点分を回収し、天日による乾燥・計量後、水洗により浮遊する遺物とサイズの異なる数種のメッシュにかかる遺物を採取した。その後、遺構中央に設けたベルトより抽出した遺物を中心に選別・分類・同定作業を行った。

次に、遺構内から出土した人工遺物の量は自然遺物に比して少ないが、中国、タイ、肥前、沖縄産の陶磁器類をはじめ、骨製品、キセル、木製品、銭貨、鉄釘等で構成されている。その年代は、中国産陶磁器から17世紀前半に位置付けることができる（第42図）。

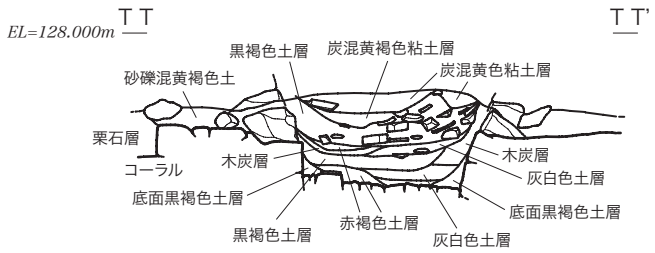
自然遺物は数量・種類ともに膨大な量であった。特に魚骨の多さで掘り下げが困難なほどで、大型魚が顕著に見られる。哺乳類ではイヌ、シカ、ネズミが見え、鳥類はニワトリやカモの類、その他爬虫類としてヘビの骨も出土している。また、微小な昆虫類の体節部も多数出土しており、これはネズミと同様、生ゴミを目的として遺構内に侵入したものと考えられる。

貝類では、小型の巻貝カンギクや二枚貝のアラスジケマンガイが比較的多く得られ、その他数種が認められる。自然遺物ではこれら動物遺体のほか、植物の種実類が多数含まれ、ヒトの歯や糞石も得られている（図版31－４）。これらの出土遺物や状況から、遺構は17世紀前半を中心に、一帯の生ゴミをはじめとした廃棄物を投棄していた遺構であることが考えられる。

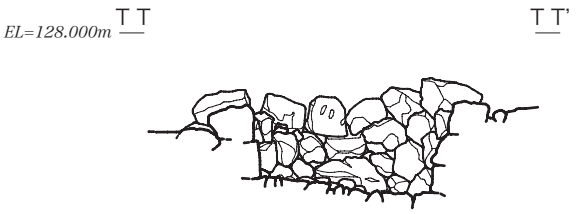
なお、遺構内の土壌及び糞石は微細遺物分析を行い、炭化物については、放射性炭素年代測定により補正年代で350±30BPの数値が得られている。また、糞石については、多くの寄生虫卵が検出され、その中でもヒトを宿主とする便虫卵が確認されていることから、糞石はヒトのものであることが考えられる。この詳細な結果は、第５章第27節シーリ遺構内の自然遺物でまとめ、分析結果は第６章自然科学分析で報告する。



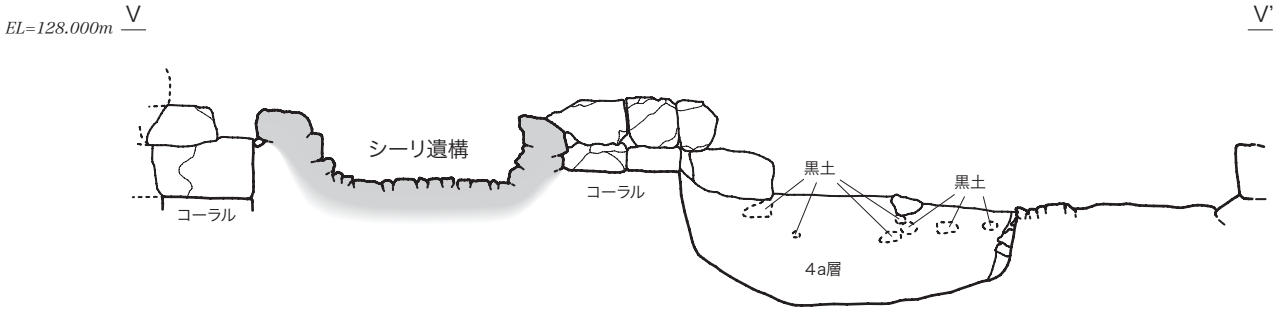
1　シーリ遺構平面図



3　シーリ遺構TT−TT' 東壁土層断面図



4　シーリ遺構TT−TT' 断面見透し図



2　シーリ遺構V−V' 断面図

第41図　シーリ遺構

１．シーリ遺構及び遺物出土状況（東から）

２．シーリ遺構完掘状況（東から）

図版30　シーリ遺構１

1．シーリ遺構内堆積土東壁

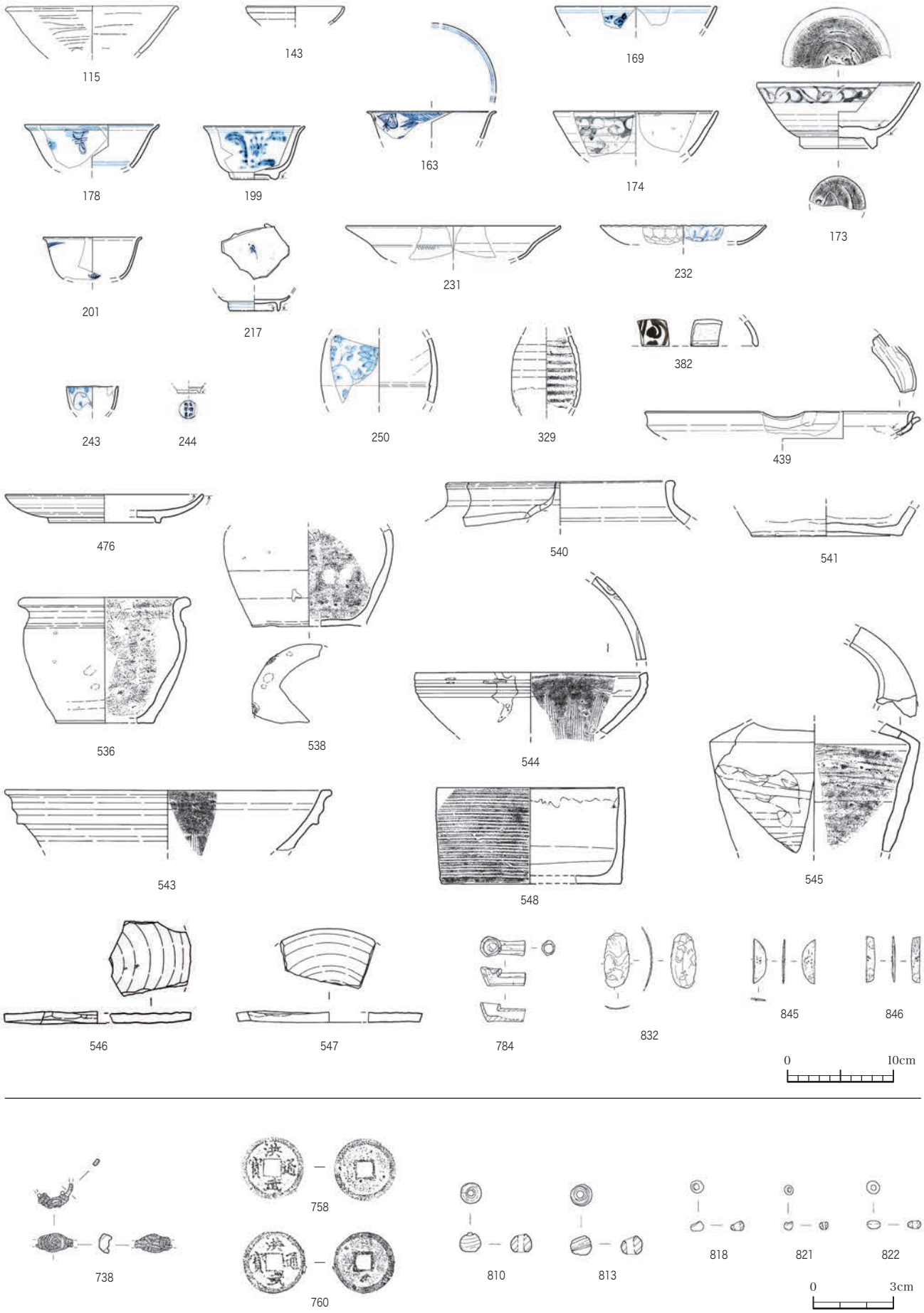
2．シーリ遺構内積み石（北から）

3．シーリ遺構内遺物出土状況

4．シーリ遺構内糞石出土状況

5．シーリ遺構発掘作業状況

図版31　シーリ遺構２



第42図　シーリ遺構出土遺物

7．台形状石組み

平成11（1999）年度調査区の中央部を占める遺構群である。I・J-7～9グリッドにかけて検出され、東西にやや長い台形状の石組みから枝分かれするように、東及び西側に石積み及び溝が多数築造されている（第43～45図、図版32・33）。

台形状石組み部分は、北辺約9m、南辺約8m、東辺約6m、西辺約4.5mの規模で積まれている。北東角付近は戦後の開発により破壊され低くなっているが、南及び西辺の天端はほぼ残存しており、高さは最大で50㎝を測る。控えの短い40㎝内外の切石を相方積みしており、かなり剥落が進むが、切石間は漆喰により目張りがされているのが確認できる（図版33－4）。遺構内部には、灰混じりの堆積層に、多量の切石や瓦が含まれている。また、その東端部では長方形の石組みが2基検出され（図版33－5）、内部には密に木炭が堆積している状況が確認されている。床石は敷かれず、礎石等も確認できないことから、建物の区画ではなさそうである。

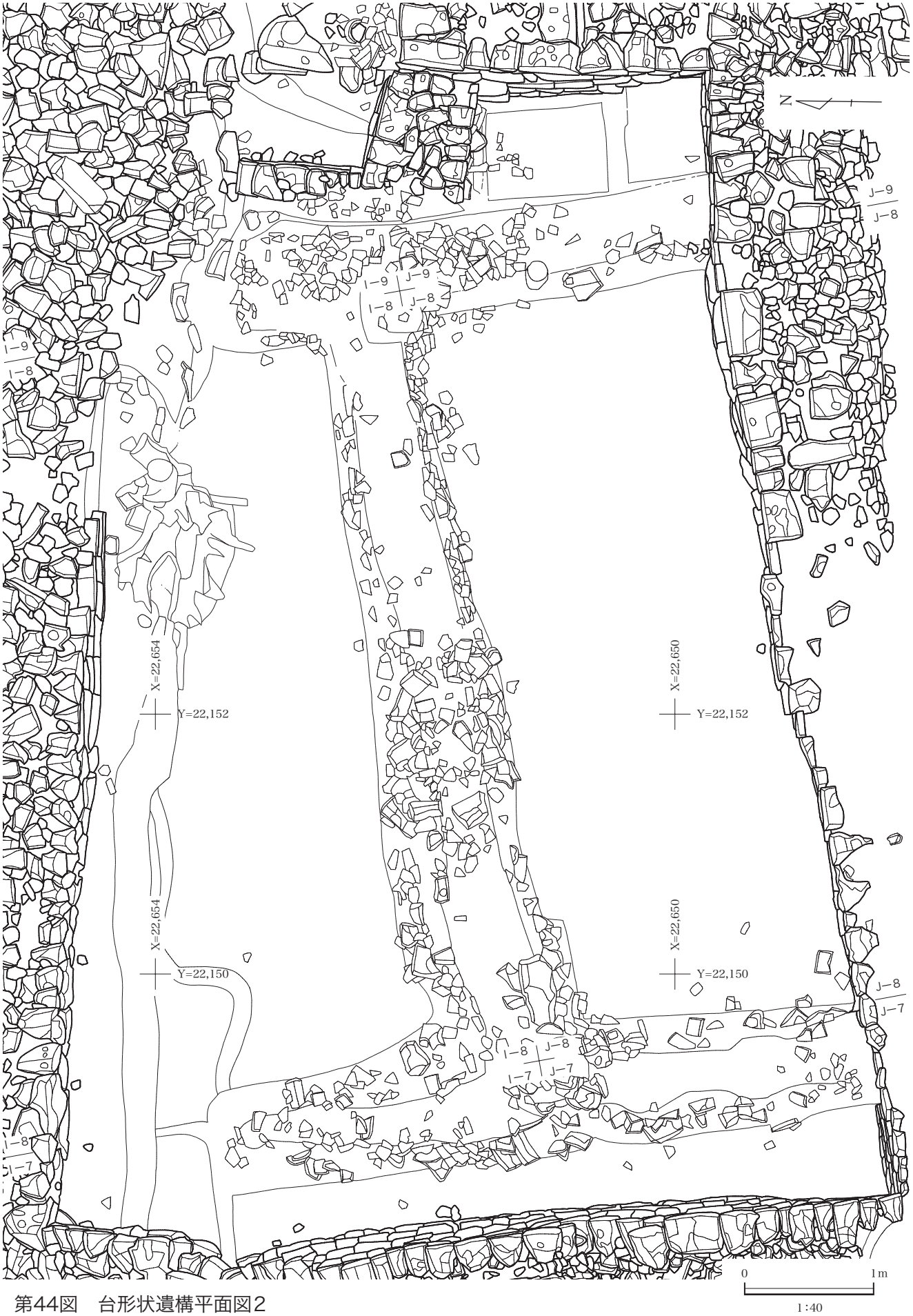
この遺構の性格を確認するため、各種絵図や平面図において同様な区画の有無を確認したところ、明治初期に引かれたとされる横内家資料平面図（第3・4図）において、女官居室の東側、内郭石積みに近接して類似する区画が確認できる。その一方、昭和初期作成の阪谷図では、この区画は描かれていない（第6図）。この理由として、首里城内には1924（大正13）年に沖縄神社が創建されるため、神社を整備する際に一帯を整地したことが考えられる。なお、横内家資料平面図には、区画の名称が記されていないことから、その性格は判然としないが、出土遺物は、明朝系の赤瓦が主体となり、近世以降の沖縄産陶器が含まれることから、近世以降のものである可能性がある。

次に、台形状石組み西側の状況は、上部に琉球大学の構築物と思われるコンクリートブロックが乗り、天端は破壊されているものの、南北方向に3列の石積みが確認できる。この内、東側の2列の石積みは両面積みの石積みで、その厚さは約80㎝である。南側は破壊されており、続きを確認することができないが、約5mの長さで北側は半円形に積まれた石組みに接する。積み石は控えの長い雑切石を相方積みにしており、最大で約60㎝の高さで残存するが、根石は確認していない。

この石積みの西側には、約20㎝の隙間をあけ、対面するように石が積まれている。当初は側溝を想定していたが、側溝にしては高く積まれており、他の機能が考えられるが、本石積みも南側が破壊されているため、性格は不明である。

続いて台形状石組み東側は、4列の石積みが2組ずつ対面し、2本の側溝を形成している。遺構は台形状石組みに連なり、東西方向に約3m延びている。これらの石積みは天端が残っておらず、東側は戦後の開発により破壊されているため、その広がり及び性格は不明である。しかし、これらの遺構は当時の遺構面と考えられるレベルを掘り下げて築造されていると見られ、また、台形状遺構の石積みに漆喰の目張りがされている点と、そこから連なる溝状の遺構から、貯水等の水に関わる機能を想定することができる（図版33－1・3・4）。

第43図　台形状石組み平面図1（西側）



第44図　台形状遺構平面図2

第45図　台形状遺構平面図3

1．台形状石組み南側（東から）

2．台形状石組み西側（南から）

3．台形状石組み（北西から）

4．台形状石組み（南西から）

5．台形状石組み西側石積み（西から）

6．台形状石組み西側石積み（北から）

図版32　台形状石組み１

1．台形状石組み東側石積み（南東から）

2．台形状石組み西側（北から）

3．台形状石組み東側作業状況（東から）

4．台形状石組み石積み（漆喰目張り）

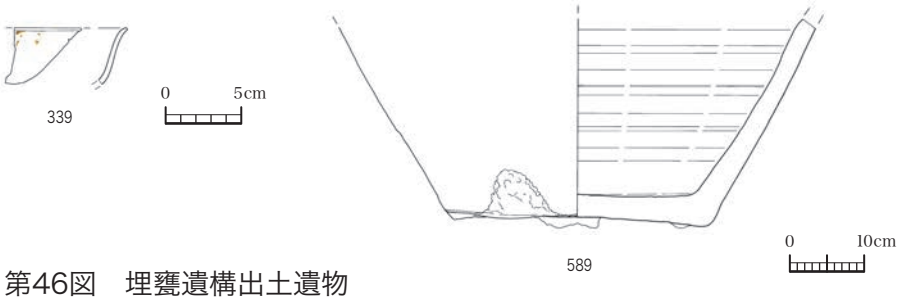
5．台形状石組み東側枡状遺構（西から）

6．台形状石組み作業状況（西から）

図版33　台形状石組み２

8．埋甕遺構

淑順門南側に検出された埋甕跡で（図版34−1）、大甕底径より10㎝前後広めに掘り窪めた穴に、甕の底部のみが残存していた（第46・47図、図版34）。この埋甕跡は門へとつながる石畳及び階段が広がる区域内にあるが、階段西端の側溝上にかかる位置に埋設されていることと、埋甕土壙内から19世紀以降に生産された沖縄産擂鉢片が得られている点、また、周辺の撹乱層から、甕の同一個体と思われる口縁部を含む破片が得られていることから、埋甕は安定させる目的で底部のみが浅く埋められた状態で、戦前まで存在していた可能性がある。



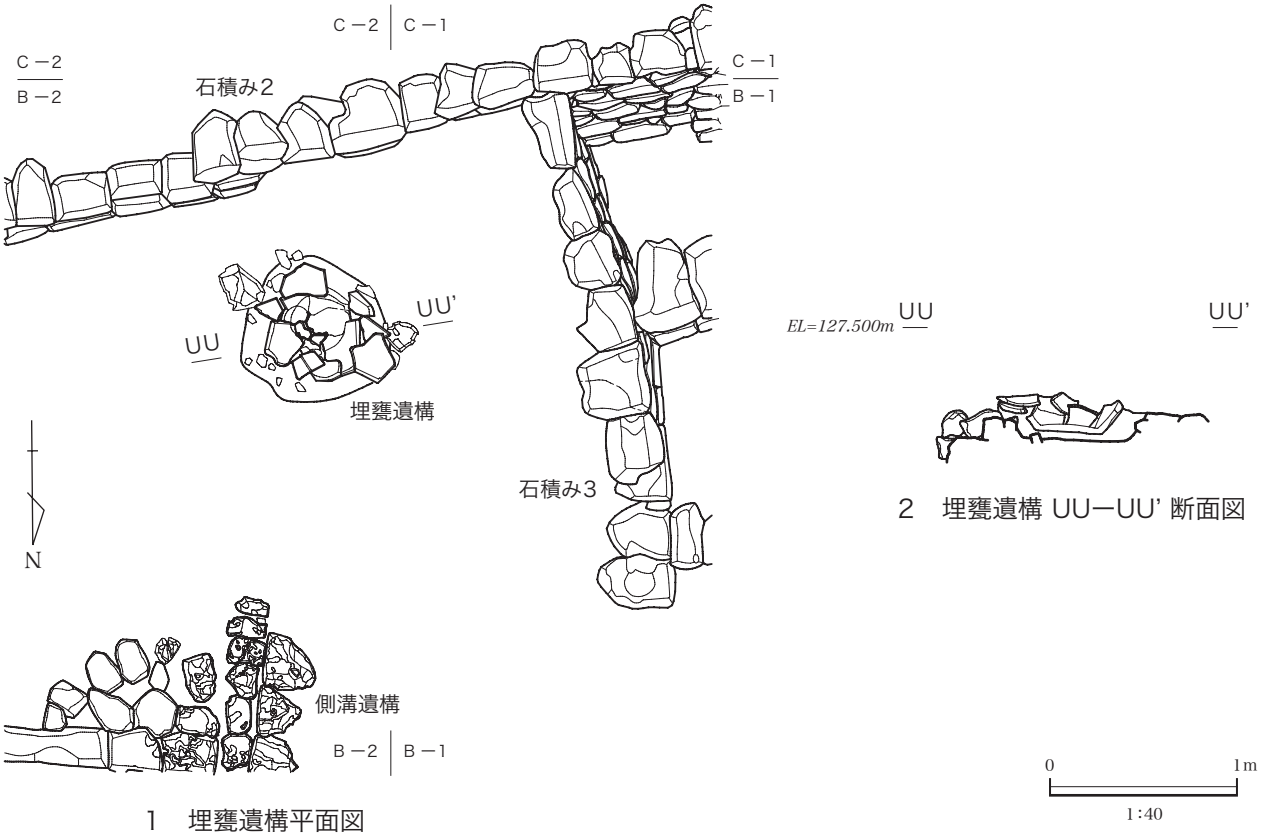
第46図　埋甕遺構出土遺物

9．小 結

以上、遺構の特徴と共伴する主な遺物について報告を行った。この御内原北地区は、沖縄戦以前より幾多の改変を受けてきた地点にあり、調査により検出される遺構の年代も様々である。そのため、近世以降の絵図や平面図において確認される遺構もあれば、それ以前に築造された遺構も存在する。特に後者の遺構に関しては、性格が判然としない場合が多いが、近世以降のものに関して絵図や平面図等に確認できても、名称が記されていない場合や、区画から機能を類推することが困難な場合は、性格の特定に至らないことがある。

しかし、今回の調査では、古くは15世紀の段階で、首里城内郭を造成するための工程及び工法について参考になる成果を得た（石積み1～6、造成遺構）。また、15世紀代の2時期の火災の痕跡と思われる面や、基壇を有する礎石建物跡の存在が明らかになった（基壇・側溝遺構、礎石建物跡）。

続いて、近世以降には、内郭に広大な貯水等に関わる遺構が存在していた可能性があり、その一方では、城内で生じた生ゴミ等をゴミ穴に廃棄していたことが判明した（シーリ遺構）。このシーリ遺構に関しては、遺構内部に多量の自然遺物が含まれ、その内容から当時の食生活や自然環境を知ることができる。また、伴出した糞石からは、当時の人たちの健康状態や、トイレに関する習俗を類推することができるとともに、これらを一括で廃棄していたとする、当時のゴミ処理の一端をうかがうことができる。このシーリ遺構内の自然遺物については、第5章第27節にて詳細に報告し、各層・遺構の放射性炭素年代測定結果を含めた自然化学分析の結果は、第6章で報告する。また、検出した遺構の総合的な考察は、第7章の総括にて行うこととする。



1　埋甕遺構平面図

2　埋甕遺構 UU―UU' 断面図

第47図　埋甕遺構

1．埋甕遺構遠景

2．埋甕遺構平面

3．埋甕遺構半裁（南から）

4．遺構半裁作業状況

図版34　埋甕遺構